

Monthly Report

平成28年度 仙台大学入学式を挙行



入学生代表宣誓を行う山田勇司さん（スポーツ情報マスメディア学科1年一宮城・多賀城高校出身）

＜目次＞

平成28年度入学式を挙行	1
新任者教職員紹介	2～4
しばた100選に選定	5
世界のトヨタ 豊田章男社長 室伏広治博士が来訪 ～被災地アスリート支援～	6
平成28年度 教採塾	7
第10回さくらマラソン ボランティア 学生133名が大会を支える	8
第10回 仙台大学体育施設管 理士認定証授与式	11
学生の活躍	12

4月3日（日）、本学第五体育館で「平成28年度 第50回体育学部第19回大学院入学式」が執り行なわれました。新入生622人（体育学科328人・健康福祉学科102人・運動栄養学科78人・スポーツ情報マスメディア学科50人・現代武道学科42人・編入学生4人・大学院スポーツ科学研究科18人）が、大学生活の第一歩を踏み出しました。

阿部芳吉学長は、新入生に対し「夢や目標を達成するために努力してほしい。教職員はそのためのサポートをしっかりと」と激励。続いて、朴澤泰治理事長・学事顧問が「2020年東京オリンピック・パラリンピックの主体的な担い手として活躍されることを期待している」と挨拶されました。

入学者を代表して山田勇司さん（スポーツ情報マスメディア学科1年一宮城・多賀城高校出身）が「私たちは体育・スポーツ、健康に関わる諸科学を探究し、これからの時代の担い手となるよう、身体を鍛え、教養を深め、心を磨き、豊かな学生生活をおくれるよう努力して参ります」と力強く宣誓文を読み上げた後、来賓の滝口茂柴田町長からのご祝辞を頂きました。

式終了後は、式場の外で先輩たちがサークルや研究会などの勧誘を行っており、新入生を歓迎していました。新入生一人一人の大学生活が豊かで充実したものになることを教職員一同、心よりご祈念申し上げます。

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室
直通 0224 - 55 - 1802
E-Mail kouhou@sendai-u.ac.jp

平成28年度 新任者紹介 (平成28年4月1日付)

教員 10名 事務職員5名 新助手9名 臨時職員9名 計33名のみなさんが着任されました

教員

きくち ひろし 菊地 博 教授 (教職) 	これまで、中学校(英語)をはじめ、養護学校や小学校で勤務してきました。大学で勤務させていただくことになり、大変に光栄に存じます。持てる力を最大限に発揮し、学生一人一人の将来のために、努力してまいります。	なとり えいじ 名取 英二 准教授 (陸上競技) 	陸上競技を通じて仙台大学の良さを内外に発信できるよう、努力したいと思っています。よろしくお願いします。
しばら しげき 柴原 茂樹 教授 (解剖学) 	次世代を担う学生諸君に、人体構造の美しさと恒常性維持機構の素晴らしさを伝えたいと思っています。ストレス応答としての生体色素(ヘム、ビリルビン、メラニン)代謝が研究テーマです。どうぞ宜しくお願いします	えぐちち え 江口千恵特別任用講師 (養護教育) 	高校の看護科で解剖生理や精神看護など教えてきました。養護教諭の経験より、看護教育のほうですが、どちらもケア(援助)職です。大切なものは同じです。皆さん。よろしくお願いします。
すえなが せいえつ 末永 精悦 教授 (文章表現・教職) 	学生の皆さんの澆刺とした姿を見て、仙台大学の教員になれて良かったとしみじみ思います。社会に出るための礎をしっかりと築きましょう。私もできるだけの努力をする覚悟です。よろしくお願い致します。	たかはし とおる 高橋 徹 講師 (保体教育法) 	この春から体育原理を担当します。体育原理は別名、体育哲学とも呼ばれ、体育やスポーツをテーマに考え・議論する学問分野です。大好きな体育・スポーツについて学生の皆さんと大いに議論していきたいと思っています。
きのくにひろあき 紀野國宏明准教授 (現代武道学科) 	長い間、警察という社会に生きてきたので大学という環境に慣れるのに苦労しています。でも元気な学生のみなさんに接していると私も元気が湧いてくるようです。これまでの経験を活かし、学生のみなさんの将来の人間形成に少しでも役立てるよう尽力していきたいと思っています。よろしくお願いします。	みやざき としかつ 宮崎 利勝 講師 (陸上競技・投擲) 	今年度より体育学科でお世話になります柴田町生まれの宮崎利勝です。仙台大学の一員となれたこと大変嬉しく思います。陸上競技の投てきが専門です。ご指導ご支援をよろしくお願い致します。
しばたちかこ 柴田千賀子准教授 (幼児教育) 	みなさん、はじめまして。3月まで、お隣の福島県に勤務していました。4月から、桜の美しいこの地で、仙台大学の皆さんとかかわらせていただきますこと大変光栄に思っています。これから、仙台大学に貢献できるように努めてまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。	わたなべ やすのり 渡邊 泰典講師 (水泳・水球) 	伝統あふれる本学で新たな挑戦ができることを大変嬉しく思っております。水を通して研究と実践に取り組み、学生・教職員の皆様とともに学び、喜び、感動し、歩みを進めていきたいと思っています。宜しくお願い致します。

職員

ひらやま こうき 平山 耕喜さん (入試創職室担当課長) 	(株)七十七銀行から出向して参りました平山耕喜と申します。54歳の新人となりますが、初心に帰って真摯な気持ちをもって業務に取り組み、一日も早く仙台大学の戦力となるよう頑張ります。上司、同僚の皆様ならびに先生方、どうぞご指導よろしくお願いいたします。 (平成28年3月1日出向)	かとう たくま 加藤 琢磨さん (学生生活室) 	昨年度まで臨時職員として勤務させていただき、4月より学生生活室に配属となりました加藤琢磨です。 母校である仙台大学の発展に貢献できるよう努めて参りますので、宜しくお願い致します。
あおた しゆん 青田 駿 さん (情報システム室) 	今年度より、事務職員として情報システム室（LC棟）に配属されました青田駿です。 LC棟の職員として、仙台大学の発展に貢献できるよう努める所存です。どうぞ宜しくお願い致します。	すずき みお 鈴木 美生さん (事業戦略室) 	今年度から事業戦略室でお世話になります。日本国内のみならず世界で活躍する人材を多く育てられるよう、海外留学・研修の充実や海外提携校の更なる強化に励んでまいります。 まずは英語の勉強から頑張ります。よろしくお願いいたします。
おがわ あき 小川 亜紀さん (実践機構) 	スポーツ健康科学研究実践機構小川亜紀です。 2年前臨時職員として着任しましてから、日々大変お世話になっております。今後も誠心誠意努力して参りますので、ご指導ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。		

新助手

きくち はるか 菊地 遥新助手 (運動栄養学科) 	今年度より運動栄養学科の新助手となりました菊地遥と申します。 仙台大学で働かせていただけることに感謝し、高い志を持って頑張っていきたいと思っておりますのでよろしくお願い致します。	ながい だいき 永井 大貴新助手 (バスケットボール) 	今年度より新助手として働かせて頂くことになりました。 男子バスケットボール部の強化はもちろん、大学職員として少しでも貢献できるよう、感謝の気持ちを忘れず、頑張っていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。
やまがみ 山上 はるか新助手 (運動栄養学科) 	今年度より、運動栄養学科の新助手としてお世話になります山上はるかです。 何事にも向上心を持ち、日々努力してまいります。 ご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、ご指導の程よろしくお願い致します。	わたなべ さとし 渡邊 聡司新助手 (実践機構) 	今年度から新助手としてお世話になります。渡邊聡司です。 地域の健康づくりをメインに働かせていただきます。謙虚さと積極性を忘れず、大学、地域に貢献できるように務めていこうと思っております。よろしくお願いいたします。
やまだ ひろみち 山田 大進新助手 (運動栄養学科) 	今年度より、運動栄養学科の新助手としてお世話になります山田大進と申します。 仙台大学の発展に貢献できるよう精進して参ります。よろしくお願い致します。	ささきたくま 佐々木琢磨新助手 (陸上競技) 	本年度より、新助手としてお世話になります佐々木琢磨です。 基本的に陸上競技の練習に専念しますが、社会人としての自覚を持ちながら積極的に行動していきたいと思っております。宜しくお願い致します。

新助手

はやし けいた
林 啓太新助手
(男子サッカー)



本年度よりお世話になります。林啓太です。一日も早く環境に慣れ、活躍できるよう精一杯努力していきたいと思います。

おの まさひろ
小野 雅洋新助手
(トレーニングセンター)



本年度よりトレーニングセンターで勤務している小野雅洋です。これまでの経験を生かし、トレーニングセンターでの活動を通して仙台大学に貢献できるよう頑張りますのでよろしくお願いいたします。

のぐち しょう
野口 翔 新助手
(芝生管理)



本年度より、新助手として営繕管理室に勤務させていただきます。野口翔です。主に第二グラウンドの芝生管理をさせて頂くことになります。社会人として、まだまだ未熟ですが、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

臨時職員

すがわらしょうた
菅原翔太臨時職員
(学生支援室)



今年度から学生支援室で働くことになりました菅原翔太です。学生の生活がより良いものになるようサポートし、自分が感じ、経験したボランティアの素晴らしさを伝えていけたらと思います。よろしくお願い致します。

よこやまきょうこ
横山鏡子臨時職員
(LC棟)



LC棟での日々は新たな挑戦の毎日です。全くのアナログ人間が、デジタルネイティブにどうついていけるのか、頑張るのみです。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

すずきゆうた
鈴木雄太臨時職員
(学生支援室)



今年度から学生支援センターで臨時職員として勤めることに鈴木雄太です。職員として学校の為に努めさせていただきます。よろしくお願い致します。

おおたちあき
太田千秋臨時職員
(LC棟)



この度、臨時職員としてLC棟で働かせていただく事になりました。太田千秋です。不慣れではありますが、一生懸命頑張りますのでご指導の程よろしくお願い致します。

わたなべよしき
渡部良希臨時職員
(学生支援室)



今年度から臨時職員として学生支援室で働かせていただく渡部良希です。感謝の気持ちを忘れず、積極的に職務に励んでいきたいと思ひます。ご指導よろしくお願い致します。

おの ゆい
小野結衣臨時職員
(LC棟)



今年度よりLC棟の教職員向け一時預かり保育室でお世話になる事となりました。子どもたちと過ごす時間が多くなると思ひますが、ご迷惑をおかけしないよう、自分の役目をしっかり果たしたいと思ひます。宜しくお願い致します。

めぐろしょうた
目黒翔太臨時職員
(実践機構)



今年度よりスポーツ健康科学研究実践機構でお世話になります。臨時職員の目黒です。仙台大学学生のごろに身につけました、スポーツ情報戦略の知識を生かして頑張つてまいります。よろしくお願い致します。

あわかしゅん
阿波加駿臨時職員
(学生支援室)



今年度から学生支援室で働かせていただきます、阿波加 駿と申します。将来の目標のために、何事にも全力で取り組んでいきたいと思っております。ご指導の程、宜しくお願い致します。

すが あきひろ
菅 陽大臨時職員
(実践機構)



4月1日付でスポーツ健康科学研究実践機構に着任いたしました菅 陽大と申します。実践機構の仕事は未経験のため至らないこともあるかと存じますが、一日も早くお役に立てるよう努めてまいります。ご迷惑をおかけしないよう精進いたしますので、前任者同様にご指導賜りますようお願い申し上げます。

平成28年度から事務局組織の名称が一部変更になりました

旧名称	新名称（H28.4.1～）
G Tセンター統括課	G Tセンター統括室
スポーツ健康科学研究実践機構事務課	スポーツ健康科学研究実践機構事務室
教職支援課	教職支援室
庶務課	総務室
予算管理課	予算管理室
会計課	会計事務室
教務課	教育企画室
学生課	学生生活室
管理課	営繕管理室
情報システム課	情報システム室
図書館課	図書館事務室
健康管理課	健康管理室

仙台大学事務局業務につきましては、大学運営の「車の両輪」の一として、ゼネラリスト&スペシャリストという考え方を前提に定期的に担当組織をローテーションしており、今年度につきましては4月1日付で大幅な人事異動が行われました。

また、事務局組織各名称につきましても、すべての事務組織が「～室」に統一され、左表のとおり変更になりましたので、改めてご紹介いたします。

なお、事業戦略室、入試創職室、学生支援室、大学院事務室、広報室の名称はそのまま継続します。

仙台大学が「しばた100選」に認定



この度、仙台大学が柴田町から「しばた100選」の認定を受け、認定証が授与されました。

この「しばた100選」は、柴田町が町制施行60周年を迎えるにあたっての記念事業としてスタート。柴田町に「伝えたい・残したい・自慢したい・しばたの宝物」をテーマに町内外から募集が行われ、855点もの応募の中から本学が100選の中に選定されたものです。

本学としては、今回の選定は大変光栄なことであり、今後も柴田町にとって、なくてはならない大学であり続けたいと考えています。



ゆずのマークが入った「しばた100選認定証」としばた100選の冊子とともに、のぼりも贈呈されました



76. 仙台大学

大学生のパワーはしばたの宝！



スポーツに特化しており、多くの有名アスリートを輩出し続けています。
高齢化社会とされていますが、柴田町は多くの若者が行き交います。仙台大学は様々なイベントへの参加協力など、まちの光と、パワーになっています。



東北こども博の様子



健康カフェなど、様々なイベントを開催

世界のトヨタ 豊田章男社長・室伏広治博士来訪 ～ 被災地のアスリート支援 ～



写真左からトヨタ自動車㈱豊田章男社長、室伏広治博士、加藤由希子（平成28年3月健康福祉学科卒・SMBC日興証券㈱所属）

4月7日（木）あいにくの雨にも関わらず、トヨタ自動車株式会社・代表取締役社長である豊田章男氏と、2004年に開催されたアテネオリンピック陸上競技ハンマー投げの金メダリストである室伏広治博士が本学を訪れました。今回は2020年に開かれる東京オリンピック・パラリンピックを盛り上げようという目的で、豊田氏は「経団連オリンピック・パラリンピック等推進委員会委員長」、室伏博士は「東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会スポーツディレクター」として来学。生まれつき左ひじから先がなく、パラリンピックにやり投げで出場を狙う加藤由希子選手（平成28年3月仙台大学健康福祉学科卒業：4月よりSMBC日興証券株式会社勤務）を激励し、同様に生まれつき聴覚に障がいがあり、2015年日本聴覚障害者大会で100m、10秒88の日本記録を樹立した佐々木琢磨新助手（平成28年3月仙台大学体育学科卒業：4月より新助手として本学に勤務）、陸上競技部の学生らと共に競技を続けるうえでの工夫やトレーニングに関するアドバイスを行うなど、親しく交流を図りました。

経団連は、企業のトップらが自らスポーツの現場に足を運ぶことでオリンピックの情報発信や具体的な支援を強化しようとしており、今回がその第一弾、東日本大震災からの復興を応援したいという願いを込め、最初の訪問地として東北が選ばれたそうです。

経団連、トヨタ自動車株式会社、東北こども博でお世話になっているトヨタ自動車東日本株式会社、加藤選手の勤務先であるSMBC日興証券株式会社、宮城県庁、石巻体育協会関係者ら約100名が来学し、歓声があふれるなか予定を15分ほど延長して熱心な指導・活発な意見交換がなされました。

到着した豊田委員長と室伏ディレクターを先ごろオープンしたばかりのLC棟で朴澤泰治理事・学事顧問、阿部芳吉学長、柴田町の滝口町長他、学内外関係者約100名が迎え、最初に朴澤理事・学事顧問が2012年お台場で開かれた東京おもちゃショーに「振動を利用した発電の研究」（担当：吉井秀邦講師）を出展した際、視察にいらした豊田社長へ本学職員である千葉コンサルタントが説明したことを写真と共に紹介すると、豊田社長は、出迎えた千葉コンサルタントに向かって、あの節はお世話になりましたとおっしゃりながら、ご自身の見学風景を懐かしげにご覧になりました。また、これらは本学のオリンピック関係者の真と共にオリジナルのアルバムとして豊田社長に来学記念にお贈りしました。

次に、豊田委員長と室伏ディレクターのたっのご希望により、東日本大震災で亡くなった3名の学生などを祀る慰霊碑を訪れ、おごそかに献花下さいました。

晴天であれば加藤選手が陸上競技場でやり投げをする予定でしたが、あいにくの大雨につき、第三体育館でメディシンボール投げ、ベンチプレスなどのウエイトトレーニングを行う様子を見学。

その後、佐々木琢磨新助手や陸上競技部の学生達と競技力を高めるための工夫、スランプに陥った時にどのように克服するかなど、メンタル面も含めてさまざまな経験談が披露されると共に、アドバイスがなされました。



室伏広治博士からメディシンボールを使って投げの動作の直接指導を受ける加藤由希子（平成28年3月健康福祉学科卒・SMBC日興証券㈱所属）

室伏ディレクターは、加藤選手が本来は砲丸投げの選手なのにパラリンピックに砲丸投げがないため、やり投げで出場を狙うしかない現状について「さまざまな種目の競技に取り組むのは全体の競技力をあげるためとても良いことなので、やり投げでは通用しないと思わず自信をもってチャレンジしてください。被災地から加藤さんのようなヒロインが誕生することが、何より地元を元気にします」と話され、豊田委員長は「現場に足を運ぶ意味はまさにこのように実際のアスリートに会い、直接話をするにあり、今日は大変ありがたい機会をいただきました。経団連として、例えば企業が加藤さんに役立つ義手などのモノを提供することにより、競技者の支援につながる可能性があり、今後どのような形でアスリートを応援していくか、検討していきたいです」とおっしゃいました。

和やかな写真撮影・色紙へのサインの後、朴澤理事長・学事顧問は「このように遠方までお越しいただきお礼申し上げます。今後とも学生や子ども博などへのご支援をいただければ大変ありがたく、よろしくお願い致します」と挨拶され、豊田委員長と室伏ディレクターは会場の拍手に送られて次の被災地である石巻に出発されました。

加藤選手は「豊田委員長や室伏ディレクターという世界的にも著名な方々にお目にかかれ大変緊張しましたが、気さくに話しかけて下さり、下半身特に腰に負担をかけず、脚の筋肉を効果的に使う方法を教えていただいたので、早速実践したいと思います。やり投げでパラリンピックに出場することが被災地への恩返しになると考え、残り少ない時間ではありますが精一杯練習に打ち込みます」と感想を述べました。



滝口茂町長（前列写真左）にも加わっていただき最後に関係者全員が笑顔で記念撮影

平成28年度「教採塾」開講式



4月13日にB204教室において「平成28年度 教採塾開講式」が行われ、約130名の学生が参加しました。

開講式で阿部芳吉学長は「現在、宮城県に於ける小学校の教員採用の間口は広がっている。教員採用試験で合格するために大切なことは、基礎的な問題をコツコツやり続けること。興味のある分野からでも良いので過去問題に取

り組み、最終的には過去問題集1冊全ての問題を解くことが大切」。また、本学の現役学生がなかなか採用試験に合格できない理由として「実技試験の対策が不十分であること」を挙げ、開講式終了後には阿部学長自らが実技試験で美しく見せるコツ等を学生に対して伝授しました。

この教採塾は毎週水曜日の5時限目に開講され、毎週土曜日には本学のOBにまで対象を広げ、外部講師による教員採用試験対策講座が行われることになっています。



マット運動で「美しく見えるコツ」を学生たちに伝授する阿部学長

阿部学長が 仙台キワニスクラブで講演「いじめについて考える」



4月14日(木)、仙台キワニスクラブの招きにより、阿部芳吉学長は国際ホテルにて「いじめについて考える」と題した講演を行い、30名もの会員の方々が熱心に耳を傾けました。

キワニスクラブは、全世界85ヶ国の主要都市に7千400クラブ、約20万人の会員を有する奉仕団体で、ライオンズクラブ・ロータリークラブ同様、さまざまな慈善事業に力を入れています。

5年前の東日本大震災でもいち早く支援の輪が広がり、全世界から仙台を初めとする被災地に5000万円以上の寄付が集まりました。同クラブは活動の一環として毎月2回講師を迎え講演会を開催しており、例会委員長で産経新聞東北総局長である白濱正三氏が過日、本学に建設されたばかりのLC棟を取材に訪れたご縁などもあり、今回、阿部学長へのご依頼となりました。

最初に阿部学長は、仙台市内の中学校が1番荒れていた約30年前、赴任先の中学校で実際に生

徒が着ていた暴走族の衣装を広げて見せ「みなさん、これが何だかわかりますか？」と問いかけました。

真っ黒な学ランに「天下無敵」の文字が大きく刺繍された衣裳は、当時の中学校は生徒たちが叩き壊すため、体育館の窓ガラスが相当数なかったというエピソードを示す格好の証です。初めて間近にその頃の暴走族の片鱗を目にした方々は、食い入るように見つめ、阿部学長をはじめとする先生方が体を張って中学生の心を開こうと夜な夜な中学校に泊まりこみ、いかに彼らと腹を割って語りあったかという苦労談に聴き入りました。

生徒が暴れるには何か必ず原因があるのだから、それを責めてはいけない。たわいもない話をしながらこどもの言うことを聞いてあげるのが大切。そうするうちに段々と、“先生、大変だよな〜”と言い、生徒が自分たちで学校の見回りをしてくれるようになったそうです。

学校単体ではなく地域の方々と一緒になってこどもを非行から立ち直らせるための地道な努力をすることにより初めて学ぶ楽しさに気が付き、高校に進学したり、大学まで全うする生徒が出てきたとのことでした。

立派な社会人となり、第一線で活躍するようになった彼らはいまでも実に楽しげに阿部学長のもとを訪ねてきます。「心の担任」になることが大切という締めくくりに一同深く頷き、会場は大きな拍手に包まれました。会員の方々は「阿部先生の実体験に基づく話に引きこまれました」「心の担任という意味深さに感動し、もっと続きを聞きたかったです」と口々におっしゃっていました。

第10回さくらマラソン 学生133名がボランティアで大会を支える

4月23日(土)第10回さくらマラソンが柴田町白石川左岸河川敷を会場に行われました。

本学からは、学友会、柔道部、男・女バスケットボール部、硬式野球部から133名もの学生たちがボランティアとして大会運営スタッフに加わり大会をサポートしました。

当日はあいにくの曇り空でしたが、マラソンをするには丁度良い天候だったようで、北は北海道、南は長崎県まで全国のランナーが柴田の地で健脚を競いました。

(報告：学生生活室 平井孝秀)



春の交通安全運動 学友会、男・女ハンドボール部が参加



4月6日から春の交通安全運動が全国一斉にスタートしたことを受け、「春の交通安全県民総ぐるみ運動」交通事故防止街頭キャンペーンが6日朝、船岡駅前を中心に行われました。

本学の学友会学生6名・男女ハンドボール部員21名を含め、柴田町、大河原警察署、柴田町交通安全協会など計6団体から

総勢約40名が参加し、ポケットティッシュやチラシを配りながら駅前を歩く町民の方々に交通安全を呼びかけていました。

本学では毎年春と秋に行われている全国交通安全運動期間に合せたイベントに参加し、地域の方々と共に交通安全を呼びかけています。また、4月・9月の授業開始合わせ大学近隣の交差点などに教職員が立ち、学生の交通マナーアップ運動も行っています。

(報告：学生生活室 平井孝秀)



地域のみなさんに挨拶をしながら交通安全ティッシュを配る学生たち

「新入留学生歓迎お花見会」を今年も開催



4月8日（金）に船岡城址公園にて「新入留学生歓迎お花見会」が開催されました。この会は留学生と教職員、学生との交流を目的に桜が満開の時期に毎年開催されており、今年は開花が早く例年以上に美しい桜を愛でることが出来ました。

新年度が始まったばかりの忙しい時期であるにもかかわらず、留学生、教職員、ボランティア学生等、総勢51名の関係者が参加し、留学生たちは会話や食事で盛り上がり寒さを感じさせない賑わいを見せていました。

会では、留学生の一人ひとりが自己紹介を行い、日本での目標を述べてもらいました。

新入留学生たちにとっては、初めての日本

で不慣れな環境ですが、学生・教職員と親しく話す中で不安が薄れ、日本の文化を味わうひとときとなりました。

(報告：学生支援センター 村松 敦大)



米国ハワイ大学マノア校教育学部のホームページに本学が掲載

Delegation of Sendai University faculty and students visits the COE for the 22nd time



Sendai University students excited to begin their week of athletic training classes and workshops

Nine students and five faculty and staff members from [Sendai University](#) visited the department of Kinesiology and Rehabilitation Science (KRS) at the COE for the 22nd time in February 2016. From February 8th to 12th, the students took workshops and observation classes as well as two sessions of English language for health professionals as part of their training towards certification in athletic training.

Sendai University, based in Shibata, Japan was established in 1967 and is the only university specializing in physical education and sports and health sciences in northern Japan. The short-term study tour relationship between Sendai University and KRS is more than a decade old, although they recently entered into a formal relationship with the signing of a Memorandum of Understanding in September 2014. Both partners are committed to exploring, extending, and enhancing their collaborative efforts, particularly to strengthen future interactions between faculty, staff, and students.



The Learning Commons at Sendai University features 3 large screens broadcasting sports events and news



With Head Athletic Trainer Eric Okasaki in the Saake Athletic Training Room

With the newly constructed Learning Commons at Sendai University, KRS hopes to bring the first group of UH

Mānoa KRS students there in the near future. The building was envisioned precisely to bring visitors from both inside and outside of Japan. In the meantime, KRS is getting ready for their four-month distance learning course in athletic training, designed to prepare Sendai University students for their visit to the U.S.

< 概 訳 >

仙台大学学生達一行がUHにおける22回目のAT研修を実施

2016年2月8日～12日まで、仙台大学から9名の学生達と5名の教職員がハワイ大学マノア校教育学部（COE）のキネシオロジー&リハビリテーションサイエンス学科（KRS）を訪れ、今回で22回目となる研修のなかで、アスレティックトレーニングに関するワークショップ、講義、英会話などを学びました。

日本の宮城県柴田郡にある仙台大学は、1967年に創立された北海道・東北地区で唯一の体育大学です。仙台大学とCOE・KRSは2014年、正式な大学間の基本合意書に調印を交わしましたがその友好の歴史は長く、教職員並びに学生の交流を通し、両者における相互協力の内容を開発、発展させ、さらに強固にすることに同意しています。

KRSは、仙台大学に新たに建設されたラーニングコモンズ（LC棟）に近い将来、ハワイ大学で初めてKRSの学生達が訪れるよう期待すると共に、従来のアウトリーチカレッジに替わり、今年度仙台大学に「遠隔授業・前期」の提供及び仙台大学の学生達が同大学で実施する研修も担当するなど、両者の連携はますます深まっています。

中京大学前学長 北川薫学事顧問の退官を祝う会が開催される



文部科学省大学設置分科会体育学専門委員、一般社団法人全国体育スポーツ系大学協議会（旧：体育大学協議会）メンバーその他、斯界の泰斗として日本の体育・スポーツ科学界に多大な足跡を残していらっしゃるのと同時に、仙台大学とも小室希研究員（スケルトン競技）のトレーニング機器探索の仲介その他、さまざまな形で関わりご指導いただいた中京大学前学長である北川薫学事顧問の退官を祝う会が4月16日、名古屋観光ホテルで開催されました。

本学より北川学事顧問と大学同窓で永きに渡り親交のある朴澤泰治理事長・学事顧問が出席し、大学体育連合会長安西祐一郎氏、日体協会会長張富士夫氏、全日本ボウリング協会会長武部勤氏をはじめ政財界の名だたる方々を発起人として、約220名が参会し、北川学事顧問のご功績を称えました。会場

には、先日、経団連のオリパラ推進行事で仙台大学を来訪した室伏広治博士も顔を見せておりました。

武部会長は「ボウリングがオリンピック競技に選ばれなかったことは残念ですが、北川先生がいずれ全日本ボウリング協会会長になり、盛り立ててくれるでしょう」と挨拶し、梅村総長が「北川先生のおかげで大学経営がうまくいきました」と感謝の言葉を述べました。

北川学事顧問は「皆さんのご指導により好きなスポーツ分野の研究と実践に打ち込むことができました。これからも日本人の元気の見本となるよう心がけていきます」と挨拶し、日本の体育・スポーツ科学教育にける熱意を示されました。



写真左から：びわこ成蹊スポーツ大学新宅幸憲教授、大阪体育大学岩上安孝学長、北川薫中京大学学事顧問ご令室、北川薫中京大学学事顧問、朴澤理事長・学事顧問

第10回 仙台大学体育施設管理士認定証授与式



平成28年4月19日（火）A棟2F大会議室において、第10回仙台大学体育施設管理士認定証授与式が行われ、合格者36名に認定証が授与されました。

体育施設管理士は体育施設の維持管理、運営に必要な知識・技能を認定する資格で、資格に必要な科目を本学において修得し、公益財団法人日本体育施設協会による資格認定試験に合格した者に「体育施設管理士認定証」が授与されます。本学は同協会体育施設管理士認定校となっており今年で10年になりました。

阿部学長からは、「2020東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けて、何らかの形で体育施設管理士資格取得を通して学んだことが活かされることでしょう。学んだことを糧に活躍してほしい。」と話され、一人一人に認定証が授与されました。

参照：公益財団法人 日本体育施設協会

<http://www.jp-taiikushisetsu.or.jp/guidance.html>

お花見レガッタが開催

3月27日～28日に「お花見レガッタ」が埼玉県戸田で開催され、本学漕艇部からは男子エイトと女子ダブルスカルが参加しました。

男子エイトは予選で、昨年2位の明治安田生命と、インカレ5位の慶應大学と同組となりましたが、下馬評を覆し1位で予選通過。決勝ではスタートから本学・NTT・日本大との競い合いとなり、中盤から僅かに日本大学とNTTに先行を許し、残り150mから猛然と追い込んだもののNTTに0.3秒及ばず3位で銅メダルを獲得しました。

女子ダブルスカルは予選・準決勝ではトップタイムを記録し勢いに乗ったものの、決勝では他クルーもスタートから積極的なレース展開。東北大とトヨタが僅かに先行し、本学と筑波大学が最後まで競った

レースとなりましたが、惜しくも0.5秒差で4位入賞となりました。

この大会は東京地方の桜が咲き始めるこの季節に毎年開催されています。社会人選手も数多く参加するため、シーズンの皮切りとなる大切な初戦です。

漕艇部の今後の活躍に期待しましょう。



仙台市内の小学校から本学学生へ感謝の電話



4月27日（水）仙台市内の小学校の校長先生より、郡山教授を通じて本学学生が行った行動に感謝のお電話がありました。

電話の内容は、朝の登校時間に高校生の自転車が小学生に接触する事故があり、たまたま通りがかった本学現代武道学科3年の葛西智奈さんが目撃したため、初期対応と警察の現場検証にも立ち会い、小学生の保護者と高校生の保護者が現場に駆けつける中、最後までしっかりと付き添い対応をしてくれたことに感謝しますというお褒めの言葉でした。

自転車との事故については大事故には至らず、小学生の怪我も軽傷だったようで、まずは安心ですが、本学学生の見て見ぬふりをしない自らの行動に敬意を表したいと思います。



葛西智奈さん（現代武道学科3年）

2年生の時に履修した「応用武道実技Ⅱ（田中智仁准教授）」で覚えたことが今回役立ったと感じています。

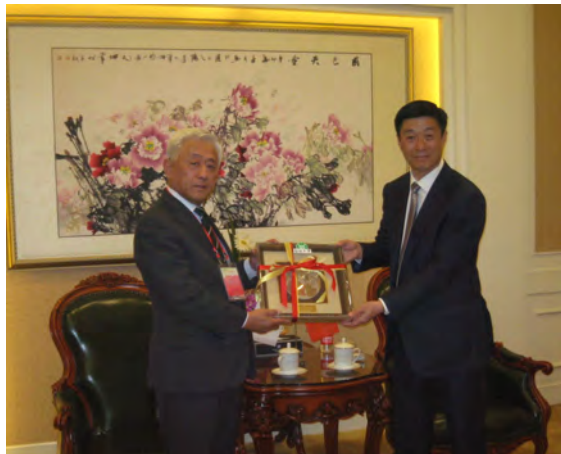
授業では、110番通報に至るまでの事故現場のシュミレーションを行っていたことから冷静に対応することが出来ました。

110番をして、警察の方に事故現場の目印になる場所を伝え、警察車両の到着を待つ間、近隣のご父兄に声をかけ小学校の担任の先生を呼んでいたたり、高校生には、保護者と自分の高校にも携帯電話で現在の様子を伝えるようにと話しました。

また、混乱の中なので、痛みをすぐに感じられない状況も予測し、高校生と小学生にそれぞれ頭を打ったり怪我をしていないか、痛いところはないかなどを声掛けしました。今回小学校の校長先生からお電話あったことを聞き、微力ながらお役に立てたことを嬉しく感じます。何より授業で習ったからこそできた行動だと強く感じ、大学卒業後は警察官になるという目標に向かってさらに学んでいきたいと思っています。

Monthly Report

中国 瀋陽師範大学開学65周年記念式典に参加



記念品の交換を行う朴澤理事長（左）と林群学長（右）

開学65周年式典のお招きを受け、5月19日～22日、朴澤泰治理事長・学事顧問、荒井龍弥国際交流センター長および馬佳濛講師が瀋陽師範大学を訪問しました。学長会見では、朴澤理事長・学事顧問が瀋陽師範大学の林群学長に65周年のお祝いの言葉を述べると、林

群学長からは「仙台大学

との交流を非常に重視しています。これまでの交流が大変良い成果を挙げていたことを感謝するとともに、今後も更なる発展を望みます」とのご挨拶をいただきました。

式典の一環として、「学校教育国際化シンポジウム」が行われました。本シンポジウムは、瀋陽師範大学と各国の協定校（計23大学）の代表が、大学教育の国際化の現状や取組等について発表および検討を行うものです。本学からは、朴澤理事長・学事顧問が「国際化に向けた人材育成」のテーマで、オリンピック・パラリンピック観戦その他で来日する外国人観光客の勧誘等を対象としたインバウンド事業、および外国人選手のキャンプ地誘致などの地方創生に関する国家政策の動向を紹介し、これら事業への参画を通じて、地域貢献という大学の使命の遂行、また大学教育の国際化を図っていききたい、そのために瀋陽師範大学との交流をさらに深めたいと発表しました。

そして、協定校ごとに植えられた木々が並ぶ「友誼林」（ユギーリン）における植林セレモニーも行われました。贾大学副書記と朴澤理事長が仙台大学との協定記念の碑を除幕し、新しく植えられた木に水を撒きました。夜の部では、瀋陽師範大学の教職員および学生による盛大なパフォーマンスショーを鑑賞しました。

(次頁へ)

〈 目 次 〉

瀋陽師範大学開学65周年	1
男子サッカー部と漕艇部が熊本地震の募金活動	2
仙台89ERS感謝の集い	3
大元英照選手 リオ五輪への出場が決定	4
第90回学術集会	5
復興庁 学生ボランティアイベント 参加団体に選定	6
明仙育進会 学生の活動・活躍	7-9

学生の活躍や、取り組みなどを
ご存知でしたら広報室までお寄せ
ください。

Monthly Reportで紹介する他、
報道機関にも旬な話題を提供して
参ります。

本誌へのご意見・ご質問等が
ありましたら広報室までご一報く
ださい。

仙台大学 広報室

直通 0224 - 55 - 1802

E-Mail kouhou@sendai-u.ac.jp

式典参加に先立ち、前日に、瀋陽師範大学体育科学学院の周院長等と今後の国際提携の方向性について会議が行われました。体育科学学院では、仙台大学を中心とする海外の大学との提携等を専門に担当する副院長を新たに配置しており、交換留学については、学部生においても交換留学生制度を拡充する意向が確認され、半年または1年以上の長期間留学、また単位互換やダブルディグリー等の制度化についても今後の検討事項となりました。さらに、来月の「海外武道実習」短期派遣研修に関して、中国武術の研修状況を評価し、中国武術の段位や履修証明などの認定書を得ることが可能かと打診したところ、体育学院の周院長からは、一定レベルに達すれば、認定可能との回答がなされました。

その後、仙台大学大学院への進学を推薦された2名の学生との面接を実施しました。両名とも日本文化および仙台大学に強い興味を持ち、それぞれの専攻分野について仙台大学大学院で修学し母校に還元したいと語っていました。

今回の式典では仙台大学に対して最上級の接待をいただきました。瀋陽師範大学と仙台大学との交流は今年度で9年目になりました。馬講師がかつて瀋陽師範大学の教官であった当時、前学長や現学長の卓球の指導者であったこと、あるいは朴澤理事長・学事顧問と両氏との個人的な信頼関係が強いこともあり、互いに親身になりさまざまな領域で交流が進められています。今後も互惠の原則に基づき、さらに交流が発展していくこととなるでしょう。

(報告：馬 佳濛 講師)



記念植樹を行った(左から)馬講師、賈大学副書記、朴澤理事長・学事顧問・荒井国際交流センター長

男子サッカー部と漕艇部が熊本地震被災地への募金活動

平成28年4月14日に発生した熊本地震を受け、男子サッカー部と漕艇部がそれぞれ、学内で被災地への寄付を目的とした募金活動を展開しました。

男子サッカー部は今回熊本で起きた地震で困っている方に何か出来ないかと考えていたところ、本学サッカー部OBの齋藤恵太さん(J2 ロアッソ熊本)が賛同し参加しているYOUR ACTION KUMAMOTO(代表：巻誠一郎選手)が被災地の避難所にいる子供たちへの運動教室やサッカー教室の開催、避難所に物資を配給する活動等を行っている事を知り、その活動を通して募金活動で集めた義援金を寄付しようと思ったそうです。キャプテンの繁田秀人さん(体育学科4年 埼玉県与野高校卒)は「募金を通じて人の温かさを感じた。5年前の震災で救われた立場の我々が、今回は熊本の被災者を救う立場と考えたと頑張れた。」と感想を述べていました。

また、漕艇部は「母校のボート部を支援したい」との思いから募金活動を開始。1年生のうち2名の出身高校である熊本学園大学付属高校のボート部が被災し、練習や大会出場ができない状況を知り少しでも役に立てればと考え募金活動をしたそうです。

発案者の松村祐治さん(体育学科1年 熊本学園大学付属高校卒)は「少しでも母校の役に立てばと考え、募金活動を呼びかけました。多くの学生の皆さんに協力してもらい感謝しています。」と話してくれました。

なお、本学では熊本地震で被災され、避難所や車中泊を余儀なくされている被災者に対し、ホームページを通じて「エコノミークラス症候群予防法」と「予防のための運動」の資料を作成し公開しています。



学内で募金活動を行う男子サッカー部員(上)と漕艇部員

仙台89ERS スポンサー感謝の集い

5月17日、勝山館にて開催された「仙台89ERS 2015-2016シーズン スポンサー感謝の集い」に朴澤理事長・学事顧問と法人事務局の品田さんと出席させていただきました。会場には78社ある公式スポンサーの中から約50名が集まり、株式会社グランスポールを始め、多くの方々と交流を持つことができました。

感謝の集いは球団代表中村彰久氏のあいさつで始まり、スポンサー企業への感謝の言葉がありました。その後に選手とチームスタッフが入場し、レギュラーシーズン東地区2位だったこと、プレーオフの2戦をホーム開催することができたこと、惜しくもファイナル進出を逃してしまい目標達成には届かなかったがチームが一丸となって戦い、誇らしいチームであったことなど、キャプテンの志村雄彦選手より報告されました。

仙台89ERSは今年10月より新しいリーグ（B League）1部への参戦が決定していますが、新しいチーム作りの見通しや会社の新事業案が発表されました。B Leagueへの参戦はより高いレベルのチームや選手との戦いを意味します。日本代表選手やその候補選手が存在し、またそれらのチーム運営会社は資金力も上です。どのように戦っていくのか、その見通しはまず、日本代表レベルの選手を獲得すること、NBAチームとの業務契約（現時点では姉妹都市であるダラス市のチーム・ダラスマーベリックスへの事業交渉を視野に入れているとのこと）をすること、ホームアリーナとなる仙台市体育館を改修すること（座席や照明などをもっとエンターテインメント性の高いものに改修）、地元大学と提携しプロ候補生を早期から育成することなどが挙げられました。



左から、佐藤文哉選手（本学OB）、朴澤理事長・学事顧問、鈴木保之香さん（仙台89ERSファースト 本学OG）

さらにはジュニアチームの立ち上げ、宮城県バスケットボール協会とのさらなる連携、そして練習施設の増設なども視野に入れ、これまで3.5億円の事業規模であったところを早く5億円まで上げ、将来的には10億円に拡大していきたいということでした。仙台89ERSは常勝し、スタープレイヤーが存在する『最も人気のあるチーム』を作ること为目标にしています。

今シーズンの佐藤文哉選手（明成高校-仙台大学卒）は平均得点8.9点、スリーポイント成功率37.1%という成績となりました。1月に仙台で開催されたbjリーグオールスターではスリーポイントコンテストに初出場するということも叶え、実りの多いシーズンになったことと思います。今シーズンの89ERSは東地区2位、プレーオフセミファイナル進出、という素晴らしい成績でシーズンを終えました。しかしながら、決して納得のいく最後ではなかったことも確かです。プレーオフセミファイナルをホームで迎えた秋田ノーザンハピネッツとの試合は、レギュラーシーズンで3勝1敗と勝ち越していながらも2連敗という結果でした。昨シーズンの最後はレギュラーシーズン中に4戦4勝と勝ち越していた青森ワッツにプレーオフで2連敗しています。勝たなければいけない試合に勝てないことは、新リーグでは2部降格もあり得ます。このような終わり方が続かないよう、新チームのチーム作りに期待したいと思っています。

仙台89ERSを離れて3シーズンが過ぎ、シーズンごとに成績を伸ばしているチームを誇りに思い、優勝してくれることを願っています。これからも一スポンサー企業の関係者として、そして一バスケットボールファンとして仙台89ERSを応援し続けようと思います。最後になりましたが、今なおチームとあたたかい交流を持たせていただける環境と、このような会に出席させて頂く機会をくださいました朴澤理事長・学事顧問をはじめ関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。

（報告：白坂広子新助手）

大元 英照 選手(アイリスオーヤマ)がリオ五輪出場決定

本学を平成19年に卒業した大元英照選手（アイリスオーヤマ）が、8月にブラジルで開催されるリオデジャネイロオリンピックのボート競技（男子軽量級ダブルスカル）の代表に決定しました。

大元選手は4月25日に韓国・忠州で行われたアジア・オセアニア予選において同種目で2位となり日本のオリンピックへ出場権獲得に貢献。5月18日に出場が正式に決定しました。

本学からオリンピックのボート競技に出場するのは大元選手が初めて。リオデジャネイロでの大活躍が期待されています。



産学提携（寄付）講習会 ラグビー指導者講習会開催

5月24日（火）、元ニュージーランド代表選手のニコ・ギア氏を講師に迎え、ラグビー指導者講習会が仙台大学第二グラウンドラグビー場を会場に開催されました。

講習会には本学学生や仙台高等専門学校の生徒の皆さん、山形県や青森県のラグビー指導者など約50名が参加しました。

参加者は、ラグビーの本場であるニュージーランドの元代表の指導を自らの競技力や選手指導に役立てようと熱心に耳を傾け、実践のトレーニングに取り組んでいました。

本講習会は(株)ボディプラスインターナショナル様の寄付による産学提携講習会で、東北のラグビーのレベルを高め、また、競技者人口を増やすことを目的に開催されました。

なお、6月4日（土）と5日（日）には、ニュージーランドで7人制ラグビーのコーチやレフリーとしてご活躍されているピーター・ノック氏を講師に迎えての講習会も予定されております。



講習会参加者に指導するニコ・ギア氏

仙台大学同窓会宮城仙南支部設立

5月21日（土）に仙台大学学生食堂「なちゅら」を会場に、仙台大学同窓会宮城仙南支部設立総会が行われました。

当日は、仙南地区の2市7町（白石、角田、柴田、大河原、村田、蔵王、七ヶ宿、川崎、丸森）に在住する卒業生40名が出席して開催されました。

設立総会では、支部長に山本玲さん（川崎町立川崎中学校校長 9回生）が選出され、「仙台大学に一番身近にある支部として、仙台大学発展のために寄与していきたい。」とごあいさつされました。



設立総会集合写真

また、総会後の懇親会では一人一人の自己紹介などもあり、卒業生同士の世代を超えた交流がなされていました。

なお、仙台大学同窓会宮城仙南支部設立に当たり、会員登録への案内をお送りしたところ、約90名の方々から賛同をいただき活動をスタートさせました。

仙台大学同窓会は現在、全国に26支部あり、多くの卒業生が仙台大学のために活動を展開しています。創立50周年となる2017年に向けて、卒業生と本学関係者の交流がさらに深まることを祈念しています。

第90回学術集会(平成28年度 新任教員発表会)

5月10日(火)16時より、A棟2階大会議室において、今年度最初の学術集会として「新任教員発表会」が行われました。代表幹事である小濱明教授の進行のもと、今年度新任教員として大学に着任された10名の先生に、各々の専門分野でのこれまでの活動や研究の報告や、今後の研究や展望などについて発表していただきました。

10名の先生方による発表は、それぞれおよそ6分間という短い持ち時間であったため、各研究に関する議論までは至らなかったものの、いずれも専門性に特化したとても興味深い内容の報告ばかりであり、今後の本学における教育研究活動に多大なる貢献を期待できるものでありました。

なお、新任教員発表会後には「平成28年度学術集会総会」と「新任教員を囲む会(懇親会)」開かれました。

今後は9月下旬の「科研費研修会・応募説明会」、10月下旬に「研究計画に基づく研究費」の成果発表会、時期は未定ですが、「スポーツシンポジウム」や「学術講演会」を企画運営していく予定となっています。一人でも多くの先生方のご参加をお願いいたします。



発表を行う柴田准教授

(学術会運営委員会・広報係)

NO.	テーマ	発表者
1	対人関係育成のための指導法～プロセスレコードを用いて	江口 千恵 特別任用講師
2	復興応援プロジェクトの実践	菊地 博 教授
3	武道と日本の警察について	紀野國宏明 准教授
4	子どもの見方と「保育観」	柴田千賀子 准教授
5	生体色素が彩るストレス応答の分子機構	柴原 茂樹 教授
6	校内研究推進への校長としての関わり方	末永 清悦 教授
7	研究のテーマとこれまでの研究活動	高橋 徹 講師
8	第94回オーストラリアオープン陸上競技選手権大会参加報告	名取 英二 准教授
9	これまでの活動報告と今後の研究について	宮崎 利勝 講師
10	水中環境におけるヒトの能動的姿勢制御に関する研究	渡邊 泰典 講師

タイとデンマークから留学生が来訪



阿部学長への挨拶に訪れた Porichaya Sricharoenさん(右から3番目) Nawaporn Ruaypongさん(左から2番目) Patrick Mickey Hansenさん(中央)

5月30日、本学との提携校であるシーナカリンウィロート大学(タイ)からPorichaya Sricharoen(ニックネーム:Eve)さんとNawaporn Ruaypong(ニックネーム:Wai)さんが、トリレベルト大学(デンマーク)からはPatrick Mickey Hansenさんが本学に留学のため来訪し、阿部学長に来日の挨拶を行いました。

EveさんとWaiさんの2名は7月までの短期の滞在となり、期間中はテニスや剣道などの授業を履修することになっています。

また、Patrickさんは11月までの期間で、柴田町内の保育所と幼稚園でインターンシップをすることになっています。

3名とも日本語や日本の文化に大変興味を持ちながら来日したとのことですので、学内等でお見かけの際には、ぜひお声掛けください。

復興庁・学生ボランティア促進イベント 参加団体に選定

復興庁では、平成24年から毎年、大学生を中心に夏休みなどの長期休暇を利用した被災地におけるボランティア活動への参加を呼び掛けるキャンペーンを実施しています。平成28年度も「東北の“いま”を知る。東北で“これから”を考える。さあ、共に。」をテーマとして、引き続き学生ボランティアの参加促進を展開しています。この一環として今年度は、東日本大震災からの復興支援を目的としたボランティア活動をしている大学生を対象とし、「今だからできること～復興の先を見据えて～」と題した学生ボランティア促進イベントが開催されることとなりました。本学からは、東日本大震災発生直後から実施していた避難所でのエコノミークラス症候群予防のための運動提供や、現在も仮設住宅や災害公営住宅で継続している「健康づくり茶話会」の活動について応募し、見事、宮城県内の大学で唯一の参加団体に選定されました。



被災地で活動する学生の様子

本イベントは、平成28年6月12日（日）に東京都で開催され、当日は現在も被災地の健康づくり事業に積極的に参加している学生3名が、本学の取り組みについて発表します。東日本大震災からの復興という観点のみならず、東北の活性化を含めた復興の先を見据えた取り組みについて、他大学のボランティア実践者たちと多くの意見を交わし、学生たちがもう一度、宮城県の復興について考えるきっかけになればと考えています。（報告：新助手 齋藤まり）

第26回 仙台国際ハーフマラソン大会 仙台市姉妹都市国際交流会



5月8日（日）、第26回仙台国際ハーフマラソンが開催されました。

特別招待選手の川内優輝選手（埼玉県庁）やゲストランナーの高橋尚子さんなど有名ランナーも出場し、本学関係者や一般ランナーを含む1万3336人が新緑の杜の都仙台を駆け抜けました。

大会終了後には、国際姉妹都市からの選手団と仙台市民の交流を目的とし、江陽グランドホテルにおいて開催された交流会に本学と協定を締結している大学があるベラルーシや中国など更なる交流発展を目指して参加しました。ベラルーシ共和国ミンスク市や中国長春市等8ヶ国の選手団の紹介や成績発表、日本文化体験として餅つき大会で交流を深めることができました。

また、本学が白石市、柴田町と行っている2020東京オリンピック・パラリンピックにおけるアスリート事前キャンプ誘致の案内を姉妹都市関係者に配布しました。特にベラルーシ選手団の引率者セルゲイ・フルマノフ氏（ミンスク市体育局長）に本学とベラルーシ国立体育大学の関係や本学の施設を紹介し、本学に大変興味を持たれた様子でした。

朴澤理事長・学事顧問、阿部学長をはじめ韓国、中国、台湾の留学生も交流会に参加し、駐仙台大韓民国領事館総領事 梁 桂和総領事や各国選手団と楽しい時間を過ごしました。

（報告：事業戦略室 鈴木 美生）



平成28年度 明仙育進会を開催



5月18日（水）KMCH大会議室において平成28年度明仙育進会が開催され、本学と姉妹校の明成高等学校出身者の45名の学生がKMCHに一同に参集しました。朴澤理事長・学事顧問、明成高等学校海和由美子教頭先生からのご挨拶の後、明成高等学校進路部長の伊藤治子先生からの挨拶では「仙台大学には現在97名の明成高等学校出身者が

在籍しています。明仙育進会は、同法人の明成高校から仙台大学に進学した学生の保護者と学生からなる組織で、高校もずっと応援しています。大学での学びに迷いなどが出た場合など、独りで結論を出さず大学の先生方をはじめ、高校もバックアップ体制を整えていますのでいつでも遠慮なく相談してください。」と励ましの言葉がかけられました。阿部学長は「大学で学ぶ一番大切なのは、『人間性を高めること』です。どうぞ皆さん、一日一日を大切に過ごしてください。将来教職を目指す学生たちは、気軽に学長室を訪ねてきてください。」と挨拶されました。

その後は昼食を取りつつ歓談となり、学生全員が行った自己紹介では朴澤理事長・学事顧問からそれぞれに言葉を掛けられ大学での学びの様子を確認されていました。

明成高校から体育学科に進学した学生



庄司 強さん
(体育学科1年 陸上競技部・長距離部門)

登米市南方中学校で陸上部に所属。更に上を目指すため明成高校に入学しました。遠方のため仙台市内に

ある母方の実家から明成高校に通い現在に至っています。

仙台大学では専門的なスポーツ科学を学び競技力向上をめざして努力していきたい。大学での目標は、全日本インカレに出場し入賞すること、そして全日本駅伝への出場めざし頑張りたいです。



佐藤 佑志郎さん
(体育学科1年 陸上競技部・長距離部門)

槻木中学校時代は陸上部がなく野球部に所属。中学校代表として駅伝に出場し、明成高校へは中村先生の指導を仰ぐため入

学しました。

仙台大学では、将来の進路を考えて体育の教員になるために頑張っていきます。大学での目標は教員を目指し、しっかり勉強していくこと、全日本駅伝に出場することを目標に練習に励みたいです。

柔道部が東北学生優勝大会 男女アベック優勝を報告

5月22日（日）、宮城県武道館を会場に河北新報旗争奪東北学生優勝大会が開催されました。結果は、男子が2年連続2回目の優勝、女子は見事10連覇を達成しました。

男子は決勝戦で秋田大学と対戦し、4対2の接戦を制しました。また、女子は3校でのリーグ戦で全勝しての優勝でした。

5月24日（火）には、リオデジャネイロオリンピック柔道日本代表女子監督でもある南條充寿監督、南條和恵女子監督、川越男子主将、月野女子主将が学長室を訪れ結果を報告し、6月25日と26日に東京・日本武道館を会場に開催される全日本学生優勝大会での活躍を誓っていました。



男子バレーボール部がASEトレーニング

平成28年3月31日（木）宮城県栗原市の国立花山青少年自然の家にて、本学岡田講師および岡田ゼミ生の指導の下、男子バレーボール部で野外トレーニングを行いました。

通称ASE（Action Socialization Experience）と呼ばれる野外トレーニングは、個人では解決できない課題に対して、グループのメンバー同士が協力しながら課題を解決していくトレーニングです。課題の成功・失敗に関わらず毎回ふりかえり（シェアリング）が行われることで、グループのメンバー同士の信頼感や協力関係が生まれ、自分自身や仲間、グループについての新しい気づき・発見が得られます。

近年、多くのトップチームがこのASEを実践しており、本学でも女子サッカー部、女子ハンドボール部がすでに実践されています。今回の男子バレーボール部のASE体験では、1）チームワークの向上、2）チームや仲間、自分に対する新たな気づき・発見、3）新入生と在学生、選手・スタッフ間の交流を目的として行いましたが、私が想像していた以上に、学生一人一人の秀でた部分や課題を見つめなおすことが出来、大変有意義な活動でした。

このような活動を通じて、スポーツの専門スキル以外での課題を浮き彫りにし、チームや個々のメンタリティーを向上させ、人間力の向上に発展させていきたいと考えています。また、種目間を越えた交流を深め、仙台大学だからこそ出来る有効なトレーニング方法として、本学のブランド力を高めることにつなげていきけるよう、今後も岡田先生の協力をいただきながら、継続してトレーニングしていきたいと考えております。

（報告：石丸 出穂 准教授）



ASEトレーニングを行う男子バレーボール部員

ウエイトリフティングフェスティバル in SHONAIに出場

4月23日（土）、羽黒体育館（山形県鶴岡市）で開催された「第2回ウエイトリフティングフェスティバル in SHONAI」に本学のウエイトリフティング部（女子1名、男子5名）が出場しました。阿部芳吉学長も応援に駆けつけてくださり、選手を鼓舞していただきました。

女子53kg級に渡部詩乃（体育2年）が出場し、優勝を期待されていましたが、スナッチを3回連続で失敗して失格したため、クリーン&ジャークで66kgを成功させたが、トータルの順位はつきませんでした。

男子69kg級小川純（運動栄養3年）スナッチで自己新記録の100kgに成功し優勝した。77kg級は、今野拓弥（体育4年）がコンディションの悪いながらも4年生の維持を見せて優勝した。94kg級は、保科魁斗（体育1年）と大津恭輔（体育3年）の対決となった。スナッチで大津が105kgを成功し5kgリードしたが、クリーン&ジャークで保科が136kgを成功し、トータルにおいて1kg上回ったため保科が2位、大津が3位という結果になりました。今回大会は、学生にとっては「たかが1kg、されど1kg」という言葉が身に沁みる大会であったと感じました。

（報告 新助手 壹岐 優）



94kg級 保科魁斗選手

全日本女子学生ウエイトリフティング選手権大会出場

5月6日（金）～5月8日（日）に大阪府羽曳野コロセアムで開催された「第28回全日本女子学生ウエイトリフティング選手権大会」に女子53kg級として渡部詩乃（体育2年）、大野美幸（健康福祉1年）が出場しました。

結果は、渡部が、スナッチ54kg-9位、クリーン&ジャーク66kg-7位、トータル120kg-7位と健闘し、2週間前の課題を克服し結果を残しました。大野は、スナッチ51kg-10位、クリーン&ジャーク66kg-8位、トータル114kg-8位と大学生として初の全国の舞台であったが落ち着いた試技でした。

会場には、阿部芳吉学長が駆けつけてくださり、暑い声援を送っていただきました。試合後は、学生の健闘と称え、温かいお言葉をかけていただきました。

今大会は、取り組んできた課題の改善が見られ、全国の舞台で2名が入賞できた事は、誠に嬉しく思っております。しかし、上位に入賞している他大学とは、技術、経験値で大きな差があると改めて痛感しましたので、基礎から鍛え直して、競技力向上に努めて参ります。 <報告者 新助手 壹岐優>



ライフセービング同好会がボーイスカウト全国大会で安全啓蒙活動を実施



気仙沼ライフセービングクラブの方々とともに

5月28日（土）～29日（日）仙台市役所前市民広場で行われた、平成28年度ボーイスカウト全国大会「スカウティングエキスポ」において、気仙沼ライフセービングクラブとの共同で仙台大学ライフセービング同好会の3名が日本ライフセービング協会のブースを担当し「水の安全」と「人命救助」について展示・実演しました。

内容はBLS（Basic Life Support＝一時救命処置）で、胸骨圧迫（心臓マッサージ）の方法や、AED装置の使用方法について全国各地から集まったボーイスカウトの子どもたちや一般の来訪者にマネキンを使い実際に心肺蘇生を体験してもらう活動を行いました。

ライフセービング同好会は震災以降、水辺の事故を防ごうと同好会を立ち上げ活動を続けていましたが、初期メンバーが3月に卒業し部員数1名となったことで同好会存続の危機となりました。この存続の危機を救ったのが今回、「スカウティングエキスポ」に参加した1年生3名で、今回が活動の初仕事となりました。現在、先輩の志を引き継ぐ2年生1名と、1年生3名の、部員数4名で新生ライフセービング同好会が始動しています。今年の夏休みは気仙沼ライフセービングクラブとともに、気仙沼市大島の「小田の浜海水浴場」でガード活動を行うことを予定しているそうで、東日本大震災を経験した体育系大学の活動としても、今後のライフセービング同好会の地域貢献活動に期待が寄せられます。

かずほ

三浦 千穂さん（体育学科1年・釜石高校出）



蘇生法の講習を行う三浦さん（右）

ライフセービングの魅力は、海だけでなくどの場でもできる人命救助できる活動であること、全国でライフセービング活動をしている方々と情報交換し交流ができることにあります。今回ブースを訪れ体験されたボーイスカウトの方々は、AEDの使い方を知っている方が多数でした。心臓マッサージの方法は、圧迫の強さやリズムなど、やってみないと判らないことばかりなのでこれからも忘れないよう何回か経験してほしいと思います。

私自身、ライフセービングのジュニアユースの大会に誘われ出場したのをきっかけに、高校1年で全国大会の本選出場、高校3年には所属する釜石ライフセービングクラブの女子メンバーでラインスロー全国大会3位、マネキン・トウ・ウィズフィン全国大会個人7位と入賞した実績があります。これからも大会に出場し、技術をより高いものにしていきたいと思っています。

Monthly Report

リオ五輪 南條教授と大元選手の壮行会を開催



リオでの活躍を誓う南條教授（右）と大元選手

8月5日からブラジルで開催されるリオデジャネイロオリンピックに出場する全日本柔道女子監督の南條充寿教授と、ボート男子軽量級ダブルスカル代表の大元英照選手（本学平成19年体育学科卒、アイリスオーヤマ株式会社所属）の壮行会が6月29日（水）、学生食堂「なちゅら」を会場に本学の学生や教職員、滝口茂柴田町長はじめ仙南地区2市7町の首長の皆様など約250名が参加し開催されました。

最初に朴澤泰治理事長・学事顧問から「南條教授には、故斎藤先生の遺志を継いできたものを成果としてぶつけて欲しい、そして、仙台大学柔道塾の子どもたちにも夢を与えられるような活躍を見せてほしい。また、大元選手には、自転車事故その他、数々の苦難を乗り越えて勝ち取った悲願の五輪。一緒に出場できなかった須田選手の分も合わせ、決勝を目指して頑張ってほしい」とあいさつ。来賓を代表して滝口茂柴田町長からは「お二人の活躍で、柴田町の名前を世界に発信していただきたい。」と激励の言葉を頂戴しました。

壮行会では、本学の学生や教職員からのメッセージが書かれた日本国旗や、花束が贈呈され、南條教授は「この壮行会でオリンピックなのだという実感が湧いた。一つでも多く金メダルを取らせる環境づくりを残りの期間でしっかり取り組みたい。」とあいさつ。大元選手は「まずは決勝進出が目標。世界のトップに少しでも近づきたい。」とリオ五輪に挑む決意を力強く表明しました。

会の最後には阿部芳吉学長と柔道部約45名がそろって南條教授へ、漕艇部の矢島宏太さん（体育学科2年）からは大元さんへそれぞれリオでの活躍を祈ってエールが送られ、会場は大きな拍手に包まれました。

2人は8月1日にリオに入り、世界の舞台へと挑戦します。



学生や教職員からの応援メッセージが書かれた日本国旗も贈られました
（後方左から、朴澤理事長・学事顧問、阿部学長、南條教授、大元選手、滝口柴田町長、半澤同窓会副会長、前方左から、月野さん、川越さん、落合さん、小野さん）

〈目 次〉

リオ五輪 南條教授と大元選手の壮行会を開催	1
ハワイ大学から初めての留学生を受け入れ	2
東京おもちゃショーでボート競技を紹介	3
健康づくり運動サポーター	4
青海省体育科学研究所との協定書を更新調印	5
横川和幸元教授からの報告	6
上海体育学院修士課程修了中野拓也さん	7
第9回七十七銀行陸上競技記録会	8

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室
 直通 0224 - 55 - 1802
 E-Mail kouhou@sendai-u.ac.jp

ハワイ大学短期交換留学プログラム

～ハワイ大学の学生達が初めて仙台大学で研修～

6月3日～13日まで、ハワイ大学教育学部キネシオロジー学科から初めて学部生5名と引率者
おおぼゆきや
の大庭有希也先生が来学し、芋煮の調理、書道といった日本文化の体験からベガルタ仙台の泉練習場やKOBOSタジアム施設見学にいたるまで、大変充実した研修が行われました。

2003年12月より毎年本学では、アスレティックトレーナーに興味を持つ学生達を中心に、グローバルな人材養成の一環として運動栄養学科の学生などにも門戸を広げてハワイ大学を訪れては、アスレティックトレーナー研修をし、ビギナーコース・アドバンスコースあわせると22回を数えるほどになりましたが、ハワイ大学から学生が本学を訪れるのは初めてです。この交換プログラムは、2014年のハワイ大学キネシオロジー学科と本学間における基本合意書締結に基づき実現されました。

今回の研修は大きく分けて3つの目的から成ります。第一に日本のスポーツ界におけるアスレティックトレーニング（以下AT）の現状を知る、第二は日本の教育システムについて学ぶ、最後は東日本大震災の被災地の現状を自らの目で見て実際にボランティア活動を行う～です。ただ、こういったことよりも本学の学生がこのプログラムを通してどのように成長できるかという点を最も重視しました。そこで、普段接する機会がないハワイ大学の学生と本学の学生が行動を共にし、コミュニケーションをはかりながら異文化交流や将来について話すことこそ1番重要と感じ、本学にできたばかりの国際交流サークルの学生やハワイ研修に参加した学生を中心に、プログラムへの参加を促しました。10名ほどの本学の学生達は身振り手振りの英語を駆使して一生懸命UH学生と「会話し」、英語と日本語入り混じった賑やかな「語学実践教室」は深夜まで続くなど、彼らは改めて未知なる学びの楽しさを味わったようです。



明成高校で味噌作りを体験するハワイ大からの留学生



女川町での被災地ボランティアにも参加

研修全体は一言で表現しきれないほど豊かな構成で、そのすべてを実現できたのもご協力頂いた先生方・職員の方々のおかげに他なりません。明成高校では調理科の格別なご配慮により味噌の仕込みに参加し、UHの学生達は生まれて初めて日本の伝統的な食材である味噌がどのように日本の和食のなかで息づいているかを学びました。自分たちが調理した食事を同じテーブルで味わいつつ明成調理科の高校生ともすぐに打ち解け、最後はお互いに名残を惜しんでいました。

特にUH学生達の心に残ったのは、女川で健康運動指導を補助した時だったそうです。東日本大震災で住む家や家族を失ってしまった当時のお話を聞き、その想像もつかないような辛さを心に抱えているにも関わらず、楽しそうに運動していた高齢の被災者の姿を目の当たりにし、それぞれの学生達が自分の悲しみとして受け止めつつ、大震災を経てなお希望を失わない姿を忘れることはないでしょう。被災者のお一人が、ご自分の孫くらいの年齢の学生のジョニーさんと「絶対また遊びに来てね」と握手を交わしていた姿がとても印象的でした。

このプログラムを通し、ハワイ大学の学生は様々な人と出会い、日本という国について理解を深めたに違いありません。10日間という短い期間でしたが、一人でも多くのハワイの学生の未来に輝きが増し、本学の学生達が言葉の壁を越えて育まれる友情を通して本当の意味で国際的な人材に成長するよう願っています。たくさんの方々にご協力頂き誠にありがとうございました。今後このプログラムが末永く続き、ハワイ大学キネシオロジー学科との関係が更に深まるよう祈念致します。

(報告：白幡 恭子 講師)

「東京おもちゃショー2016」でボート競技をPR

「東北こども博」特別協力先である一般社団法人日本玩具協会が主催する「東京おもちゃショー2016」が、6月9日～12日（一般公開は11日と12日）まで東京都江東区有明の東京ビッグサイトにおいて開催されました。これは国内外のおもちゃを一同に集めた展示会となっています。一般公開日の来場者は1日目が7万2千人、2日目が7万人と2日間の合計で14万人の来場という盛況ぶりでした。その中で子供文化の発展に賛同する企業や団体を集めた「キッズライフゾーン」に今回で5年連続となる本学のブースを出展しました。

今年は、ローイングエルゴメーターによるボート競技体験と、パーテーション掲示として本学PRパネル（「東北こども博」6枚、「ボート競技」8枚の計14枚（その他「東北こども博」報告書を設置））を展示し、出展会場では、阿部肇教授、日下部新助手、学生スタッフ（漕艇部員）3名、千葉勝彦コンサルタント、西塚重良事業戦略室長の合計7名がスタッフとして対応しました。

当日は小学生中心に老若男女がローイングエルゴメーターによるボート漕ぎにチャレンジしていました。1人当たり2分～3分の体験で、1日当たり約460人で2日間合計920人程度と、終始行列が途絶えることなく、終了時間まで体験を待ちわびる人でごった返していました。仙台大学の様々な取り組みに関し、東京を中心としたお子さんやその保護者の方々に理解を深めていただく場として「東京おもちゃショー」は年を重ねるごとに大きな反響を得ています。

（報告：事業戦略室 西塚 重良）



子どもたちにボート体験の指導を行う漕艇部員ら

平成28年度 学生ボランティア促進キャンペーンイベントに参加

平成28年6月12日（日）アーツ千代田3331（東京都千代田区）で開催された復興庁主催の「平成28年度学生ボランティア促進キャンペーンイベント“今だからできること～復興の先を見据えて～”」に、健康福祉学科4年木村金次郎、運動栄養学科4年大場萌子、健康福祉学科3年浅井美樹の3名が参加しました。このイベントは、東日本大震災からの復興のさらに先を見据えた取り組みについて、大学生を中心



イベントに参加した本学学生

とした若い世代が考えを発信し合うことで連携を促し、より多くの人々に被災地の復興について考えていただくことを目的とし、今年初めて開催されました。今回は、復興庁が選定した12大学の32名が参加し、交流を深めました。

当日は、各大学の活動について発表し合う座談会や、復興の先を見据えて「今、何ができるのか」を参加者同士で考えるワークショップが行われました。参加した学生たちからは「東北の魅力を発信していくことが復興の先につながる」、「同じ意識をもった今回の参加者が繋がりを深めることで、それぞれの活動が更に良いものになるのではないか」等、復興支援に携わる学生たちだからこそ考え付く意見が多く挙がりました。

今回参加した3名の学生は、他大学の学生との意見交換の中で、被災地にある大学生の使命を改めて役割を考えることができました。東北・宮城の復興に貢献していけるよう、学生たちとともにこれからも積極的に活動していきます。

（報告：新助手 齋藤 まり）

健康づくり運動サポーター認定証授与式 ～新たに33名の学生が健康づくり運動サポーター資格を取得～

平成28年6月2日（木）に本学独自の認定資格である「健康づくり運動サポーター」（以下、健サポ）の認定証書授与式を開催しました。今回は平成27年度に養成講座と実習を終え、4月の審査会で資格を認定された初級32名、中級1名の計33名に対して、認定証書が授与されました。

今回初級資格を認定された学生からは、「今回の実習を通して、コミュニケーションで大切なことは相手の気持ちを考えることであることを参加者との触れ合う中で知った。今後も、地域の方々の健康づくりのお手伝いができるように中級取得を目指して頑張りたい」等の感想が述べられ、学生が実習を通して学びを深めたことが伺えました。

今年で9年目を迎えたこの健サポ養成は、これまで延べ474名が資格を取得しました。各授業で得た専門知識をアウトプットし、学びを深める場として、地域での現場実習は非常に有効であると考えています。今後も多くの学生が本資格の取得に励めるよう、全力でサポートしていきたいです。

（報告：新助手 齋藤まり）



サポーター資格を取得した学生たち

花いっぱい運動に柔道部員が参加



柔道部員と女性部の皆さん

6月1日（水）に柴田町商工会女性部が主催する「花いっぱい運動」が行われ、本学柔道部の女子部員11名が参加しました。当日は船岡駅前に設置されているプランターの土の入れ替え作業やベゴニアの花の植栽作業を行いました。

この運動は船岡駅前をきれいな花でいっぱいにし、地域住民や観光客の心を和ませようと約30年前から続いている取り組みです。

柔道部は昨年から参加しており、今年の秋にはボタンやビオラを植栽する予定になっています。

運動を主催した志太町商工会女性部の大槻会長は「みなさんのおかげで船岡駅前がとてもきれいになりました。ありがとうございました。」と柔道部員の労をねぎらっていました。

柔道部員はこれまでもまして地域住民とのつながりを深めることができたようです。

（報告：学生生活室）

第四体育館に「バレエバー」を導入

このほど、第四体育館に「バレエバー」が導入されました。バレエバーとは新体操競技のトレーニングに用いられる器具で、バーを使用しながらトレーニングを行うことで、身体の細部への意識付けや体幹を鍛えることが可能です。このバレエバーを用いたトレーニング方法は約350年の歴史がある伝統的なトレーニングなのだそうです。

今回導入したバレエバーは新体操競技部の部活動での使用はもちろん、「ダンスⅠ」や「新体操」の授業でも使用されています。また、「みやぎジュニアトップアスリートアカデミー事業」や公開講座として行われている「ジュニア新体操教室」などでも使われており、学生だけではなく、地域の子どもたちも広く使用可能な器具となっています。



バレエバーを使った授業の様子

中国青海省体育科学研究所との国際交流に関する協定書調印



青海省帯域科学研究所の皆さんと本学関係者

平成23年3月7日付けで締結していた「日本国私立仙台大学と中華人民共和国青海省体育科学研究所との間における国際交流に関する協定書」の有効期間満了に伴い、これまでの協定内容と同じくして新たに契約を交わしました。調印式には楊海宁青海省体育局副局長、馬福海青海省体育科学研究所所長はじめ青海省より4名、本学からは阿部学長、荒井国際交流センター長、馬講師、金講師、西塚事業戦略室長の5名が出席しました。馬福海所長と阿部学長が協定書に署名し、両機関の更なる交流の発展を確認しました。

(報告：事業戦略室)

タイ シーナカリンウィロート大学より教職員来訪

6月13日にシーナカリンウィロート大学（タイ）より Supranee Kwanboonchan 体育学部長、Aotip Ratniyom 経済公共政策学部長、Sirinoot Teanrungrroj 理学部長、Wanee Aujatid 人文学部長ほか3名が交流促進および本学に派遣している留学生との面談のために来訪されました。同大学は教育単科大学が前身の国立大学であり、体育学部とは本学からの交流打診により平成19年に交流が始まりました。13日に行われた国際交流会議ではシーナカリンウィロート大学より体育学部以外の学部の紹介もされました。今後他学部の学生も短期留学生として本学へ派遣したいとの意向を受け、阿部学長より歓迎する旨が伝えられました。翌日には仙台を發たれ、一行は筑波大学、明治大学を訪問し、18日帰国の途に就かれました。

(報告：事業戦略室)



シーナカリンウィロート大学の皆さんと本学関係者

台湾 台東大学より教職員来訪



台東大学の教職員と本学関係者

6月29日に台東大学（台湾）より梁忠銘教育学部教授を団長に、范春源体育学部長ほか5名の体育学部関係者が来訪されました。台東大学から本学には現在、学部では1年留学の3名と2年留学（ダブルディグリー制度）の2名が、大学院では3名の台東大学卒業生が学んでいます。本学からも毎年3月に1ヶ月間短期留学生を派遣しており、昨年・一昨年に台東大学へ留学した本学学生4名も台東大学からの留学生8名と共に一行を迎えました。本学滞在中は留学生との面談、学内施設見学、また教職員との交流を深める時間を過ごされました。一行は同日の16時より学食なちゅらにて行われたリオデジャネイロオリンピックへ出発する南條先生・大元選手の壮行会にも特別来賓として出席され、梁団長より激励の言葉

とお二人の活躍を願って台湾の金門島で高粱から作られた「白酒」が送られました。一行は翌朝には関西に向かわれ、台東大学の他協定校を訪問されました。

(報告：事業戦略室)

横川 和幸 仙台大学元教授からの報告～ミャンマーで陸上競技を指導～

新年度を迎え3ヶ月が経ち新入生も仙台大学の雰囲気慣れてきたことと思います。当方もミャンマー（ヤンゴン）に着任して100日が経ちました。しかし、いまだに暑さや食べものに適応できていません。連日45度の暑さは何と表現したらいいのか？

現在の仕事は「INSITUTE OF SPORT PHYSICAL EDUCATION」（保健・スポーツ省）でコーチ達に基本的なトレーニングを指導しています。この施設はイギリス領の時の競馬場を利用し20年前に設立されました。広さは146エーカー（約58万平米）、とても広く自転車やバイクがないと各施設への移動には時間がかかります。現在33競技、コーチ約80名、学生数は約750名です。ビリヤード、スカッシュ、ウシュ（ミャンマーの格闘技）、セパタクローなどがあり面白く見えています。

ミャンマーには、現在体育大学がなくコーチ達は自分の経験やインターネットを頼りに指導にあたっています。そこで、基本的なトレーニング8つを設定して（コーディネーショントレーニング、プライオメトリックトレーニング、コンディショニングトレーニングなど）ワークショップを行っており、コーチ達は興味深くこのワークショップに参加しています。（スマホ片手に各種運動を録画しています）

先日は、保健・スポーツ省の要請で首都ネービドー（ヤンゴンから北へ約330km）で同様のワークショップを行ってきました。ワークショップは「ゴールド・キャンプ」という東南アジア10か国大会を開催した時に作られた施設で行いました。その時の情報として、間もなく国立の体育大学ができると云うことをうかがいました。既に建物ができていますが、付帯施設が未だのようです。しかし、ゴールド・キャンプ内に素晴らしい競技施設が充実していますので当面はその施設を利用するとか。

間もなく雨季に入ります。「雨季に鬱になる」と云われていますが何とかその時期を乗り越えたいと思います。

（報告：横川和幸 元仙台大学教授）



研修終了後の集合写真



ゴールドキャンプの陸上競技場

第7回仙台大学体育祭開催



今年で第7回目となる体育祭が、5月28日（土）に第五体育館を会場に、1年生チームや留学生チームなどが参加し開催されました。

開会式で阿部芳吉学長から「2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、ぜひ本学の学生から活躍する人材を生み出していきたいし、皆さんにはその可能性が十便にあります。今日は学生間の交流・親睦が目的なので、競技を精いっぱい頑張ることはもちろん、仲間との親交を深めてほしい。」とご挨拶をいただきました。

体育祭は特に入学間もない1年生同士の親交を深めることを目的に毎年この時期に学友会が主催し開催されています。

（報告：学生生活室）

中国国費留学 上海体育学院 修士課程修了 中野 拓也さん(平成24年体育学科卒) ～最も優れた留学生に与えられる「榮譽証書」も授与される～



6月28日（火）、国際交流提携校の中国上海体育学院の国費留学生として1年間の語学研修後、3年の修士課程を終え、朴澤理事長・学事顧問、阿部学長をはじめ国際交流センター教職員などへの報告のため、中野拓也さん（平成24年体育学科卒）が大学へ来訪しました。

中野さんは上海体育学院の修了証書と共に、大学内外での積極的な活動やスポーツなど顕著な成績が認められ、留学生の中で最も優れた留学生与えられる称号「榮譽証書」も授与されました。球技大会ではサッカーチームのキャプテンを2年連続で務め優勝に貢献、校内の歌の大会で中国国内で流行するチャイニーズポップスを披露したりと積極的に留学生活を送ってきたそ

うです。

大学へ来訪した同日は、仙台大学大学院修士論文中間発表の日でもあり、後輩たちの学びの成果などを聴講しました。上海体育学院から本学大学院修士課程に留学中の吳 雪（ご ゆき）さんは、彼女が仙台大学へ留学する際に、食事や文化の違いなどの様々な不安の相談を中野さんがアドバイスしていたことから特に印象に残ったそうで、「修士論文の中間発表では日本語の習得もかなり上達し、論文の内容も素晴らしい内容であったと思う。彼女の日本での努力の姿が見れてとても嬉しかった」と話してくれました。

中野さん自身、上海体育学院では、主にスポーツマネジメントの分野を学び「上海申花サッカークラブチームとベガルタ仙台の経営モデルの比較について」をテーマに修士論文を書き上げました。

また中野さんは、社会人サッカーのチームメイトだった日本人の上海支社長に誘われ、すでに日本の貿易会社に就職が決まっており、東京本社での7月1日からの研修を経て10月以降は上海駐在員として勤務するそうです。

中野さんは留学生活を振り返り、「ほんの少しの勇気と行動が今に繋がっている。日本の強みと弱みなど、海外に出て初めて感じる。人生の中で貴重な体験をしたと思っている。仙台大学を通して出来る留学のチャレンジを、せずに終わらせるのはもったいない。」と後輩たちへのメッセージを残してくれました。



上海体育学院に留学している仲間とともに
左から菊地さん、中野さん本人、石橋さん



修了生とともに



博士課程(スポーツ医学系)へ進むガーナ人のルームメイトは3年間同室で、かけがえのない親友

第9回七十七銀行陸上競技記録会(チャレンジ2016)を初めて共催

6月4日(土)、仙台市陸上競技場で第9回目となる七十七銀行陸上競技記録会(チャレンジ2016)が開催され、仙台市陸上競技協会とともに、仙台大学が初めて共催者の一員として、名を連ねました。これは、名取英二准教授の本学教員就任に伴い、これまで同氏が七十七銀行陸上競技部指導者として、長年、宮城陸上界の振興を図るべく実施してきた同銀行主催の記録会の運営について、体育系大学の仙台大学も同じ趣旨を担う一員として位置づけて頂くことになったことに伴うものであります。そして、この記録会の特色は、トップアスリートのみならず参加者の誰しものが、自らの記録を公式のものとして確認することができる点にあります。



好天のもと、200名を超える県内各地の中学生から成人までの参加者を前に、氏家七十七銀行頭取が、仙台大学も共催に加わったことを紹介され、緑色の統一ユニフォームを身に纏った本学陸上競技部の部員達も、晴れがましく、この紹介の栄に浴しました。今回の記録会では、七十七銀行陸上競技部の新監督の専門種目であるやり投げ競技から、村上幸史選手(アテネ、北京、ロンドン五輪の各日本代表)と北口榛花選手(2016世界ジュニアランキング1位)の2名が、七十七銀行陸上競技部部員とともに参加し、花を添えました。

くしくも、来年の第10回記念記録会は、本学の開学50周年にも当たっており、今回は本学における近隣地域の中学生陸上大会のお世話と重なったため陸上競技部の分散参加となりましたが、次回は、本学陸上競技部員全体の参加により、宮城陸上界の振興という使命に対して、共催者としての本学の貢献が目に見える本格的体制で対応することにより、大きな節目を経過したいと感じた次第であります。

(報告：朴澤 泰治 理事長・学事顧問)

第26回仙台国際ハーフマラソンに参加して



大会に参加した岩田准教授と只野予算管理室長

2016年5月8日(日) 午前10時05分スタートの号砲が鳴り響き、同時に打ち上げ花火が白煙を上げ1万3000人余りのランナーが青葉茂る青葉通り、定禅寺通り、美術館、博物館等の街並みを走り、国内有数の自然景観と都市景観が調和した風景が人気スポットを、爽やかに五感をフルに生かしながら距離を稼いでいました。

今年の参加申し込み状況からも分りますように、開始から僅か28分で定員となり走る前から大変苦勞する位の大会となってきました。

そのような仙台ハーフマラソン大会に、一昨年より本大学所属の教職員が同じ趣味を共有する者が一緒に走っております。

ランユニホームは、2017年本学が50周年を表したブルーの半袖タイプと赤色のタイプをデザインしているものを着用して走っていますが、今回も見知らぬランナーから背後より声をかけられました。

声がけは、「仙台大学何期生ですか」「私は大阪から来た20期生〇〇です」「開学から50年経つんですね」と言葉を交わしていただき、同窓生が多く走っていることに気付かされ、また、つながりの大切さを感じながら走っています。

このように今では、東北各地で行っているマラソン大会に50周年記念ユニホームを着用して仙台大学関係者及び同窓生にアピールしながら爽やかな汗を掻きながら体にムチ打って走りきっています。

(報告：青沼 一民 教授)

訃報

6月10日に担当課長の三浦正和氏がご逝去されました。三浦氏は平成23年11月から管理課(現、営繕管理室)において施設管理、備品管理のプロとしてご尽力いただき、本学の発展に大きくご貢献いただきました。心よりご冥福をお祈りいたします。

Monthly Report

『全国初』仙南医療圏における

看護師養成・定着などに関する連携協定を締結



協定書への署名後に握手を交わす(右から)阿部学長、内藤院長、田村校長

7月14日(木)、本学LC棟を会場に、仙南医療圏における看護師養成・定着などに関する連携協定書調印式が開催されました。

この協定は、みやぎ県南中核病院、宮城県白石高等学校、仙台大学の三者間により、仙南医療圏における看護師の人材確保や看護師志望者の進路選択拡大、高大接続教育の新たな展開を趣旨としており、白石高校看護科(専攻科)修了後に本学に編入学し最短2年間で学位を取得後、一定期間みやぎ県南中核病院で勤務することを条件に本学での授業料を免除される仕組みになっています。

調印式で阿部芳吉学長は「今回の協定締結により、中核病院からは、本学での質の高い講義のための支援がいただける。また、専攻科を卒業した後に編入学してくる生徒さんにとっては、部活動等で幅広い人間形成が可能となり、進路選択の幅も広がってくる。更に、本学卒業後は県南中核病院で勤務することにより看護師不足解消の一助となれればと考えている。」とあいさつ。みやぎ県南中核病院の内藤広郎病院長は「協定締結の成果が目に見えるようになるには数年の時間がかかると思うが、医療人の地産地消につながればと考えています。」と述べ、宮城県白石高校の田村至校長も「今回の協定書締結が生徒にとっての進路選択の突破口となり、進路選択の幅が大きく広がっていくことを期待したい。」とそれぞれあいさつされました。

宮城県の仙南医療圏における人口10万人に対する看護師従事者数は全国平均を大きく下回っており、看護師の確保や定着が急務の課題となっています。今回の協定締結により今後、仙南医療圏への看護師の増加や定着が期待されます。

〈目 次〉

仙南医療圏における看護師養成・定着などに関する協定書を締結	1
カリフォルニア州立大学ロングビーチ校の学生が短期研修	2
リオデジャネイロオリンピック柔道競技壮行式	3
赤十字救急法救急員講習会を開催	4
校長就任祝賀会 新規採用教員激励会	5
日本スポーツ栄養学会 第3回大会参加報告	6
卓球日本代表 福原愛選手 仙台大学にサイン色紙を贈呈	7
学生の活躍	

学生の活躍や、取り組みなどを
ご存知でしたら広報室までお寄せ
ください。

Monthly Reportで紹介する他、
報道機関にも旬な話題を提供して
参ります。

本誌へのご意見・ご質問等が
ありましたら広報室までご一報く
ださい。

仙台大学 広報室
直通 0224 - 55 - 1802
E-Mail kouhou@sendai-u.ac.jp

アメリカ カリフォルニア州立大学ロングビーチ校

11名の学生が仙台大学で短期研修

7月19日～29日までの11日間、アメリカ カリフォルニア州立大学ロングビーチ校（CSULB）の学生11名が本学を訪れ、短期留学研修プログラムが行われました。

期間中、留学生はマーティ・キーナート副学長による相撲や高校野球等、日本独特のスポーツ文化についての特別講義、村上教授や山口准教授による鍼灸体験、齋藤教授による剣道など、学内の多くの先生方のご協力を得て開講された特別講義に参加し、留学生はアメリカにはなかなかできない貴重な経験を重ねました。

また、今回のプログラムの中には、東日本大震災の被災地である亘理町の仮設住宅でのボランティア活動や、東北楽天ゴールデンイーグルスとベガルタ仙台のホームゲームの観戦などもあり、被災地の現状の把握や、プロスポーツにおける日米の違いなどをしっかり学んでいたようでした。

留学生の一人であるエマさんは「仙台大学の学生たちが庶民の和食文化である居酒屋に連れて行ってくれたり、授業以外でも今回の留学をサポートしてくれたり、とても楽しく過ごすことができた。朝早くにたくさんの学生が駅まで見送りに来てくれて嬉しかった。また仙台大学に来たい。」と語り、今回のプログラムが大変充実したものになったようでした。

この研修は2013年から行われており、今年で4回目になります。プログラム内の講義や実習に海外興味がある学生や、実際に留学経験がある学生が自らの語学力アップや留学生のサポートを目的として一緒になって参加しているのも特徴です。受入れの回を重ねるごとに本学の学生による留学生に対するサポートも充実してきています。実際に、留学生との交流により自身が留学しようとするきっかけにもなるなど、双方にとって有意義な研修になっています。

〈報告：事業戦略室〉



ベトナム バクマイ病院ご一行が来学

8月22日（金）に、ベトナム保健省及びバクマイ病院リハビリテーションセンターの一行がJICA草の根技術協力事業（ベトナムでの足こぎ車いすを利用したリハビリモデル開発及び、リハビリ人材育成プロジェクト）の一環として本学を訪問し、研修が行われました。

研修では、トレーニングセンターや剣道の稽古の様子、体力測定バス等を見学し、ベトナムでのリハビリテーションで参考にできるか熱心に視察していました。学内の見学の後は、足こぎ車いすの研究を進めている関矢教授の講義と実習を受けられ、有意義な時間を過ごしていました。

〈報告：事業戦略室〉



リオ オリンピック・パラリンピック 柔道競技壮行式



（左から）阿部学長、南條監督、大槻柴田町商工会長

7/27（水）講道館大道場にてリオデジャネイロオリンピック・パラリンピック柔道競技日本代表選手団壮行式が举行されました。初めてのオリ・パラ合同の壮行式ということで、参加者も約300名といつも以上に盛大なものでありました。宗岡正二全柔連会長の挨拶にはじまり、馳浩文部科学大臣、竹田恒和JOC会長の来賓挨拶、橋本聖子日本代表団長他来賓の紹介、選手団の紹介の後、井上康生男子監督に引き続き、本学教授である南條充寿女子監督が挨拶をしました。南條監督は「絶対にひかないで最後まで戦い抜く」と力強く宣言していました。

会場にはたくさんの招待者が駆けつけ、リオ五輪における日本柔道への期待を強く感じました。本学関係者からは、阿部芳吉学長、大槻裕喜柴田町商工会長、南條和恵柔道部女子監督が参加し、柔道ファンの熱気を感じながら、南條監督をはじめとする日本代表選手団に熱い拍手を送りました。

リオ五輪の柔道競技は、8月6日から12日までの間に熱戦が繰り広げられ、本学でも8月11日（水）にLC等を会場にパブリックビューイングが開催されます。

〈報告：柔道部女子監督 南條 和恵〉

今年も熱中症予防プロジェクトチームが活躍！

仙台大学では日々1200名を超えるアスリートたちが、各々の練習場所で汗を流しています。毎年ニュースでは熱中症による死亡事故が相次ぎ、世の中の熱中症予防対策についての関心が高まっており、本学でもアスレティックトレーナー部の学生らを中心に、このほど「熱中症予防プロジェクト2016」を開始しました。

本プロジェクトの目的は、より多くの人に熱中症を知り、予防法や対処法を学んでもらうことで、さらに安全なスポーツ環境を作っていくことです。主な活動として、熱中症勉強会や日々のWBGT測定と危険度の提示を行っています。また、熱中症予防の啓発や、事故対応フローチャートのポスター掲示も活動の一つです。勉強会に参加してくれた各部の学生代表を通し、熱中症が発生した場合の報告も協力してもらい、本学での熱中症発生件数も集計できればと考えています。

プロジェクトリーダーの体育学科3年トレーナーコースの小畑和輝さんは、「本学の熱中症をゼロにし、熱中症が発生しても迅速に対応し、一人でも多くの命を救いたいと考えています。自分が高校生の時に熱中症で倒れた人がいても、その危険性も分からず、水分補給をしていれば大丈夫だと思っていました。今は熱中症に関する正しい知識があるので、少しでも多くの人に正しい知識を伝えていきたいと考えています。」と意気込みを語ってくれました。

熱中症は一般的に体力の低い高齢者や子供がなりやすいと言われていますが、スポーツ現場でも熱中症による死亡事故は毎年発生しています。独立行政法人日本スポーツ振興センターによりますと、平成27年度の学校管理下における熱中症発生状況は4400件に上り、その9割が体育・スポーツ活動中に起きたとされています。また、平成2年度から平成24年度の23年間に、80件もの熱中症による死亡事故が報告されています。ここで言う学校管理下とは、主に幼稚園から高校までの統計ですが、大学も含めば数はさらに増加するでしょう。

熱中症は防げるものです。正しい対応をすれば、誰もが人の命を救うことができます。このプロジェクトを通して、仙台大学熱中症死亡事故ゼロに繋げ、正しい知識が少しでも多くの人に伝わるよう、今後もプロジェクトを継続していきたいと思えます。

〈報告：新助手 鈴木のぞみ〉



WBGT計で測定するプロジェクトリーダーの小畑君

赤十字救急法救急員講習会を開催

平成28年7月2日（土）・9日（土）・10日（日）の3日間、本学学生18名が赤十字救急法救急員講習に参加しました。参加者はアスレティックトレーナー部、女子サッカー部、水泳部、アメリカンフットボール部、レクリエーション部と様々で、受講者全員が厳しい検定試験に合格し、救急法救急員の資格を取得しました。講習では心肺蘇生法（CPR）、AED、固定法、包帯法、搬送法、傷病者救出シミュレーションなど、幅広い内容を講義・実技で学びます。受講目的は様々でしたが、一番多く聞かれたのは「人の役に立ちたい」という想いでした。受講者のアスレティックトレーナー部佐藤健人さん（体育学科：1年）は次のように話しています。「スポーツニュースなどで、心室細動で亡くなる選手がいることを知り、自分も救急法を学びたいと思いました。私はアスレティックトレーナーを目指し活動しているので、今後スポーツ現場に出る機会はずっと増えていきます。万が一の際には救急員として自信を持って、適切な処置で選手の命を救いたいと思います。」

日本では年間7万人もの人が、突然の心停止を起こしています。学校現場における突然死は毎年約50件起きているとの報告もあります。全国的にAEDの設置が進み、本学内にも8か所に設置されています。しかし、事故の際のAED使用率が低いことが課題であり、使用方法を今回のような講習で学び、実際に練習する機会が求められています。救急車到着までにかかる全国平均時間は平成27年度で8.6分ですが、人が倒れてからの救命率は5分で一気に低下します。そのため、その場に居合わせた人のAEDによる迅速な対応が、その人の命を救うという事実をより多くの人に知っていただきたいです。最後に、仙台大学ATルームでは、スポーツを安全に行える環境作りに力を入れております。今後も本学での赤十字救急法救急員養成講習の企画を継続してまいりますので、より多くの方々に参加していただければと思います。

〈報告：新助手 鈴木のぞみ〉



講習会で心臓マッサージを行う受講者

夏季限定！放課後先生『仙台大塾』を開講



開講式であいさつする阿部学長

7月25日（月）、本学LC棟を会場に柴田町内の小学生、中学生約150人が集合し、『仙台大塾』の開講式が行われました。『仙台大塾』は、小中学生が夏休みの課題などを持参して本学で自学自習を行い、わからない問題などは本学学生のサポートを受けながら進めていくという初の取り組みです。

開講式で阿部芳吉学長は、「今回の『仙台大塾』は柴田町からトップアスリートを育てる仕組みづくりの一環。優秀なアスリートになるためにはまず、勉強や部活、人生の生き方を学ぶことが大切。8回の仙台大学での学習を通じて『体・徳・知』を習得してほしい」とあいさつ。船迫邦則柴田町教育長からは「一つ一つの努力は目に見えにくいかもしれない

が、努力を続ければ成果として目に見えるようになる。努力を怠らず、わからないことは学生の皆さんにしっかり聞きながら、一生懸命取り組んでほしい」と参加した小学生を激励しました。

また、参加した小中学生を代表し、柴田町立東船岡小学校6年の高橋 優太君は「学習会が楽しみ。期間中、これまで学んだ漢字や言葉の意味、歴史について確り復習しまとめていきたい」と意気込みを語ってくれました。

この取り組みは、本学と柴田町とが連携して進めている、柴田町トップアスリート事業の一環で開催されたもので、夏休み期間中に計8回開講される予定になっています。

校長就任祝賀会、新規採用教員激励会

第17回「校長職主任祝賀会」第6回「宮城県・仙台市新規採用者激励会」が7月30日（土）、ホテル白萩（仙台市）で開催され、約70名が校長就任と、教員への新規採用を喜び合いました。

今年度は第11回生の石森和義さん（石巻市立和湊小学校）、第15回生の植木薫さん（川崎町立川崎第二小学校）、第17回生の久世達也さん（仙台市立西山中学校）の3名の新たに校長職に就任されました。また、宮城県と仙台市の教員として31名もの卒業生が新規採用されました。

来賓を代表してあいさつした阿部芳吉学長は「これからも、世の中に素敵な子どもたちを輩出してほしいと思います。皆さんの頑張りを期待したいと思います。」と激励され、3名の新校長先生や、小中高校の教員として新規採用となった先生方からはそれぞれのあいさつの中で、仙台大学に対する熱い思いや、教育現場での益々の活躍を誓っていました。

それぞれの先生方の挨拶のあとには、第1回生の岩槻芳夫さんからのエールや、会場いっぱいに輪を作った校歌斉唱など、会場は終始和やかな雰囲気でした。



大和町健康づくりプログラム

仙台大学が連携協定を締結している大和町で7月の延べ4日間、健康づくり支援事業が開催されました。

7月13日（水）には栄養プログラム、7月14日（木）には新体操プログラム、7月28日（木）には水泳プログラム、7月29日（金）には超元気いっぱいタイム（ニュースポーツの指導）と題したプログラムがそれぞれ行われました。

仙台大学と大和町は平成25年9月に連携協定を締結し健康づくり支援事業を進めており、昨年度から大和町立吉田小学校の児童を対象とした支援事業を毎月1回、仲野隆士教授と仲野研究室に所属するゼミ生の協力を得て、ニュースポーツ指導を実施しています。今回実施した4つのプログラムのうち3つのプログラムは、これまで仲野教授が実施してきた事業に併せておこなわれたもので、栄養プログラムは藤井久雄教授、渡部由佳助教、山上はるか新助手が、新体操プログラムは河野未来助教が、水泳プログラムは渡邊泰典講師がそれぞれ小学生に対してプログラムを実施しました。

参加した児童は、1つ1つのプログラムを考え・楽しみながら活動している様子が印象的で、時には出来ないのが悔しくて涙を流す児童もいましたが、次のプログラムまで一生懸命練習している姿に心を打たれました。

今後もこの支援事業は継続される予定で、児童が少しでも運動する楽しさに気づくことを願い、努めてまいります。

〈報告：スポーツ健康科学研究実践機構事務室 石川 美香〉



（左上から時計回りに）栄養プログラム、新体操プログラム、水泳プログラム、超元気いっぱいタイム

日本スポーツ栄養学会 第3回大会 JSNA2016 参加報告

今年2016年、リオデジャネイロオリンピックパラリンピック開催の年、そして翌年には第72回国体を控えている松山市にて日本スポーツ栄養学会第3回大会が開催されました。

今大会は『飛躍するスポーツ栄養学 From 四国』をモットーとして開催されました。3日間のプログラムには、体の中からスポーツ栄養学を見る（診る・視る・観る）という切り口でシンポジウムや教育講演が盛り込まれていました。様々な観点から報告・発表がされる他、各企業の展示ブースが設置されておりました。更に、特別企画には阿波踊りをベースにした徳島県民健康づくり運動としての阿波踊り体操、伊予松山城を一周する朝のFun Walk などもあり、学術的な充実だけではなく、実際に体を動かし、楽しく学びを深め、共有する大会であったと感じました。本大学からは、岩田純准教授、早川公康准教授、平良拓也助教、三品朋子新助手、菊地遥新助手、山上はるか新助手、早田地翼さん（大学院生）が口頭発表を行い、それぞれが深めてきた研究内容を報告しました。

本学会にて、神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部の鈴木志保子教授による講演では「スポーツ栄養マネジメントを理解しよう」という題材でした。公認スポーツ栄養士は、さまざまな角度で評価され、スポーツ栄養マネジメントのシステムに従ってサポート活動を遂行していくことにより、スポーツ栄養士自身も他者、（個人やチームなど）更には全体に対しても仕事の評価をすることができます。評価することにより、次のサポートや評価の質を向上することが出来ます。スポーツ栄養マネジメントが現場で確実に実施できる管理栄養士に公認スポーツ栄養士の資格を授与され、プロフェッショナルとして誇りを持って仕事をしたいと思わなければ、養成課程でのインターンシップや検定試験を突破できません。強い信念と情熱をもって欲しいと、未来のスポーツ栄養を担う人材に対してのあり方について講演されました。

本学、運動栄養学科に設立された運動栄養サポート研究会は今年で14年目を迎え、新たに導入された新制度も始動しています。今大会での様々な競技種目、視点から報告された内容には、本学

の研究会において更なる飛躍へと繋げるきっかけとなる内容が多々ありました。

本研究会では未来のスポーツ栄養士を目指している学生が集い、活動を行っています。近い将来、本学からも多くの成功例や活躍の場を広めていくために、私たち教職員も一丸となって全体を盛り上げていく必要があるのではないかと感じます。

スポーツ栄養学が世界中で期待が高まっている中で、『今のスポーツ栄養学にできることは？』『なにが託されているのか？』という視点も持ち合わせ、更に発展させていく意識を忘れてはいけなと強く感じた学会でした。

今回学び得た事を踏まえて、更なる向上心を持ち、運動栄養学科並びに仙台大学の発展に貢献できるように尽力して参ります。

〈報告：新助手 山田 大進〉

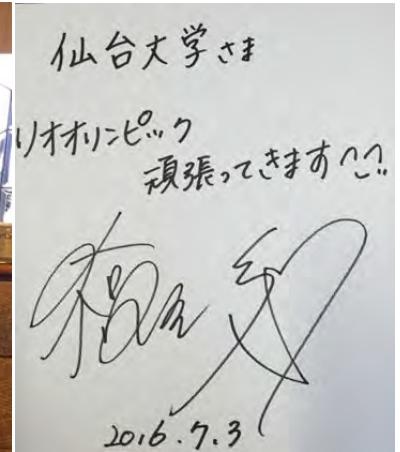


卓球日本代表 福原 愛 選手 リオ五輪の意気込みを書いた色紙を仙台大学に贈呈

リオデジャネイロ五輪に出場する卓球女子日本代表の福原愛選手と伊藤美誠選手が、7月1日～4日まで、仙台市青葉体育館で合宿練習を行いました。仙台大学卓球部監督として、その公式練習を参観しました。

卓球女子は、ロンドン・オリンピックでは女子団体の決勝で中国に敗れたものの、日本卓球史上初となる銀メダルを獲得しており、リオ・オリンピックでのメダル獲得に向けて、今回合宿では、中国や韓国等のライバルの戦型を想定したダブルスの練習が行われました。練習後の宿泊先ホテルでは、福原愛選手と、中国における長期練習滞在の際の遼寧省チーム（私のかつての所属チーム）の話や、卓球男子日本代表のフィジカルコーチである仙台大学OBの田中礼人さんのこと等について、流暢な中国語で語り合うことができました。そして、最後に、リオ五輪出場に向けた意気込みを色紙に書いて仙台大学に贈呈して頂きました。

〈報告：馬 佳濛 講師〉



（上）福原愛選手からのサイン色紙
（左）色紙にサインをする福原愛選手

男子サッカー部と男子バスケットボール部が学長へ活動報告

<仙台大学広報室>

第17回東北地区大学サッカー選手権大会 優勝を学長に報告
平成28年7月6日（日）@学長室



阿部学長に優勝を報告する男子サッカー部の選手とスタッフ

<仙台大学広報室>

男子バスケットボール部
平成28年度東北地区大学体育大会優勝を学長に報告

平成28年7月6日（水）@学長室



阿部学長（右から2番目）に優勝を報告する男子バスケットボール部の中村主将（左から2番目）とスタッフ



繁田 秀斗 主将
体育学科4年
埼玉県与野高校出身

「東北大会では他大学を圧倒する戦いことができました。全国大会でも自分たちのサッカーで
“頂点”を目指して頑張ります」



中村 優斗 キャプテン
現代武道学科4年
宮城県・明成高校出身

「9月・10月に開催される東北リーグで必ず優勝してインカレ出場の切符を勝ち取り、インカレでの勝利を目指します！」

Monthly Report

リオ五輪 女子柔道のパブリックビューイングを開催 ～女子70kg級で田知本遥選手が金メダルを獲得～



田知本選手と南條監督を応援する柔道塾の子どもたち

8月10日（水）午後10時から11日の未明にかけ仙台大学ラーニングコモンズ棟において、リオデジャネイロオリンピック女子柔道のパブリックビューイングが開催されました。会場には、仙台大学柔道塾に参加している子どもたちやその保護者、地域の方々や仙台大学関係者など約110名の方々にお集まりいただき、仙台大学教授でリオ五輪柔道女子監督の南條充寿教授と女子70kg級田知本遥選手に大声援を送りました。仙台大学パブリックビューイング会場からの大声援が届いたのか、田知本選手は見事金メダルを獲得しました。本当におめでとうございます。

監督と選手の頑張りをまぶたに焼き付けた柔道塾のこどもたちの中から、日本の柔道界を担う未来のオリンピックが誕生することを願っています。

また、8月17日には、南條充寿教授が朴澤泰治理事長・学事顧問と阿部芳吉学長を訪れ、帰国の報告を行いました。南條教授は「パブリックビューイングを行っていただくなど、皆さんからいただいた多くの応援に感謝したいと思います。おかげさまで金メダル1個と銅メダル4個のメダルを獲得することができました。」とリオ五輪での活躍を報告しました。

これに対し阿部学長からは「大変なプレッシャーの中での戦いだったと思う。金メダルの獲得、本当におめでとうございます。」と南條教授の労をねぎらっていました。

南條教授は、オリンピックの疲れも見せず、帰国後早々から柔道部員・柔道塾の子供達の指導に精力を傾け、10月9日～10日と本学を会場に実施される「柴田町町制60周年記念2016東北こども博」で田知本選手と南條夫妻とのトークショーも予定されるなど 次世代のオリンピック誕生に向けてすでにスタートしています。

〈目 次〉

リオ五輪 女子柔道の パブリックビューイングを開催	1
朴澤理事長・学事顧問らが中国高 地国際体育学会に参加	2
今年も大盛況「仙台大学オー プンキャンパス2016」	3
地方自治体・企業等の立場から の点検・評価	4
本学の学生3名が人命救助	5
国際交流の様子	6-7
学生の活躍	8
「子ども運動教育学科」 平成29年4月に開設	9

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室

直通 0224 - 55 - 1802

E-Mail kouhou@sendai-u.ac.jp

南條教授からのコメント

応援下さったすべての方々へ

パブリックビューイングでの応援、ありがとうございました。皆さんのご声援のおかげで、田知本遥選手も持っている力を全て出してくれ、金メダルを獲得することができました。今日、応援してくれた皆さんの中から、またオリンピックに出る選手が出てきてくれると嬉しいです。皆さん、誠にありがとうございました。

リオ五輪柔道女子監督 南條充寿



奥様で仙台大学女子柔道部監督の和恵さんとともに
リオでの活躍を報告

朴澤理事長・学事顧問らが中国高地国際体育学会に参加

8月2日から6日までの4日間、中国の青海省体育科学研究所にて、第4回中国高地国際体育学会が開催されました。本学会は、高地におけるトレーニングや健康増進などの研究活動を国際的な観点から報告する会です。本学からは、青海省共同研究実行委員会の実行委員長である朴澤泰治理事長、発表者として、健康関連調査担当の実行委員笠原岳人准教授、東北師範大学出身の大学院2年金瑞年氏、通訳として大学院事務室馬冬梅氏の4名で参加をしてきました。

発表者の笠原准教授は「日本と中国における健康関連指標の国際・地域比較に関して」、金氏は「日本と中国における身体活動量の地域間比較」というテーマで発表を行いました。発表の概要は、中国の教育研究機関（青海省体育科学研究所、上海体育学院、瀋陽師範大学）と、柴田町の一般健常者を対象に、骨密度と体組成の測定、身体活動状況の聞き取りなど、それぞれの地域ごとで実施した3項目を中心に比較検討した内容です。

健康をキーワードとした研究発表も多く、その背景には、中国国内における幼少期の肥満傾向児の増加が問題視されていることがあるようでした。今後は、高地という環境下での身体活動が及ぼす効果が期待されているようで、発表後の質疑応答のなかでも、健康づくりに関連する内容で意見交換をすることができました。大学院生の金氏も自身の研究に関連した内容について、研究者と意見交換をすることができ、大変貴重な経験を積むことができたと思われまます。

参加者の多くが、地元中国の研究者でしたが、フランス、ドイツ、韓国で活躍する研究者から、自国における高地トレーニングの研究成果を聞き、改めて高地における研究領域の広さを実感しました。

今回参加させていただいた国際学会では、本学と国際交流協定機関を結ぶ中国の教育研究機関の全面的なご支援のもとで発表につなげることができました。

これらの成果を踏まえ、引き続き、青海省共同研究実行委員会の朴澤理事長・学事顧問を中心に、さらなる研究活動の公表に向けた活動を行っていきたいと考えております。

（報告：笠原岳人 准教授）



今年も大盛況「仙台大学オープンキャンパス 2016」



8月6日（土）、「仙台大学オープンキャンパス 2016」を実施し、1,043名（生徒677名・同伴者366名）の方々においで頂きました。オープニングセレモニーでは、保科政翔（ほしな・まさと）さん（体育学4年―北海道函館陵北高校出身）と穴戸香菜子（ししど・かなこ）さん（健康福祉学科4年―仙台東高校出身）の元気溢れる司会により明るく楽しい雰囲気です。セレモニーは進み、各学科を代表する学生がそれぞれの学科の特徴などをわかりやすく紹介してくれました。

オープニングセレモニー終了後には、5学科の体験・紹介コーナーやミニ講座「教師になろう!」、進路紹介「スポーツ選手を支える仕事」、小論文対策講座、個別入試相談会、仙台大学とオリンピック・プロスポーツに関する展示会などを行い、参加した高校生や保護者の皆様方には仙台大学の魅力や取り組みをなお一層理解していただけたことと思います。

暑い中でのご来場、誠にありがとうございました。

リオ・パラリンピック ボッチャ競技 ヘッドコーチに大学院1年の村上光輝さんが就任

9月7日からリオデジャネイロで開催されるパラリンピック競技大会ボッチャ競技の日本代表ヘッドコーチに、本学大学院1年の村上光輝（むらかみ・みつてる）さんが就任することとなりました。

8月17日（水）には阿部芳吉学長を表敬訪問し、「リオでのパラリンピックでメダルを獲得し、ボッチャ競技の普及に繋がりたい。」とリオデジャネイロでの活躍を誓いました。

村上さんは福島県出身の42歳。東北地方でボッチャ競技の選手を育成したいという思いから本学大学院への入学を決定。「地方にいる選手のレベルが上がれば全国のレベルを上げていくことができる」という思いを抱きながらボッチャ競技を支えています。

オリンピックに引き続き、パラリンピックでも本学関係者が活躍します。



阿部学長にヘッドコーチ就任の報告をする村上さん

仙台大学広報誌『S.U.N. 19号』を発行

このほど、仙台大学広報誌『S.U.N. 19号』が発行されました。

今号では、全日本柔道女子監督として出場した南條充寿教授と本学女子柔道部監督で奥様の和恵さんとの対談や、教採塾の取り組み、文部科学省からの補助金にて導入した「可搬式スポーツ動作情報リアルタイム解析・評価装置」などについて紹介させていただいています。

また、表紙を飾ってくれたのは女子サッカー部の須永愛海（すなが・まなみ）さん（体育学科4年―福島県富岡高校出身）。須永さんはこれまで数多くの国際大会に日本代表として出場しており、今年もU23の代表にも選拔されました。

『S.U.N.』は年2回、8月と2月に発行しており、在学生の保護者や卒業生、宮城県内各高校など、広く一般の方々にも配布しています。

次号の発行は来年の2月です。掲載してほしい記事や話題がありましたらお気軽に広報室までご連絡ください。



地方自治体・企業等の立場からの点検・評価



貴重なご意見を頂戴しました

8月23日（火）、大学改革に係る地方自治体・企業等からの点検・評価を、水戸柴田町副町長、安部俊三柴田町議会議員（本学OB）、大槻裕喜柴田町商工会長の3名の方々にお越しいただき開催されました。

冒頭、阿部学長が「多くの意見を頂戴し、今後の教育の質向上やより一層の地域貢献、産業界等と連携した教育研究に繋げていきたい。」とあいさつを述べました。その後、意見交換が行われ、水戸副町長からは「アクティブ・ラーニングを発展的に展開し、公共サービスへの寄与やビジネス化、産業の創出に繋げてほしい。」、安部議員からは「大学と町との関係は良好であるが、どのように連携しているのかということは多くの町民は知らない状況にあ

る。連携した取り組みなどを町全体に周知してはどうか。」、大槻会長からは「地域の特産品づくりを進める際、運動栄養学科の先生方や学生の皆さんに協力をいただき完成した。今後も大学からの協力、ノウハウの提供をいただきながら進めていきたい。」など、それぞれの方々から本学に対する多数のご意見やご助言を頂戴しました。

本学は来年度、創立50周年を迎えます。地元の柴田町の方々に支えられてまいりました。今後も地域とともに発展し続ける大学をめざし、邁進して参ります。

仙台大学バレーボール縦の木会主催の大会を開催

7月30日（土）、31日（日）に本学の第2体育館および第5体育館において、本学OB・OGの先生方が中学校、高校でバレーボール部の顧問をされているチームが参加して「縦の木杯」が開催されました。本大会は毎年行われており、今回で縦の木会長杯（高校女子）は第35回、宍戸勇杯（中学男子）は第6回、松本昌三杯（中学女子）は第18回を数え、歴史ある大会となっています。参加チームは本学の卒業生が顧問をしているチームで、宮城県だけでなく他県からもチームの強化のために参加していただきました。

また、これまではOB・OGの先生方による企画、運営だったものを今年度より仙台大学の専門教養演習における授業の一つのコンテンツとし、この授業を履修している本学男子バレーボール部および女子バレーボール部の学生を中心にOB・OGの先生方の指導を仰ぎながら準備段階から当日の運営まで進めて参りました。

大会当日は大変暑く熱中症の危険も心配される中、その暑さに負けないような白熱した試合が展開され、参加チームの選手はひたむきにボールを追いかけていました。

今後も本学OB・OGの先生方との連携を深め、様々な方面でご指導・ご協力を頂きたいと思います。



開会式（上）と白熱したゲーム

★宮城県外のチーム（中学校は全チーム宮城県内）

新潟県 新潟中央高等学校 上村 裕希 先生（26回生）
 福島県 磐城第一高等学校 江尻 沙和香 先生（41回生）
 青森県 千葉学園高等学校 糸坪 美里 先生（44回生）

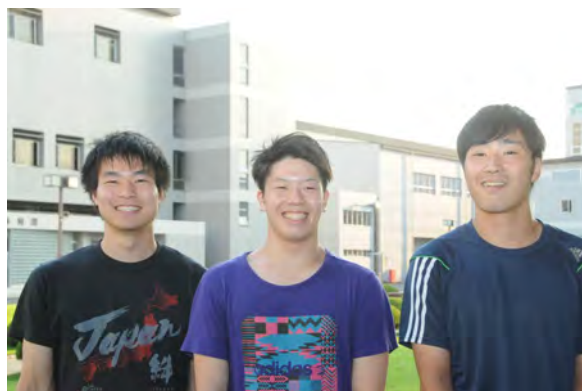
報告：新助手 中村 祐太郎
 バレーボール部 田村 佳樹（体育学科4年）

本学の学生3名が人命救助

8月4日（木）船岡地区に在住する女性より、本学学生の行った行動に対して感謝のお電話がありました。

電話の内容は、7月30日（土）午後に路上で倒れていた高齢の男性をたまたま通りかかった本学学生3名が発見し、適切な応急処置をしてくれたというものでした。この3名の学生は、男子新体操競技部の小原一誠さん（体育学科4年）、松根光介さん（現代武道学科4年）、佐藤健太郎さん（体育学科2年）。3人によると、帰宅のために歩いていると目の前で高齢の男性が倒れていたそうで、当日は高温だったため熱中症を疑い、手分けをして日陰に運び、119番通報や意識確認、近所で水をもらってくるなどしたそうです。

後日のご家族からのご報告によると、倒れた男性も大事に至らず順調に回復しているとのことと、この報告に、3人は「とにかく助けなければならないと必死でした。大事に至らなかったと聞きホッとしました。」と話してくれました。



人命救助を行った（左から）佐藤さん、小原さん、松根さん

生活習慣改善支援事業

～リコーインダストリー(株)でよさこいソーラン節を指導～

仙台大学では平成24年度よりリコーインダストリー株式会社様と生活習慣改善支援事業の契約を結び、運動指導、レクリエーション活動支援等を行ってきております。その一環で、平成28年8月26日（金）柴田町内にあるリコーインダストリー東北事業所で行われた「2016東北事業所夏まつり」のレクリエーション企画「よさこいソーラン節」の指導をスポーツ健康科学研究実践機構の齋藤まり新助手と菅陽大が対応して参りました。

7月26日から8月24日までの約1ヵ月間、リコーインダストリーの社員計15名と共に、本番当日に向け練習を重ねてきました。

当日はリコーインダストリーの社員を中心に約700名が来場され、その中で練習の成果を披露し、大好評を博すことが出来ました。

今回の「よさこいソーラン節」を振り返り、リコーインダストリー事務局の栗野久恵さんからは「お祭りの最初の出し物として会場を盛り上げるために、『よさこいソーラン節』を企画しました。今回、仙台大学から指導を受け練習する事で、普段体を動かす事が少ない人も体を動かす機会が増え、健康増進、生活習慣の改善に繋げる事が出来ました。練習には、真剣かつ楽しく取り組むことができ、本番が終わった時にはやりきった気持ちと共に、終わってしまったというさみしい気持ちもありました。来年度もまたこのような機会がありましたらヨサコイをやりたいです。」と指導への総括をして頂きました。

今回、リコーインダストリーの方々への指導を通し、一緒に活動出来たことは我々にとって大きな経験となりました。今後も企業支援活動等を通じ地域貢献活動に繋げて行きたいと思っております。

〈報告：スポーツ健康科学研究実践機構 菅陽大〉



よさこいソーラン節を披露する社員の皆さん

ハワイ大学教育学部のHPで本学での留学プログラムの様子が紹介されました

News

KRS sends first delegation in 13 years to Sendai University

Posted on August 26, 2016

Five undergraduate students from the Department of Kinesiology and Rehabilitation Science (KRS) and assistant professor Yukiya Oba visited [Sendai University](#) in Funaoka City, Miyagi, Japan to conduct an 8-day field study around the greater Sendai area from June 5 to 12, 2016, as part of the KRS 208 Recreation Services in Contemporary Society course. This visit marks the first time for KRS to visit Sendai University in 13 years since the two institutions started cultivating their collaboration and partnership particularly in the field of athletic training.



KRS faculty and students at the welcome reception hosted by the CEO and President of Sendai University

The field study program started with a warm welcome by the Sendai University CEO Taiji Hozawa and President Yoshikichi Abe, as well as related faculty and staff, including program coordinator Kyoko Shirahata and a number of Sendai University students. The primary purpose of this field trip program was to deepen understanding of Japanese culture for our students through observation and participation in a variety of sports-related activities in various educational and athletic levels. The program features included physical education, facility site visits, athletic training and game observations, nutrition/cooking class participation at Sendai University, including a Japanese language orientation session for our students.

Highlights also include a visit to Onagawa City, an area heavily devastated by a tsunami after the Tohoku earthquake in 2011. During this visit, our students participated in an exercise session for elderly citizens who live in temporary residences as a result of the disaster. The group also visited Shibata High School and Higashi Funaoka Elementary School where our students were invited as guest speakers in their English classes.

KRS Chair, Nathan Murata also visited during the program. He presented a plaque to CEO Hozawa and President Abe to commemorate the growing partnership and as a token of appreciation of their hospitality to the KRS delegation. The College and Sendai University recently signed a Memorandum of Understanding on September 3, 2014, to further our partnership through exchange opportunities in education, research and scholarly material.



KRS and Sendai University students excited to spend a week together

Instructor Yukiya Oba noted: "On behalf of KRS, I sincerely appreciate everything Sendai University provided and facilitated in this field trip. My students truly enjoyed all aspects of the program experience filled with their utmost hospitality. It was also great to see our students cultivate friendships with the Sendai University students throughout the program. We hope this two-way multicultural exchange program continues to grow in our long partnership."

Sendai University will be sending their bi-annual short-term study group of faculty and students to KRS this fall semester in early September 2016. The program will feature athletic training related activities and observations at UH Athletics and McKinley High School.

This field trip was a requirement of KRS 208 Recreational Services in Contemporary Society, a 3-credit course offered in Summer Session I. For more information on this course, please contact Dr. Yukiya Oba at yukiya@hawaii.edu.

【概訳】

＝ハワイ大学教育学部KRS（キネシオロジー＆リハビリテーションサイエンス）学科の学生5名が初来学＝

仙台大学が提携している米国ハワイ州ハワイ大学教育学部KRS（キネシオロジー＆リハビリテーションサイエンス）学科の学生5名と同学科の学科長であるネイテン・ムラタ博士及び大庭有希也准教授が、仙台大学との13年にも渡る長い交流の歴史のなかで初来学し、6月5日～12日にかけて本学で学んだ様子が、同大学教育学部のHPで紹介されました。

仙台大学の朴澤泰治理事長・学事顧問と阿部芳吉学長をはじめ、研修のコーディネーターである白幡助教、関係者、学生達らのあたたかい歓迎により幕を開けた研修は、日本文化への理解とさまざまなスポーツに関するアスレティックレベルの体験学習、プロフェッショナルな競技見学、明成高校調理科の協力による和食づくりなど非常に幅広く、充実した内容でした。

研修のハイライトは、2011年東日本大震災の津波により被災した女川の仮設住宅に住む高齢の方々の慰問で、学生達は柴田高校と東船岡小学校の英語の授業にゲストスピーカーとしても招かれました。

ムラタ博士は、2014年9月3日に両校が交わした「国際学術交流に関する基本合意書」に基づき、今回このようにあたたかいおもてなしを受け、学生達同士が打ち解けあい、学術的な交流を深められたことに心からお礼申し上げますと挨拶し、大庭准教授は、UHの学生が仙台大学の学生達と共に素晴らしい経験を共有し、成長することができました。双方向の友情がこれからますます発展していくことを願っていますと述べました。

次は仙台大学が9月にUHのKRSで、アスレティックトレーニングに関する研修を行う番で、両校のさらなるアカデミックな歴史が刻まれていきます。

HP URL :

<https://coe.hawaii.edu/about/news/2016/08/krs-sends-first-delegation-13-years-to-sendai-university>

カリフォルニア州立大学ロングビーチ校のHPでも 本学での留学プログラムの様子が紹介されています

【概訳】

＝カリフォルニア州立大学ロングビーチ校（CSULB）より11人の学生達が仙台大学で研修＝
～仙台大学へ“お帰りなさい”（Welcome Back）～

仙台大学が提携しているカリフォルニア州立大学ロングビーチ校（CSULB）スポーツマネジメント学科より、11人の学生達と引率のマネージング・ディレクターである古谷仁氏が7月19日～29日にかけて本学で学んだ様子が、同大学スポーツマネジメント学科のHPで紹介されました。

北海道・東北唯一の体育大学である仙台大学で4回目となる研修は、スポーツ文化のみならず、日本語教室に参加してお習字を習うなど、学生達は美しい仙台と東京でさまざまな体験をしました。

プログラムディレクターで、特命副学長であるマーティ・キーナート氏のご尽力により、学生達はベガルタ仙台というプロサッカーチームを訪れ、東北楽天イーグルスというプロ野球試合を宮城KOBOSタジアムで、東京ドームで「オールドタイマーズ・サントリードリームマッチ」を観戦他、日本で最も有名な野球選手である元阪神タイガーズの選手であるランディ・バスと、スポーツバーでの会食を楽しみました。学生達は日本の新しい友人を得、異なる文化におけるスポーツビジネスの違いを学ぶなど、実に充実した研修となりました。

参加した学生の1人であるジャッキー・ヤラスさんは「日本への研修旅行は私の人生でかつて経験したことのないほど素晴らしいものでした。日本は美しい地であるのみならず、仙台の町全体があたたかいおもてなしの心に満ち、たくさんの授業で得た知識もですが、私達とずっと共に過ごしてくれた仙台大学の学生達からこそ、多くを学ぶことができました。日本の真の文化と共にスポーツの新たな側面を知りえる貴重な経験でした」と述べています。

HP URL : <http://web.csulb.edu/colleges/chhs/programs/sports-management/index.html>

OKAERINASAI (Welcome Back) to our students who studied sport in Sendai, Japan!

Our Sport Management program sent off ten students to study abroad at Sendai University, the only physical education and sports & health science university located in northern Japan! These students were not only exposed to the sport culture, but took Japanese language classes, tried our hands at calligraphy, and saw the beautiful countryside of Sendai, and the city of Tokyo.



With the help of program director, Marty Kuehnert, the students witnessed a Vegalta Sendai soccer match at the Yurtec Stadium, a Rakuten Eagles baseball game at the Rakuten Kobo Stadium Miyagi, and the 'Old Timers' Suntory Dream Match at the Tokyo Dome. While learning about Japanese high school baseball, professional baseball, and sumo, the students also enjoyed a sports bar dinner at the Legends Sports Bar with former American baseball player, Randy Bass. Randy is most famous in Japan for his time with the Hanshin Tigers of Central League.



Given the opportunity to meet and learn from the Japanese students, everyone came back with new friends and a different understanding of the business of sport!

"Sendai was amazing and a culturally enriching trip. It has helped me see the world in a new light. Japan introduced me to a completely different culture of sports and competition. Definitely an experience of a lifetime!" - Ashley Hampton LT 30

"Going on the Sendai, Japan trip was the best traveling experience I've ever had. Not only is there a beautiful county, but the city was also so welcoming. We learned so many lessons in class, but also from our new friends from Sendai University who were with us the whole time. We got to experience the real Japanese culture and see first hand another side of sports!" - Jackie Rayas LT 29

漕艇部 全日本新人選手権大会で3種目制覇



優勝した男子エイト（写真は予選の様子）

8月19日～21日の3日間、宮城県登米市にある長沼ボート場において、第57回全日本新人選手権大会が開催されました。この大会は、大学2年生までの選手が出場できる大会で、本学漕艇部からは男子7クルー、女子4クルーが出場しました。

結果は、男子エイト、男子舵手つきフォア、女子ダブルスカルで優勝。（男子舵手つきフォアについては2連覇達成）

男子ダブルスカル、女子シングルスカルで第3位の成績を収めることができました。

上記入賞種目以外にも多くのクルーが決勝に進出することができ、9月22日から始まる全日本大学選手権大会（インカレ）に向けて良い勢い付けができました。

引き続き、よろしくお願いいたします。

（報告：漕艇部 監督 阿部 肇 教授）

石川大暉選手がヴォスクオーレ仙台特別指定選手として承認

このほど、本学体育学科4年の石川大暉（ひろき）選手（宮城県利府高校出身）が、公益財団法人日本サッカー協会のFリーグ（フットサルのトップリーグ）特別指定選手制度に基づき、Fリーグ特別強化指定選手として承認されました。今回の承認により石川選手は、仙台大学Futsal部員としての立場を有しながら、ヴォスクオーレ仙台的選手の一員としてFリーグの試合に出場が可能となります。

7月27日には石川選手とヴォスクオーレ仙台的の坂本理（さとる）代表取締役が阿部芳吉学長を訪問し、特別指定選手承認の報告をおこないました。石川選手は「地元のチームで活躍できることを大変うれしく思っている。日々の努力で、チームの勝利に貢献できるような選手になりたい」と今後の活躍を誓いました。

皆様からの応援をお願いいたします。



プロチームでの活躍を誓う石川選手（中央）

「柴田町町制60周年記念 2016東北こども博」が開催決定



昨年のこども博の様子

東日本大震災による被災で、体を動かす機会が減ってしまった地域のこどもたちが元気になれる場を提供しようという目的で2011年に始まった「東北こども博」は「柴田町町制60周年記念2016東北こども博」（主催：東北こども博実行委員会、後援：文部科学省・宮城県・宮城県教育委員会他）として今年も10月9（日）～10月・祝）の2日間、仙台大学を会場に実施することとなりました。

”遊んで からだを動かし 元気になろう！！” をテーマに、本年度町制60周年を迎えた柴田町、陸上自衛隊船岡駐屯地などの特別協力をいただきながらこどもも大人も全ての方々に笑顔になっていただけるイベントです。仙台大学の学生達による多くのボランティアと一緒に、おもちゃや遊び、スポーツで心地よい汗を流しましょう。

入場は無料ですので、皆さまお誘いあわせの上、是非ご来場ください。

【速報】平成29年4月より「子ども運動教育学科」を開設

このほど、「子ども運動教育学科」（定員40名）の設置が文部科学大臣より認可されました。平成29年4月に開設される運びとなります。

幼児期の子どもは体を動かし、音楽に親しみ、図画工作などを通して好奇心と想像力を養い心身ともに発育・発達していきます。

そのプロセスを、まず、体育学の領域で子どもの運動あそびの支援や助長の方式を学び、また、これを軸にして、併せて心身の発育・発達を促す子どもの保育と教育のありについても学修していくこと…すなわち、体育学に併せ、幼児教育学・保育学をも一体的に学修していくことが、新設の「子ども運動教育学科」での学修課題です。

この学科では、“スポーツが好き！” “子どもが大好き！” という方々に、次のような新しいタイプの「幼稚園教諭」、「保育士」、「幼児体育指導者」の資格取得の道を開くこととしています。

また、少子化が進む中、地方では、少ない子どもをいかに良き人材に育て地方の創生につなげていくかが課題になっています。新学科では、体育・スポーツ健康科学、幼児教育学、保育学の分野での多彩な教員の顔ぶれを揃え、このような課題に取り組めるような学生を育てることに力を入れていくこととしています。

なお、新学科の概要やカリキュラム、入試要項等につきましては、随時、ホームページ等で紹介するほか、仙台駅2階（新幹線中央口エスカレーター前）に設置している広告看板などでも周知して参ります。

【取得できる資格】（予定）

1) 幼稚園教諭第一種免許

幼児期の子どもの運動あそびの支援・助長方式を学び、併せて、幼児教育学・保育学を修得し、幼稚園での幼児教育や保育の指導を行える幼稚園教諭

2) 保育士

保育現場における運動あそびの支援・助長方式を学びつつ、併せて、保育学を修得し、幼児期の子どもの保育に取り組める保育士

3) 幼児体育指導者

地域社会や家庭での幼児期の運動あそびの重要性とその支援・助長のあり方について学び、また、必要な指導法を修得し、これをベースに幼児期の子どもの発育・発達を促す幼児体育指導者



Monthly Report

「子ども運動教育学科」2017年4月開設

～本学6番目の学科として誕生～



このほど、「子ども運動教育学科」（定員40名）の設置が文部科学大臣より認可され、平成29年4月に開設される運びとなりました。

幼児期の子どもは体を動かし、音楽に親しみ、図画工作などを通して好奇心と想像力を養い心身ともに発育・発達していきます。

そのプロセスを、まず、体育学の領域で子どもの運動あそびの支援や助長の方式を学び、また、これを軸にして、併せて心身の発育・発達を促す子どもの保育と教育のあり方についても学修していくこと…すなわち、体育学に併せ、幼児教育学・保育学をも一体的に学修していくことが、新設の「子ども運動教育学科」での学修課題です。

この学科では、“スポーツが好き！”、“子どもが大好き！”という方々に、次のような新しいタイプの「幼稚園教諭」、「保育士」、「幼児体育指導者」の資格取得の道を開くこととしています。

また、少子化が進む中、地方では、少ない子どもをいかに良き人材に育て地方の創生につなげていくかが課題になっています。新学科では、体育・スポーツ健康科学、幼児教育学、保育学の分野での多彩な教員が揃い、このような課題に取り組めるような学生を育てることに力を入れていきます。

なお、入学試験はスポーツAO入試（試験日：11月11日）と推薦入試（試験日：11月11日、12日）を皮切りに実施されることになっています。

取得可能な資格（予定）

- 1) 幼稚園教諭一種免許
- 2) 保育士
- 3) 幼児体育指導者

〈目 次〉

「子ども運動教育学科」 2017年4月開設	1
ハワイ大学アスレティックトレーナーアドバンスコース研修	2
大元英照選手が リオ五輪の活躍を報告	3
米国研修報告	4
漕艇部がインカレで活躍	5
船岡中学校の生徒が職場体験	6
体操競技部が秋の交通安全 街頭キャンペーンに参加	7

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室

直通 0224 - 55 - 1802

E-Mail kouhou@sendai-u.ac.jp

ハワイ大学アスレティックトレーナーアドバンスコース研修 ～8名の学生が参加～



平成28年9月5日～9月13日にかけて、本学と平成26年度に国際交流協定を結んだハワイ大学教育学部運動機能学科(KRS)にて通算23回目のアスレティックトレーナー(AT)アドバンスコース研修が実施されました。例年2月にビギナーコース、9月にアドバンスコースが開催され、ビギナーコースでアメリカのスポーツ文化に触れた後に、アドバンスコースではATの活動や必要な知識について学びます。今回は以前参加した6名と初めての2名で計8名の学生がハワイに渡り、オリエンテーションではヤング教育学部長やKRS学科長のムラタ教授に歓迎と激励を受けました。

日本では主に医・歯学部でしか実施されない「献体解剖」の見学は、アドバンスコースの貴重な経験のひとつです。全米公認アスレティックトレーナーの資格(NATABOC-ATC)を取得して修士課程に学ぶハワイ大学の学生たちの献体解剖に立ち会い、どの献体も、生前に医学を志す学生のためにとの意思を受け、感謝しながら解剖が行われることを知りました。学生たちは献体を前に、僧帽筋はビニール袋並みの薄さでびっくりした、脊柱起立筋は思っていたよりも太い！など、それぞれ模型ではわからない体感を得たようです。また、水分を合成樹脂に置き換えたプラスティネーションという技術でつくられた各部位の標本もあり、同じ部位でも各個体で筋の付き方が違うなど複雑で繊細な人体の構造に関心を深めていました。

約100名の選手を抱えるハワイ大学のアメリカンフットボールチームの朝練習帯同では、練習前のラッシュ時にATルームで繰り広げられるトレーナーたちの素早いテーピングなどに目を輝かせ、マッキンリー高校では本学との遠隔授業で講師を務められ今回の研修でも終始お世話になっている金岡友樹先生からハワイ州でどのようにATが浸透し公立高校でも常駐するようになったかなどのお

話に耳を傾けました。

今研修の受け入れ担当の田村薫里先生には、解剖の他にもゲーム中の事故を想定した、脊椎を固定できるスパインボードの利用やアメフトの防具を速やかに外し安全に救助する実技、脳震盪のサインを見逃さないための観察や質問の仕方についてなど現場に即した授業を開講いただき、ことし6月にハワイ大学の学生を引率して本学に滞在された大庭有希也先生には肩周りの構造や、可動域を広げつつ安定性を保つためのエクササイズについて講義を受け、学生たちは帰ったら早速選手に伝えたいと熱心に取り組んでいました。プログラム終盤のアメフトの試合では、臨場感あふれるゲームに歓声を上げたことはもちろんですが、ハワイの学生たちを脳震盪から守るためのプログラムの周知活動も手伝いました。すべてのプログラムが選手と日々向き合う学生たちにとって実践的知識を身に付ける場となり、アスレティックトレーナーが選手の身体や生命と向き合う立場であることを再認識させられる機会となりました。

ハワイ大学の学生たちや、同時期に滞在していた立命館大学の学生たちとも親交を深め、特に本学に短期留学したジャネットさんには自然豊かなクアロア牧場を案内してもらうなど本当にお世話になりました！そして、7月よりハワイ大学で博士号をめざしている白幡恭子助教の存在は大きな力となりました。あらゆる講義の中で本学とハワイ大学との橋渡しを担い、学生のサポートをするとともに、自ら「学ぶ」喜びを見せた姿は学生たちに強い印象を与えたことと思います。提携前の交流から13年目と続くハワイ大学での研修を終え、学生たちは口々に「日本でもATの役割と必要性について認知されるように頑張りたい」と述べていました。

今後もハワイ大学との良好な学術的交流の促進が望まれます。



大元英照選手がリオ五輪の活躍を報告 ～ボート男子軽量級ダブルスカルで15位

リオデジャネイロオリンピックにボート競技男子軽量級ダブルスカルで出場し、15位の成績を収めた大元英照（おおもと・ひでき）選手（平成19年卒、アイリスオーヤマ所属）が9月6日、阿部芳吉学長を訪れ、オリンピックでの活躍を報告しました。

大元選手は「現地の会場は風や波があり、力を十分に発揮できなかった。今回を集大成と考えてオリンピックに臨んだが、4年後の東京オリンピックに向けて頑張りたい。」と次への意気込みも語ってくれました。

阿部学長も「大変お疲れ様でした。4年後の東京オリンピックはこれまで以上に日本中が注目する大会になるはず。今回以上の成績が出せるよう頑張ってください。」と今後の活躍に期待していました。

なお、大元選手からはオリンピックで実際に使用したユニフォームが本学に寄贈されました。



阿部学長にユニフォームを手渡す大元選手

リオ・パラリンピックボッチャ競技 村上光輝さんが日本初の銀メダル獲得に貢献



阿部学長と握手する村上さん

本学大学院1年の村上光輝（むらかみ・みつてる）さんが、9月7日からリオデジャネイロで開催されたパラリンピック競技大会ボッチャ競技に日本代表チームのヘッドコーチとして出場し、日本ボッチャ史上初となる銀メダル獲得に大きく貢献しました。

9月26日には、リオでの活躍の報告に阿部学長を表敬訪問しました。村上さんは「パラリンピックに向けて積み重ねてきたことが銀メダル獲得につながったと思っています。選手が力を発揮してくれて大変うれしく思っています。」と述べ、今後については「ボッチャの戦略に関する研究や、東北でのボッチャの普及に力を入れたい。」と次への意気込みも語ってくれました。

阿部学長は「様々な苦労があったことと思いますが、銀メダル獲得は大変喜ばしいことです。次の東京オリンピックに向けても頑張ってください。」と村上さんをねぎらっていました。

SD研修会「学校コンプライアンス研修」を開催

9月15日（木）に本学第五体育館大教室において、SD研修会「学校コンプライアンス研修」がおこなわれ、本学と法人本部、明成高校から43名の職員が参加しました。

この研修は、学校の評価の低下を事前に阻止するために情報漏洩対策、各種ハラスメントの防止、ソーシャルメディアへの適切な対応など、学校におけるコンプライアンスが重要度を増している中、教職員が正しい知識を身に付けることを目的に、株式会社エデュースの萩原祐子氏を講師に迎えて行われたものです。

研修の中では、過去、実際に学校で起きたトラブル事例などを基に、予防法や現場で活かせる実践的な対処法などが紹介され、コンプライアンスの重要性を再認識することができました。



船戸高樹先生(元桜美林大学大学院教授)主催 米国研修に参加して



THE EDUCATION TRUSTにて

元桜美林大学大学院大学アドミニストレーション専攻修士課程の船戸教授が企画するアメリカ研修が開催され、本学からは朴澤理事長・学事顧問を始め、総務室笹原、大学院事務室薊の3名が参加した他、全国から船戸ゼミ修了生など13名が研修に参加しました。

今年度の研修はXavier University、AGB（大学理事者協会）、THE EDUCATION TRUST、University of California, Berkeleyを訪問し、最後はラリー・ウォルフ博士（前WASC会長）よりAI（人工知能）の進展が高等教育に与える影響について研修を受けました。

最初の訪問地であるXAVIER UNIVERSITY（オハイオ州シンシナティ）は、学生数7000人の私立大学で、私は5年振りの訪問となりましたが、前回と同様に学内に新しい建物等が出て来ており、常に変貌していることに非常に驚きました。今回も講師を担当していただいたヘイズ博士（5年前に本学にてレクチャーをしていた）によると、大学周辺の土地や民家を買収し大学に敷地を少しずつ広げているとのことでした。

また、全米でも屈指の実力を誇るバスケットボールに関しては、専用のアリーナがあり1万人以上が収容出来るとの説明がありました。

こちらでは、「大学マーケティング戦略の課題と展望」についてレクチャーをマーケティングが専門のトーマス・ヘイズ氏より受けました。

次の訪問地はワシントンD.C.にあるAGB。こちらでは、大学理事会のコンサルタントをしている組織から見たアメリカにおける高等教育機関の現状を学びました。

その翌日に訪問した、THE EDUCATION TRUSTの主な業務は所得が低いようなマイノリティの方々に対して、均等に高等教育機関で勉強をすることができるように、情報を収集し、大学などへ働きかける機関であるとのこと。ここでは、ハーバード大学から

始まる米国の高等教育の歴史についてレクチャーを受けました。

ここで印象に残ったのはCollege Results Online (CRO) www.collegeresults.orgというウェブサイトに関する話で、このCRO最大特徴としては、複数の大学を比較することができるということである。このCROに何らかの検索ワードを入力すると、そのレベルに近い大学の一覧が表示され、さらに興味のある大学名をクリックするとその大学におけるSATの点数や卒業率・学費などの受験生が大学を選ぶ際に必要となる情報が多数表示され、受験生やその保護者はそれを基に進学先に関する情報を集めるといった、非常に機能的であり、多くの方が利用しているとのことでした。

ワシントンD.C.での研修を終えて米国研修の旅は最終目的地のサンフランシスコへ。ラリー・ウォルフ博士（前WASC会長）によるレクチャーでは、高騰する州立大学の学費問題から発生する学生に関する諸問題についてとAI（人工知能）の進展が高等教育に与える影響について興味深い話しをしていただきました。ハーバード大学を始めとする有名校では、この分野における研究が既に進んでおり、世の中を大きく変える技術となるであろうAIは将来的に教員や職員が不要となる事態も考えられるという、考え方によっては恐ろしい内容の話しを聞くことができました。

レクチャー後はUCバークレー校の視察へ行き、大学が保有するとてつもなく巨大なスタジアム等の視察を行いました。

以上、アメリカの現状について、日本では知ることができない貴重な研修となりました。今後は、この経験を大学へフィードバックできるよう日々の業務の中でも意識をしてしなければならないと考えています。

【報告：大学院事務室 薊 正展】



AGBでのレクチャーの様子

漕艇部が全日本大学選手権で活躍

9月22日～25日の4日間、埼玉県戸田市にある戸田ボートコースにおいて、第43回全日本大学選手権大会（インカレ）が開催され、本学からは男子7種目、女子3種目が出場しました。

選手たちはこれまでのトレーニングの成果を発揮し、男子エイト、男子舵手なしペアの2種目での3位入賞をはじめ、9種目で入賞を果たしました。

決勝が行われた9月25日には柴田町ボート協会の方々も会場まで応援に駆け付けていただき、選手へ熱いエールを送ってくださいました。

また、9月27日には3位に入賞した11人が阿部学長にインカレでの活躍を報告しました。



阿部学長にインカレでの活躍を報告



男子エイトの決勝の様子（手前が仙台大）
（写真提供：阿部 肇 教授）

【結果】

男子		女子	
エイト	3位	舵手付クォドルプル	6位
舵手無しペア	3位	舵手無しペア	5位
舵手無しフォア	4位	ダブルスカル	7位
クォドルプル	5位		
ダブルスカル	7位		
シングルスカル	6位		

東北学生ハンドボール秋季リーグ戦で男女とも3位

このほど、東北学生ハンドボール秋季リーグ戦が開催され、ハンドボール部が男女とも3位に入賞しました。女子は3年連続7回目のインカレ出場権を獲得。男子はインカレ出場権の獲得までには至らなかったものの、2005年春季リーグ以来となる3位入賞を果たしました。

インカレは11月19日から徳島県内を会場に開催されることになっており、女子ハンドボール部の活躍が期待されています。



インカレ出場が決定した瞬間（女子ハンドボール部）

【秋季リーグの結果】

【男子ハンドボール部】

仙台大学	32-30	秋田大学
仙台大学	21-28	富士大学
仙台大学	22-35	東北福祉大学
仙台大学	28-23	福島大学
仙台大学	31-17	東北大学

結果 3位（3位以内は2005年春季リーグぶり）
成績 3勝2敗

優秀選手賞 菅野 楓弥（体育学科4年）

【女子ハンドボール部】

仙台大学	13-28	東北福祉大学
仙台大学	13-29	富士大学
仙台大学	21-20	秋田大学

結果 3位（インカレ出場権獲得 3年連続7回目）
成績 1勝2敗

優秀選手賞 大越 幸枝（健康福祉学科2年）

船岡中学校の生徒が学内で職場体験

9月13日～15日の3日間、柴田町立船岡中学校2年生の千葉駿佑（ちば・しゅんすけ）君と尾形璃空（おがた・りく）君が本学で職場体験を行いました。

期間中は図書館内での書架整理や学生生活室での窓口業務、広報室でのプレスリリースを行う作業や取材体験のほか、マンスリーレポートの原稿作成の体験もしてもらいました。

本学では毎年、柴田町内にある3つの中学校（船岡中学校、船迫中学校、槻木中学校）から職場体験のための生徒を受け入れていただいています。



学生生活室で窓口業務を体験する千葉君と尾形君

僕は、今回の広報の仕事の体験でいろいろなことを学びました。

まず、図書館にある新聞を全て読み仙台大学や、パラリンピックのボッチャについての記事を探し付箋を付けその部分をコピーし切り取り紙に貼り付け校内にいればいつでもアクセス出来るサイトに張り付ける作業のお手伝いをさせていただきました。その過程でボッチャの監督が、仙台大学にいる人だと聞いたりしましたが、一番に感じた事は、この仕事をしている人は仙台大学を誇りに思っている作業しているんだなとおもいました。

次に、大学に関する質問をする時間には、「仙台大学には5つの体育館がありますが、それぞれ役割のようなものはちがうんですか？」と質問して第一、第二体育館は小中学校と同じような役割で、第三体育館は、トレーニングセンター、柔道場、剣道場、体操ができる場所、テレビ局と同じスタジオがあり、スポーツ学科の教室があったり、第四体育館の1階にはアスレチックトレーニングルームがあり2階には新体操アリーナがあり第五体育館には、入学式、卒業式、こども博でのライブもできる広いフロアがある」と教えていただきました。

それから、LC棟についても、教職員のこどもを預かる保育施設があったり今年行われたリオオリンピックでも使用したというパブリックビューイングをすることが出来る場所もあるということも知りました。

最後に、第四体育館にある、アスレチックトレーニングルームにも見学をさせていただき、トレーニングに使用する器具やどのような事をしているのかということの説明をいただきました。

今回の体験は、仙台大学のことはもちろんですが、広報の人達がどのような仕事をしているのかがわかりました。そして、このような場を作っていただいた人達に感謝したいと思いました。

【千葉 駿佑】

僕は、仙台大学の職場体験をして、知った事が3つあります。

一つ目は、仙台大学には体育館が5個あることです。それぞれの体育館には使い道があることがわかりました。第一、第二体育館ではバスケットなどをしていました。第三体育館では、トレーニングセンター、体操場、スタジオ、剣道ができる場所、第四体育館では、アスレチック、リハビリ施設、アリーナ、新体操などがやっている事がわかりました。第五体育館では、入学式、ライブなどがやっているそうです。それとLC棟があり、そこでは保育施設、パブリックビューイングが行われていました。

二つ目は、僕が職員になるには、資格が必要ですか？と質問をすると「部署によって、資格が必要な場合の部署もある、例えば、図書館での勤務には図書館司書の資格が必要になります」と言っていました。営繕管理室では、危険物取り扱いの資格や大型車が使える資格を持っていました。

三つ目は、図書館の事です。図書館では本が12万冊あるそうです。中にはハンドルを回すと本棚が動いて奥にある本を取り出せるものがありました。

僕は図書室に管理人に聞いてみました。「どうして、小説などが少ないんですか？」返事が「小説とかは小学生から高校生で本に関心を抱こう。という意味で置かれていて、大学生とかは勉強に専念しないとダメだから」ということばが返ってきました

部署によって、資格が必要な場所があって図書室の本は小説がないことがわかりました。

【尾形 璃空】

体操競技部が秋の交通安全街頭キャンペーンに参加

9月27日(火)午前7時から約1時間、秋の交通安全県民層ぐり運動の一環として、船岡駅周辺で交通安全を呼びかける街頭キャンペーンが行われ、本学からも体操競技部に所属する学生5名と、学生生活室職員2名が参加しました。

冒頭、滝口茂柴田町長から「まずは管内の死亡事故500日間ゼロを目指し交通安全運動を頑張っていきましょう」と挨拶があり、その後、船岡駅周辺でポケットティッシュと交通安全を呼びかけるチラシを配布しながら交通安全を呼びかけました。

参加した運動栄養学科4年の中野まゆかさんは「ふだんから自転車をよく利用しているので、歩行者のことを考えた運転や、夜間のライト点灯など自分ができることから交通安全に取り組んでいきたい。」と交通安全の大切さを再認識した様子でした。

この活動は、春と秋の年2回行われており、本学からも毎回参加させていただいています。

【報告：学生生活室】



交通安全を呼びかける体操競技部員

柴田町制施行60周年記念「2016東北こども博」～遊んで、からだを動かし、元気になろう！！

今年で6回目の開催となる「東北こども博」が10月9日(日)と10日(月・祝)の2日間、本学を会場に開催されることとなっています。

9日(日)には、ソチオリンピックボブスレー競技に日本代表として出場した黒岩俊喜さん(平成28年卒、大学院1年)とユースオリンピックスケルトン日本代表の郷内翔さん(岩沼市立岩沼中学校3年)によるトークショーやウルトラマンオーブショー、東北楽天ゴールデンエンジェルスによる「イーグルぐるぐる体操」などのイベントが予定されています。

10日(月・祝)には、リオ五輪柔道女子70kg級で金メダルを獲得した田知本遥選手(ALSOK)と南條充寿教授、南條和恵柔道部女子監督によるトークショーやシルバニアファミリーショーなどが予定されており、2日間を通じて楽しめる内容となっています。

また、こども博と同日程で、「仙台大学大学祭」と「スポーツフェスティバル in 柴田」も開催されることになっており、学内は多くの人で賑わうことでしょう。



Monthly Report

柴田町制施行60周年記念「2016東北こども博」を開催

～過去最大の19100人が来場～



リオ五輪柔道女子70kg級金メダリスト田知本遥選手（右）

10月9日（日）・10日（月・祝）の2日間、柴田町制施行60周年記念「2016東北こども博」（主催：東北こども博実行委員会、後援：文部科学省／宮城県など）が本学を会場として開催され、過去最高の約19,100人（昨年は17,700人）の方々がご来場下さいました。

「東北こども博」は、2011年3月11日に発生した東日本大震災の復興支援の一環として「被災地の子どもたちに元気を」を合言葉に始まり、今回で6回目の開催となりました。今年も、子どもたちに、遊んで、からだを動かし、元気になってもらおうと全国の玩具メーカーや地元企業が協賛くださいました。ウルトラマンオーブやシルバニアファミリーなどの人気キャラクターによるステージショー、サッカーや野球などの競技に挑戦できる「ちびっこスポーツ広場」、グルメ屋台などが並ぶ「お祭り広場」や「復興市場」（女川のホタテ焼き・亘理のいち氷などが出店）など多彩な催しが行なわれ、各会場では大人も子どもも夢中になって楽しんでいました。

また、会場内には本学にある5つの学科の特色を生かした体験イベント等も行われ、そのうち、運動栄養学科のブースでパン作りを体験した小学生は「おいしそうなパンを楽しく作ることができました。おうちに帰ってからもう一度作りたと思います。」と話してくれました。

その他にも、9日にはソチ五輪ボブスレー日本代表の黒岩俊喜選手（大学院1年）とユース五輪スケルトン日本代表の郷内翔選手（岩沼中学校3年）によるトークショーが、10日にはリオ五輪柔道女子70kg級金メダリストの田知本遥選手（ALSOK）と南條充寿教授、柔道部女子監督の南條和恵さんによるトークショーも行われ、多くの来場者がそれぞれのお話に耳を傾けていました。

皆様のご来場、誠にありがとうございました。



過去最高の19,100人が来場

〈目 次〉

「2016東北こども博」過去最高の19100人が来場	1
内閣府主催「地域コアリーダープログラム（英国研修）」参加報告	2
健康づくりサポーター認定証授与式 ほか	3
山下泰裕全日本柔道連盟副会長 本学を表敬訪問 ほか	4
南條充寿教授によるリオ五輪柔道競技報告会	5
学生の活躍	6
2016年4月「子ども運動教育学科」が誕生	7

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室

直通 0224 - 55 - 1802

E-Mail kouhou@sendai-u.ac.jp

内閣府主催「地域コアリーダープログラム(英国研修)」参加報告



高齢者が集う作業所で現地の高齢者と

内閣府では、国際交流事業の一環として、地域課題対応人材育成事業「地域コアリーダープログラム」を実施しています。この事業は、日本の各地で高齢者関連、障害者関連及び青少年関連の課題解決に向けた取組に携わる日本青年を先進事例のある外国への派遣、外国において同様の課題解決に取り組む青年の招へいを行い、地域において国際的視野をもち、地域の活性化に貢献できる人材を育成することを目的としています。私は今回、高齢者分野の英国派遣団として派遣されました。

6月末に行われた事前研修から派遣までの3か月半、他のメンバーと地域での高齢者を取り巻く課題について意見を交わしてきました。メンバーは日々、全国各地、様々な専門分野で活動していますが、抱えている課題には共通するものが多く挙がりました。日本の制度だけではなく、英国のチャリティ文化や国に存在感を示すボランティアセクター等の取組についても事前に学習しながらテーマを設定し、研修に臨みました。

出発前2日間の研修を経て、10月9日(日)～18日(火)の10日間の日程で、英国(ロンドン、ブライトン)での研修に参加しました。現地では、在英日本大使館、英国内閣府(市民社会庁、保健省、労働年金省)、ボランティアセクターをまとめる中間支援団体での講義や、現場のケアホームの視察などを通して、英国の高齢者を取り巻く福祉制度や現状を学ぶことができました。日本は政府が制度をしっかりと固めてから国民に浸透させていき、現場はそのシステムの中でサービスを提供していくのが一般的です。英国政府は必要最低限の制度を策定し、現場が運用していく中で、必要だと感じたことを予算内で自由にサービスを提供しています。場合によっては、政府に意見を上げ、政策の提言をするほど、政府と民間団体が対等な立場で現場の声を届ける仕組みが確立されていました。

今回の研修を通して、日本の民生委員制度や自治会などの既存のものを掘り起こし、発展させていくことが重要であると再認識しました。帰国後に東京で行われた報告会では、その点を重視して発表しました。当日は、阿部学長にも足を運んでいただき、研修で得たことについて記憶が新鮮なうちにご報告することができました。

英国でもゆるやかに高齢化が進行しており、高齢者の孤立や認知症患者の増加等、日本と同じ問題も抱えています。また、高齢者がいつまでも健康に過ごせるよう、介護予防の取組も重要視されました。世界的にも“高齢者の健康づくり”は重要な視点であり、これまで本学が取組んできた地域を巻き込んだ高齢者の健康づくりは非常に重要です。今後も地域に根差しながら更に発展させ、世界にも発信できるよう活動していこうと決意した研修となりました。



英国派遣団 ※前段中央は内閣府国際交流室長

【報告：新助手 齋藤まり】

平成28年度9月期卒業式・学位記授与式を挙



10月4日(火) A棟大会議室を会場に、平成28年度9月期卒業証書・学位記授与式が挙行され、3名の卒業生が本学での所定の課程を修め、新たに本学から旅立ちました。

式の中で阿部芳吉学長は「これまでの大学生活の中で得た経験は必ず役立つときが来る。社会人としても立派に成長してほしい。」と3名の卒業生に励ましの言葉を送りました。

なお、式にはクラス担任や事務職員も参加し、3名の旅立ちを祝福しました。

健康づくり運動サポーター 認定証書授与式を開催



認定証授与式後の記念撮影

10月25日（火）に健康づくり運動サポーター（以下、健サポ）の認定証書授与式を開催しました。今回は平成28年度前期の資格認定評価会で認定された初級6名に対して、認定証書が授与されました。健サポは本学独自の認定資格であり、これまで延べ474名が本資格を取得しています。

今回、初級を取得した笠原茉友子さん（健康福祉学科4年）は「4年生での資格取得となったため、卒業まで時間は残りわずかですが、今後も地域の教室に積極的に参加していきたいです。」とコメントしました。取得者の中には、後期から中級養成講座を受講している学生もあり、取得後もスキルアップを目指して取り組んでいます。

資格取得には現場実習3回以上の参加が必要であり、地域の健康教室が実習の場となります。地域の方々と交流の中で、学生たちは自らコミュニケーション力や指導力、ホスピタリティを身につけていきます。地域の皆さんにとっては健康に関する知識を得ることができ、学生たちにとっては自らのスキルアップにつながる、お互いにWin-Winの関係が構築されていることもこの健サポ事業の特徴です。

今後も多くの健サポ資格者を輩出し、学生たちが実践力を身に付けて社会で即戦力として活躍できるよう尽力していきたいです。

【報告：新助手 齋藤まり】

第3回運動栄養サポーター 認定証書授与式を開催

10月25日（火）、本学管理研究棟2階大会議室において、第3回目となる本学運動栄養学科生の「運動栄養サポーター認定証書授与式」が行われました。

今回は運動栄養サポーターとして、基礎取得者10名、初級取得者1名、中級取得者1名の計12名が認定されました。

授与式には運動栄養学科2年の佐々木康介さん、1年の菊地麻海さんが出席し、阿部学長より認定証が手渡されました。

阿部学長からは、「さらなる上の階級の取得を目指すとともに、身体への栄養だけではなく、心にも栄養も与えられるよう、選手に寄り添った支援を行ってください。」と学生に激励の言葉を述べられました。

授与式終了後、佐々木さんは「今回の運動栄養サポーター基礎の取得を自信に変え、次の階級取得に向けて、知識や実践的な経験を身に付けていきたいです。栄養サポート活動の質を高めるためにも、上のレベルを目指しながら、日々学習していきたいです。」と固い決意を表明してくれました。

【報告：新助手 菊地 遥】



認定証授与式後の記念撮影

留学生Welcome Partyを開催



台東大学からの留学生と陳先生（左）

10月12日（水）、本学との国際交流協定校である台湾の台東大学からの留学生を迎える「Welcome Party」が国際交流同好会の企画のもと行われました。昼休みの短い時間でしたが学生同士が積極的に交流し、有意義なパーティーになりました。

パーティーの中では留学生の皆さんに自己紹介をしていただきましたが、流ちょうな日本語で自分のことを語る姿には驚かされました。その後の会食でも言葉の壁を感じさせないほどに日本人学生との会話を弾ませていました。

今後の日本での生活が彼らにとって貴重な経験となり、今回のパーティーをきっかけに学内で多くの交流ができることを願います。

【報告：国際交流同好会 体育学科2年 安田真一】

山下泰裕全日本柔道連盟副会長が表敬訪問



本学を表敬訪問された山下全柔連副会長

10月11日（火）、全日本柔道連盟副会長・強化委員長であり東海大学副学長の山下泰裕氏が仙台大学を表敬訪問されました。

山下副会長は学長室にいらっしゃると、2013年3月から2016年9月末まで全日本柔道女子監督を務めた、仙台大学南條充寿教授の功績に対し「全日本柔道の監督という重責を引き受け、全うするためには、所属先の理解と支援が欠かせません。南條先生より、仙台大学が監督就任に対して即決で快諾し全面的な支援をしてくださったと聞き、心よりお礼申し上げます。リオ五輪では南條先生から、何があっても己を信じ、選手を信じるという強い気迫を感じ、あのような好成績を残すことができました。

2020東京オリンピックに向けておかげさまで若い選

手が育ってきています。」と感謝の言葉が述べられました。

南條教授は「2013年3月16日、故斎藤先生の電話で全日本柔道女子監督就任の打診があった翌日に、当時、理事長兼学長だった朴澤理事長・学事顧問にご相談申し上げたところ、その場で思い切ってやって来いと言っていただき、本当にありがたかったです。監督という責務がいかに大変なものか、なってみてはじめて痛感しました。得難い貴重な経験です」とこの3年間を振り返りました。

朴澤理事長・学事顧問が「1964年東京オリンピックで柔道が正式競技となったことを考えると、2020東京開催は原点に回帰し次の新たなスタートとなるものでもあり、柔道競技がオリンピックで日本のスポーツの象徴的な位置づけとなるような今後の4年間であって欲しいと考えており、これからも南條先生の持っている力をそのために活用ください」と話されると、山下副会長は「南條先生の経験は、今後も日本の柔道界のために活用させて頂きたいと考えており、同時に、仙台大学での学生指導や先生ご自身の学究のためにも、活かしていただきたいです」と応えていらっしゃいました。

阿部芳吉学長が「この船岡の地で、全日本の合宿などを行っていただけませんか？」と伝え、山下副会長は「今朝、散歩した船岡城址公園あたりもとても良い場所ですね」と笑顔でおっしゃるなど、終始和やかなご訪問となりました。

平成28年度前期海外留学研修報告会

10月18日（火）国際交流センター主催の海外留学研修報告会がラーニングコモンズ（LC）棟で行われました。

今年度より新たに加わった「韓国伝統武道・警護・文化研修プログラム」をはじめとする海外武道実習2つを含む、計5つの留学プログラムに30名の学生が参加しました。

学生は、海外から日本を見ることで日本の良さを改めて実感したり、日本にはないその国特有の習慣・文化に触れたりすることで、今まで当たり前だと思っていたことが海外では通用しないのだということを知ったようでした。

海外留学研修に参加した学生からは、「様々な価値観に触れ、視野が広がった」という声が多く聞かれました。まさに「百聞は一見に如かず」であるということを改めて実感しました。

会場には30名を超える教職員のほか、今後留学を考えている学生の姿も見られ、報告者へ質問をするなど活発な報告会となりました。



フィンランドでの留学の様子を報告する学生

【報告：事業戦略室 鈴木美生】

南條充寿教授によるリオ五輪柔道競技報告会を開催



南條教授に報告に耳を傾ける参加者

10月22日（土）、学生食堂「なちゅら」を会場に、南條充寿教授によるリオデジャネイロオリンピック柔道競技報告会が開催されました。

報告会には朴澤理事長・学事顧問、阿部芳吉学長など本学関係者の他、滝口茂柴田町長、村上英人蔵王町長をはじめ、柴田郡柔道協会、仙台大学柔道塾関係者など約85名が参加し、南條教授の報告に耳を傾けました。

南條教授は報告の中で、2013年の全日本柔道女子監督に就任した当時の状況やその後の強化方針、リオ五輪での選手村の様子、女子70kg級で田知本遥選手（ALSOK所属）のセコンドに入りサポートした時の様子などを、時折裏話なども交えながら、約1

時間15分間お話し下さいました。

報告会の後には懇親会も開催され、参加者は南條教授のこれまでのご苦勞をねぎらわれていました。

なお、12月18日（日）には柴田町柔道協会主催による仙台大学柔道塾に通う子どもたち等を対象とした報告会も本学を会場に予定されています。

Study in Japan Fair 2016日本留学フェア 報告

平成28年10月15日（土）～16日（日）の2日間、日本留学を志すベトナムの学生が、適切な進学先を選択し、且つ実りある留学を達成できるようにするため、我が国の留学制度及び高等教育に関する情報を提供し、我が国への留学の促進を図ることを目的とした、独立行政法人日本学生支援機構主催の日本留学フェアがベトナムで開催されました。本学からは、朴澤理事長・学事顧問、関矢教授、事業戦略室西塚室長、鈴木美生職員、大学院事務室薮正展担当課長、運動栄養学科山田新助手、菊地新助手の7名が参加しました。

1日目、ハノイ市Lotte Hotel Hanoi会場において来場者数はおおよそ1,509名、2日目のホーチミン市REX Hotel 会場では来場者数1,452名と多くの方が来場されました。また、国公立大学、私立大学、短期大学、専門学校、日本語学校、その他教育機関等の参加機関が各ブースを出展しました。出展内容としては大学案内、募集要項、シラバス等の資料展示及び配付、大学紹介ムービーの上映、教育内容、入学試験、奨学金、特色等に関する個別相談の実施をしました。仙台大学のブースには、高校生、大学生等留学希望者、高校の進路指導担当教員、大学等の国際交流担当者方が訪れ、両日で約60名と例年以上に大盛況となりました。

さらに、今回は平成25年3月に仙台大学と国際交流協定結した、ハノイ大学とホーチミン市体育大学の学生に対して、大学紹介のプレゼンテーションを実施しました。

ベトナムの首都ハノイ市にあるハノイ大学は、外国語大学として発展してきた国立大学であり、日本語学部生約20名を対象に菊地新助手が発表を行いました。大学の基本理念であるSports for allのもと、アスリートとしてだけでなく、スポーツを楽しむや健康、観る・支えるといった観点で多様な視点からスポーツを探求できる各学科の特色を紹介しました。将来通訳を志望する学生など、スポーツと情報に関心を寄せる学生が多く見受けられました。

また、ベトナム最大の都市ホーチミン市にあるホーチミン市体育大学は、本学と同様に体育科学を専門とする大学であり、聴講者3名に対して山田新助手が発表をしました。2020年に行われる東京オリンピックに向けたベトナムスポーツ界の展望と、仙台大学で学ぶことができるコーチングスキルやスポーツ栄養、マネジメントスキルなどの普及を呼び掛けました。

国境を越えて大学を紹介するにあたり、スポーツをすべての人に、という基本理念を改めて実感することができました。今後は仙台大学全体の取り組みや自分たちの専門分野を活かし、スポーツ界の発展のためにできることを考えながら尽力してまいりたいと思います。

【報告：新助手 菊地 遥】



会場内に設置された本学のブース



FISU世界大学フロアボール選手権大会2016

～ 本学フロアボール部から 日本代表として2名の学生が出場 ～



阿部学長に世界選手権での活躍を報告する中川さん（右）と郡司さん（左）

2016年7月19日～24日の6日間にわたり、ポルトガル・ポルト市で開催の「FISU世界大学フロアボール選手権大会2016」に本学フロアボール部のFW中川卓己選手（現代武道学科3年／フロアボール部キャプテン）と、FW郡司達哉選手（体育学科3年）の2名が日本代表選手団に派遣され出場しました。世界大学フロアボール選手権大会は2年に1度開催されており、参加国は日本、韓国、フィンランド、スウェーデン、スイス等16か国、各国の大学生の代表チームによる熱戦が繰り広げられました。結果は男女ともにフィンランドが1位、スウェーデンが2位と北欧のチームが上位を独占し、2名が出場した日本（男子）チームは8位の結果となりました。出場した中川さん、郡司さんの2名はそれぞれの試合のなかで最も活躍した選手に与えられる

称号「ベスト選手賞」に選出され、帰国後には阿部学長へ出場報告を行いました。

阿部学長からは「フロアボール日本代表としての経験を後輩に伝え、未開発な部分などは研究し今後のチームの発展に貢献できるよう益々の活躍を期待します」と労いの言葉がかけられました。

フロアボール2016全日本学生選手権代表

FW中川 卓己さん（現代武道学科3年）

「海外での試合はとても良い経験になりました。全日本チームはカウンターメインの戦略で試合を運びましたが、海外の強豪チームは戦術を練りフォーメーションで相手を崩す盤石なゲーム展開で点数を重ね、層の厚い攻撃に日本とのレベルの差を痛感しました。帰国後は郡司君と二人で戦術を考えるゲーム展開をしようとチームに持ち帰り実践しているところです。今後はキャプテンとしても、仙台大学のチームの武器を活かし相手のペースに流されない戦術をもった戦い方をしていきます。」

FW 郡司 達哉さん（体育学科3年）

「社会人・学生のトップに属する関東のA代表とチームメイトと共に戦ったことも良い経験でした。ミーティングから得られる気づきも多く、海外からの学びを得て着実に以前とは一味違った試合ができるよう今後につなげていきたいです。」と話してくれました。

フロアボールとは

スティックを使って穴の開いたプラスチックのボールを相手チームのゴールに入れ得点を競う6人制団体競技。コートは40m×20m、周囲を高さ50cmの板で囲む。1ピリオド20分で第3ピリオドまで競う。アイスホッケーのように選手交代は自由で1チーム最大20名で構成される。フィンランド発祥のフロアボールは用具も比較的安価に揃えられることや体育館でできるニュースポーツとして幅広い年齢でも楽しめる。

硬式野球部が仙台六大学野球秋季リーグ戦で優勝

このほど行われました仙台六大学野球平成28年度秋季リーグ戦において硬式野球部が3季ぶり5度目の優勝を果たしました。

今回のリーグ戦では、松本桃太郎内野手（体育学科4年 - 北海高校出身）がリーグ通算最多安打記録を25年ぶりに更新し、120本安打を達成。また、リーグ最多本塁打記録も更新し、他にも最優秀選手賞、最高打率賞、最多本塁打賞をも賞し計5個のタイトルを獲得しました。

なお、最優秀選手賞には稲毛田渉投手（体育学科1年 - 帝京高校出身）が、ベストナインには松本桃太郎内野手、岩佐政也投手（体育学科3年 - 柴田高校出身）、望月隆晟内野手（体育学科2年 - 東海大学浦安高校出身）、白川拓海外野手（体育学科3年 - 霞ヶ浦高校出身）が選出されました。

硬式野球部は初の明治神宮大会出場をかけた東北地区代表選に出場しましたが、富士大学に惜しくも敗れ、明治神宮大会初出場はかないませんでした。なお、東北地区代表選では稲毛田渉投手が敢闘賞を受賞しました。



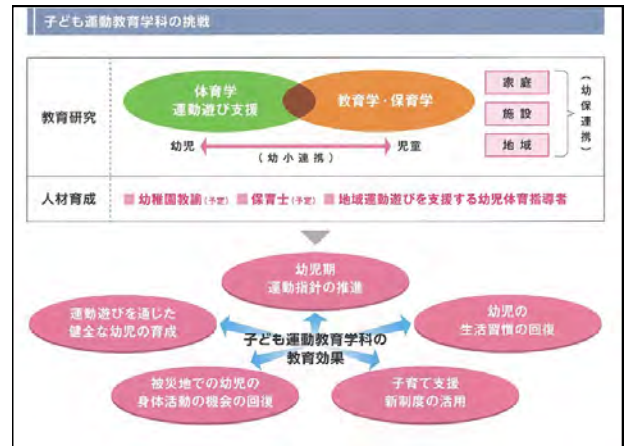
2017年4月「子ども運動教育学科」が誕生

2017年4月に本学体育学部にて6番目の学科として「子ども運動教育学科」が誕生します。

新設される子ども運動教育学科は「幼児体育」「幼児教育」「保育」の3つを大きなコンセプトに据え、単に幼稚園教諭や保育士などを養成するだけではなく、体育科学を専門とする大学として、幼児期における子供の発達や発育を支えるための運動を指導できる、新たな人材育成を目指します。2011年3月11日に発生した東日本大震災以降、被災地の子どもたちの体力低下が指摘されています。また、小学校に入学したばかりの1年生が、集団行動がとれない、授業中に座ってられない、先生の話を受けない等、学校生活になじめない状態が続く、いわゆる「小1プロブレム」についても近年問題となっています。子どもの成長には、幼稚園期とか、小学校期とか、という不連続な時間はありません。日々、連続して発育・発達していくのです。

本学では、この視点から、これら諸問題を解決するためには、就学前から子供たちが運動に親しむ習慣を身に付けることが重要と考え、就学前の遊びの運動から小学校入学後の体育スポーツに自然に移行できるような運動指導ができる人材や、幼小連携などの諸課題にも取り組めるような人材の育成に力を入れていきます。

子ども運動教育学科の定員は40名で、11月より各選考区分での入学試験が行われます。入学試験などに関する問い合わせは入試創職室（0224-55-1017）までご連絡ください。



大学院前期入学試験願書の受付開始

10月31日（月）より大学院前期入試の願書受付が開始となりました。

大学院活性化の為に、学部からの入学生を多数期待しております。ぜひ、先生方からも研究室や部活において学部生に周知していただきたいと思います。

前期入試における願書受付期間は以下のとおりとなっております。

- ・願書受付期間 10月31日（月）～11月11日（金）
- ・お問合せ先 大学院事務室 0224-55-5706



仙台駅2階看板がリニューアルされました

10月11日より仙台駅2階にある本学のPR看板がリニューアルされました。

今回の広告看板は、「子ども運動教育学科新設」「2017年創立50周年」「国際交流」の3つをテーマに作成しました。

なお、今回の掲出から従来の特殊フィルムによる掲出からデジタルサイネージによる掲出へと変わり、今まで以上に鮮明でより目立つ広告へと生まれ変わりました。

なお、掲出方法の変更に伴い、フィルム作成の手間が省けた分、広告掲出費用が従来より安価に抑えられています。

掲出期間は10月11日～来年3月31日までの半年間です。仙台駅をご利用の際には是非ご覧ください。



リニューアルされた3種類の広告看板

Monthly Report

第12回スポーツシンポジウム

「リオから東京へ～オリンピックの現在・過去・未来～」を開催



パネルディスカッションの様子

11月28日（月）仙台国際センターにおいて、第12回スポーツシンポジウム（主催：仙台市・仙台大学・河北新報社、協力：スポーツコミッションせんだい）が開催されました。

リオデジャネイロオリンピックで世界中が沸いた今年のテーマは「リオから東京へ～オリンピックの現在・過去・未来～」とタイムリーな話題。リオ五輪400メートルリレー銀メダリストである飯塚翔太氏（所属：ミズノ）をはじめ、現在最も注目される陸上関連パネラーの生の声を聴くことができる絶好の機会と幅広い年齢層の方々がつめかけ、開演の午後6時には、仙台大学朴澤泰治理事長・学事顧問、阿部芳吉学長、学会の先生方及び陸上競技部の学生たち、明成高校教職員など本学関係者150名を含む約400名が会場となった「萩」ルームを埋め尽くし、熱心に聴き入りました。

シンポジウムに先だち阿部芳吉学長が「今年は特に女子柔道監督として仙台大学の南條充寿教授がリオ五輪で金メダルを含む5つのメダルを獲得したことから、オリンピックを大変身近に感じた年でした。仙台大学は宮城県と連携してジュニアトップアスリート育成も行っており、2018年の冬季オリンピックには本学で練習している中学生が2人、出場できるのではないかと期待されています。本日のシンポジウムを通し、会場みなさんが新しい考えや知識を得て、2020東京オリンピック・パラリンピックに向かって下されば大変嬉しいです」と挨拶されました。

(次ページに続く)

〈目 次〉

第12回スポーツシンポジウム	1-2
韓国体育大学校金総長が来学	3
第2回秋のブラざり大会	4
鈴木省三統括副学長が キワニスクラブで講演	5
ゴンザガ大学視察報告	6
運動栄養学科 「給食運営実習Ⅰ」	7
第1回柴田町フットバスウォーク	8
「子ども運動教育学科」 高校訪問記	9
ヨガ講習会	10
第9回青少年防災訓練ワーク ショップ円卓会議報告	11
学生の活躍	12

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室
直通 0224 - 55 - 1802
Email kouhou@sendai-u.ac.jp

シンポジウムは基調講演とパネルディスカッションの二部構成で行われ、最初に元NHKエグゼクティブアナウンサー・解説委員で現在法政大学教授の山本浩氏が「オリンピック勝者の論理」と題し、オリンピックで勝つための戦略に関し、日本が成果をあげ、選手の育成に成功している例として卓球競技を紹介しました。最も大切なものの一つは、日本国内だけで満足せず、世界を目指す強い志だそうです。エリートアカデミーで選ばれた優れたジュニア育成には、競技面のみならず、選手たちが海外リーグに参戦する際、家庭教師も海外に同行し、学力面で遅れがないようマンツーマンで指導する、また、揺れ動く青少年期の支えとして、心理学者が常に心のサポートも行うとのことでした。

競技結果を左右するには①個々の力②コンディショニング③周囲のサポート④ライバルの情報⑤適材適所⑥試合の戦術⑦臨機応変な戦略～などがあるなか、一番大事なのは「コンディショニング」だそうで、科学と医学の力も加えた総合力でいかに自分をオリンピックの時に最高の状態に高めていくことができるか？が大切と強調されました。

第二部のパネルディスカッションは山本氏が司会進行をつとめ、前出の飯塚翔太氏、同オリンピックで棒高跳び7位に入賞した澤野大地氏（所属：富士通）、明成高校出身の双子兄弟ランナー、村山謙太氏（所属：旭化成）と村山紘太氏（所属：旭化成）、現役時代に日本選手権400mで三連覇した名取英二氏（所属：仙台大学准教授・陸上競技部長）が、それぞれの立場でオリンピックを振り返り、2020東京オリンピック・パラリンピック、ひいてはその先にある未来を見据え、時にユーモアを交えながら活発な意見交換がなされました。

日本人として64年ぶりの棒高跳び入賞を果たした澤野氏は「オリンピックでは普段通りの自分の力を出すことだけに集中しました。高跳びを始めて25年、36歳という年齢を考え、体に負荷をかけるのではなく効率的な練習をすることで棒を体に引き寄せる技術が今も上達しています」と話しました。

飯塚氏は「ライバルでもあるリレーチームメンバーで確実にメダルをとる練習を積み重ねてきたので、銀メダルを獲得するために支えてくれた全ての方々に感謝しています」と述べました。双子の兄弟である弟の村山紘太氏は「いつも兄の背中を追い、ここまですることができました。母校の理事長先生、校長先生がいらっしゃる前で申し訳ないのですが、オリンピックの5000m、1万mで入賞するにはもっともっと速く走らなくてはならず、現実的にもう少し順位を上げることが目標にこれからも取り組んでいきたいです」と話し、会場から温かい拍手がおくられました。それに対し兄の村山謙太氏は「オリンピックをテレビで見ながら正直、何故自分がリオにいないのだろうと思いました。自分にとってお互い切磋琢磨できる弟の存在は大きく、肉離れや疲労骨折などの怪我に負けず東京オリンピックには兄弟一緒の出場を狙います」と決意を新たにしていました。

35年学生達を指導してきた名取氏は「指導者が学生の資質を見抜く目は大切です。オリンピックは多くの子どもたちに夢を伝え、人に喜んでもらうことがやがて自分の力になるので、これからもオリンピック選手を育てるという目標に向かって進んでいきます」と締めました。

シンポジウム終了後、村山兄弟は「出身校の先生方や後輩達を目の前にしてとても緊張しましたが、自分を見つめなおす良い機会になりました。ありがとうございました」と感想を述べました。また名取氏は「今日はたくさんの方々においでいただき楽しかったです。仙台大学の学生達にとっても良い学びの場になったことでしょう」と笑顔で語りました。

会場にいらした太白区の男性は「男の子の孫が中学校で陸上競技（短距離）を始め夢中になっているので、今日のシンポジウムが待ち遠しく、できれば孫と一緒に先生方のもとてもためになるお話を聴きたかったです。挫折してもくじけない心、周りの人に感謝して仲間と共に世界を目指す豊かな歩みを是非、今のうちから我が家の孫だけではなく、被災地の子どもたちに身に着けて欲しいと思います」とおっしゃっていました。明成高校と仙台大学が高大連携して取り組んでいるスポーツを通した青少年育成の教育プログラムに関し、多くの方々にご理解いただけるシンポジウムとなりました。なお、この件に関する詳細な記事は平成28年12月14日の河北新報朝刊に掲載される予定です。



名取英二准教授（右）と村山謙太選手（明成高校出身）

韓国体育大学校 金総長らが来学～被災地も訪問～

11月11日（金）～12日（土）の2日間、本学と国際交流協定を締結している韓国体育大学校より金総長ら3名の方々が来学されました。

12日（土）には石巻市立大川小学校を視察しました。北上川河口から約4kmの川沿いに位置する大川小学校が近づきますと、震災の記憶として残している建物が見えて来ます。平成23年3月11日の東日本大震災で全校児童108人の7割に当たる74人が死亡、行方不明となりました。その被害状況がまざまざと蘇えるような、姿が現れ、言葉に表せない思いがしました。金総長もかなり強烈な印象だったように見え、手を合わせてお祈りされる姿が印象的でした。また、当時の写真には小学校周辺に存在した住宅が被害に遭い、全て無くなり、今は別なところに住むこととなりました住民の方々には、今も不自由な暮らしを強いられていることが偲ばれました。



大川小学校の慰霊碑に花を手向ける金総長

【報告 事業戦略室 西塚重良】

ベトナム・ハノイ大学日本語学部の学生が来学

2013年に本学と協定を結んだベトナム・ハノイ大学から日本語学部長を団長とした学生8名が11月16日、17日に本学を訪問しました。外国語大学から総合大学となったハノイ大学の学生にとって、体育大学である本学の情報が乏しく、正に興味と関心を持っていたの視察でありました。今回の訪問はキャンパスを実際に歩きながら本学の魅力を紹介できるチャンスであることから、朴澤理事長・学事顧問自らキャンパスツアーを行いました。ハノイ大学生が興味を持ちやすい研究・分析を中心とした教室、機材を紹介したほか、齋藤学科長の剣道の特別指導やATルームでテーピングを巻く体験など学生達はとても楽しんでいました。

【報告 事業戦略室 鈴木美生】



朴澤理事長・学事顧問の説明に耳を傾けるハノイ大の学生

保護者のための就活セミナーを開催

10月29日（土）13時からB300番教室において、「仙台大学保護者のための就活セミナー」が実施されました。当日は、強風が吹く悪天候にもかかわらず、142名の保護者の方にお集まりいただきました。前半では、「就職活動を巡る昨今の状況と保護者の役割」と題し、仙台大学の学生に焦点をあてた切り口で藪耕太郎准教授（創職チームリーダー）より説明がなされました。

引き続き「教員採用試験の現状と対策」においては、教職支援センターの井上雅勝教授に仙台大学の教員採用試験の出願状況や宮城県の教員採用試験の状況、また本学の教員志望者への支援や取り組みをご説明頂きました。

後半では、株式会社ディスコ東北支社の支社長加藤淳氏より「大学生を取り巻く就職環境と就活における親のかかわり方」をテーマに就職情報会社のお立場からご講演頂きました。そこでは、現在の就職環境や就職活動の流れ、保護者の皆さまにご理解頂きたいことや保護者の役割についてお話頂き、あっという間に予定の2時間を過ぎてしまいました。

うれしいことに後日、学生が入試創職室を訪れ、これまであまり親子の会話がなかったのですが、保護者のセミナーの開催を機に急に母親が話しかけてくれるようになり、「話の内容は“そんなのわかってるよ”というような内容であっても、すごく心強いです」と話してくれました。母親に背中を押された学生は早速、情報収集にあたっていました。

これからも創職チームでは、目標達成に向けて大学・家庭一丸となって目まぐるしく変わる就職環境に立ち向かって参りたいと思いますので、ご理解・ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

【報告：入試創職室 中鉢芳尚】



講師の話に熱心に聴く保護者

「第2回秋のプラズり大会」を開催



レースを見守る仙台大の学生と子どもたち＝太陽の村

11月5日（土）、柴田町の太陽の村で、「第2回秋のプラズり大会」が開催されました。小学1年生から小学6年生までの仙南地域の子供たちを中心に30名が参加し、傾斜25度の芝生の上をプラスチック製のソリに乗って30m先のゴールまでのタイムを競います。プラスチックソリ大会は、冬季オリンピックの正式種目になっている「ボブスレー・リュージュ・スケルトン」のソリ競技の魅力を知らってもらうことを目的として、宮城県ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟が主催し、仙台大学ボブスレー・リュージュ・スケルトン部が「仙台大学の専門教養演習」の授業の一環として協力し、行なわれました。

第2回である本大会では、仙台大学の学生が怪我や事故の無い様、準備運動や諸注意を話した後、子供たちはそりを速く滑るコツや乗り方・止まり方などを教わりながら練習をし、また、更に速く滑る方法など、最終的にはレースを行いました。第2回ということもあり、昨年よりも終始、歓声を上げながらそり滑りを存分に楽しみました。

村田町から訪れた小学2年生の男子児童は、「思っていたよりも坂は急で転びそうになったけれど、教えてもらったとおりにまっすぐ滑ることができたので、とても楽しかったです。」と話してくれました。また、昨年の第1回大会も参加した



柴田町の小学2年生の女子児童は、「去年よりもうまく滑る事ができました。また来年も遊びに来たいです。」と感想を述べました。

その他、プラスチックソリ大会ではボブスレー・スケルトン競技のことをより知って頂く為の競技紹介のブースを設置しました。ここでは、実際に競技をしている様子の映像や道具、オリンピックのグッズ、ナショナルチームに所属している学生の「JAPAN」と書かれているウェアの展示などを行いました。初めて見る道具やウェアなど子どもたちは興味津々に見てさわり、ブースコーナーを楽しんでいました。

今回のプラスチックソリ大会を通して、本ボブス



レー・リュージュ・スケルトン部の佐用向日葵（さよう・ひまわり）さん（体育学科3年一宮城・泉松陵高校出身）は「多くの方々のご厚意やご協力のもと、今年も大会開催にこぎつけました。大変な事もありましたが、子ども達が楽しんでそり滑りをしている姿を見て、頑張って良かったと心から思いました。この企画を通して人との関わりの暖かさや大切さが身に染みて、今後の自分を明るくしてくれる財産になりました。沢山の『ありがとう』の気持ちに囲まれ、心から感謝したいです。」と話しました。

これまでの経験を活かし、第3回目の大会も企画・開催していこうと考えております。今後も地域に根付いてこのようなイベントを開催し、2018年平昌・2022年北京と続く冬季オリンピックに向けて自分たちの競技力向上はもちろん、地域の方々にも応援されるような選手の育成・競技普及を目指し活動して参ります。

【報告 新助手 進藤亮祐】

鈴木省三統括副学長が仙台キワニスクラブで講演 「アンチエイジング戦略」



アンチエイジングについて講演する鈴木統括副学長

11月24日（木）、仙台キワニスクラブの招きにより、鈴木省三統括副学長は国際ホテルにて「アンチエイジング戦略」と題した講演を行い、37名もの会員の方々が熱心に耳を傾けました。

キワニスクラブは、全世界85ヶ国の主要都市に7400クラブ、約20万人の会員を有する奉仕団体で、ライオンズクラブ・ロータリークラブ同様、さまざまな慈善事業に力を入れています。

同クラブは活動の一環として、毎月2回講師を迎え講演会を開催しており、例会委員長で産経新聞東北総局長である白濱正三氏の依頼により本年4月に阿部学長が「いじめについて考える」という講演をし、大変好評だったことから今回のお申し出となりました。

最初に鈴木統括副学長は、「アンチエイジングの基本は動く事。人間は寝たきりになると2日で1%の筋肉がなくなり、10日間寝込むと5年分の筋力が減ってしまいます。高齢者を寝かせておかず、座る時間よりも一>立つ時間一>さらに歩く時間を長く日常生活に取り入れ、最終的に運動へと導くのが大切です」と話されました。

日本人の平均寿命（男性81才、女性87才）が世界的に高いことは喜ばしいですが、いわゆる寝たきりの期間が男性で10年、女性で約13年もあり、平成20年に実施した調査では40歳以上の宮城県のメタボ率が全国ワースト1位だそうです。そこで鈴木統括副学長は「健康」で「長寿」のありがたみを噛みしめるために今すぐ実践できるポイントを紹介されました。

①運動

1つは運動で、会場にいる全員が目を開けたまま片足で2分間立っているかどうか？を試しました。すぐヨロヨロとバランスを崩す方、1分

保つのがやっとだった方～と37名中、最後まで立っていたのは7名のみ。みなさんは、簡単に見えてこの程度の運動すら自分にはできないのか？ということ改めて認識し、鈴木統括副学長の「『貯金』ではなく『貯筋』が大切です」の言葉に大きく頷きました。例えばプロスキーヤー三浦雄一郎氏のお父様である敬三氏が99才でモンブラン滑降を成功させた通り、継続すれば寝たきり・骨折・転倒・脳疾患といった要介護状態を回避することができるそうです。

②脳のトレーニング

次に、昨今、ますます深刻化している認知症の予防は脳を鍛えることで、本を読むよりも、楽器の演奏、それよりもチェス、最も良いのはダンスだそうです。ダンスにより平衡感覚を養い、脳にも良い刺激になるということでした。

③栄養

最後は栄養です。身近な朝食から見直してみましよう。鈴木副学長は「完全無欠なコーヒー」の作り方を紹介しました。

コーヒー豆を挽き、カビていない新鮮なアップグレードコーヒーとグラスフェッドという純粋なバター、ブレインタンオイル（中鎖脂肪酸）をミキサーなどで混ぜ合わせて飲むだけで簡単、かつ栄養価が高くとても美味しいそうです。このアンチエイジング方を自ら実践して3か月という鈴木統括副学長は非常に体調が良く、減量できたのみならず、呼吸法を取り入れて腹筋を“シックスパック”に変えたとのことでした。

キワニスクラブ会員の年齢層が50才～80才と、まさにアンチエイジングに最も興味のある世代だけに、みなさん真剣にスクリーンへ映し出された資料を見つめ、ところどころメモを取りながら聞き入っていました。

会員の1人でアサヒビール株式会社東北統括本部の副本部長、日本ソムリエ協会認定ワインアドバイザーでもある田中大（たなか・まさる）氏は「健康的に年を重ねることに関し実に実践的な内容で、大変ためになりました。今日教えていただいたなかから、自分でもすぐに始められそうなものを選び、スタートしてみます」とおっしゃっていました。

スポーツを科学する仙台大学らしい、運動と栄養の重要性についてアカデミックでホットな話題を提供する場となりました。

ゴンザガ大学視察報告

米国大統領選挙の渦中にワシントン州スポケーンを訪問し、明成高校出身で昨年の日本バスケットボール代表候補となった八村 塁が、教育環境が素晴らしいゴンザガ大学で、学業・バスケットボール競技とも、順調に経過していることを確認したので、以下、報告する。

期日 平成28年11月3日～9日

場所 ワシントン州スポケーン市・シアトル市

訪問者 朴澤理事長

マーティ・キーナート仙台大学副学長
中村明成高校教頭

I バスケットボール競技

3日夕刻、ゴンザガ大学到着後、直ちにアシスタントコーチ兼選手獲得スカウトのLloyd, Tommy氏に導かれMcCarthy Athletic Center(メインアリーナは6千人収容)での男子バスケの練習風景を見学した。

5日夜は、満席の同施設で、NCAAシーズンインに先立つWest Georgia大学とのエキシビジョンマッチを観戦した。地域住民が学生とともに同一色の応援服で集うという、私立大学の地域融和と米国のスポーツ文化の一端を垣間見た。

日本人関係者の観戦ということもあって、背番号21の八村も試合後半に出場の機会を得て、短い時間のうちに、ダンクシュート2本、3点シュート1本を含む9得点を挙げ、存在感を示していた。



試合で活躍する八村塁選手

(帰国後の12日、Red-Shirtではなく、正式選手として登録されたとの連絡が入り、めでたく初年度からNCAAに出場できることとなり、早速、初戦のUtah Valley大学戦でデビューを果たした。エキシビジョンマッチ後に挨拶したヘッドコーチのMark Few氏によれば、英語力がつけば、八村の活躍の場はどんどん広がるだろうとの由だった。)

II ギンザガ大学

ギンザガ大学は、米国北西部ワシントン州東部

に位置するスポケーン市に所在する私立大学である。スポケーン市は、人口20万人弱、シアトル市に次ぐ州内第2の都市であり、自然が豊かで治安も比較的良好である。

ギンザガ大学は、1887年にローマカソリック教会Jesuit派が設立した総合大学(Liberal Arts)で、学生総数7400人(うち学部生約5000人)の中規模大学である。



学部には、教育学の一部としての体育(Physical Education)領域があり、EducationとHealth & Fitnessの学位を付与している。修士課程には、同じくSport & Athletic Administration領域が設置されている。キャンパス環境の好感度が高く、非常に学生の面倒見が良い大学との印象を受けた。各種アウトカムも高位を示しており、学生の卒業率、学内残留率等は、全米の中規模校のなかではN01、全大学のなかでもトップ30内に入っている。GPA平均は3.73、ST比も11.1と面倒見の良さが反映されている。ちなみに授業料その他諸々を入れた平均費用は、年5万3千ドル強となっている。海外からの留学生が250人おり、日本人も数名見かけた。

スポーツも盛んであり、男子バスケットボールの他、女子バスケットボール、男女漕艇、同サッカー、男子野球などがNCAA Division1に属する強豪チームとなっている。アスリート管理部門のChris Standiford氏から、私立大学としてのスポーツ施設整備と財務について、色々と話を聞くことができた。

八村塁に対する教育上の配慮も非常に行き届いており、本人の修学上の便宜について大学挙げて対応してくれていることが良く理解できた。

学生アスリートの教学面サポート組織のディレクターであるSteffany Galbraith女史、およびアスリート専属チューターのRian Oliver女史の両名が八村の教学面の管理を担当しており、八村の大学4年間のセメスター別履修計画をきめ細かく設計し、特にOliver氏はほぼ毎日、本人と連絡を取ってくれている由であった。本人の英語力向上はまだ緒に就いたばかりであり履修上の今後の困難も予想されているが、何より八村本人の人の良さが必ずや成果に結びつくであろうというのが、両者の弁であった。(次ページに続く)

Ⅲ アメリカ(スポーツ産業・大統領選挙)

今回行程中には、米国スポーツ産業で最も規模の大きいプロ・フットボール競技について、シアトルで実態を視察する機会も得ることができた。同時に、米国からの帰国が大統領選挙当日ということもあり、世界最大の注視的である歴史的出来事の渦中の米国の様相を実感することができた。

○プロ・フットボール視察

7日夜、シアトル市センチュリーリンク・フィールドで、アメリカン・フットボールのシアトル・シーホークスの試合を観戦した。収容人員6万7千名の観客席は、ほぼ満席であった。料金400ドル前後の座席であったが、仮に全席がその金額としても、それだけでも1日売上28億円ということになる。試合会場に隣接するセレモニー広場では老若男女全てが試合前に楽しめる様々なアトラクションが実施されていた。シーホークスの試合は応援席の騒音で有名とのことであったが、確かに耳栓が必要であった。中間の休憩時間中にフィールドで実施された傷痍軍人を称えるセレモニーが印象的であった。



赤丸がアメリカンフットボールのセンチュリーリンク・フィールド
白丸は野球のシアトル・マリナーズの本拠地セーフコ・フィールド

○大統領選

帰着した成田空港(日本時間9日午後)にて、トランプ氏優勢のニュースが流れ、結果は米国メディア事前予想の全滅というトランプ大統領の誕生となった。シアトルで若い米国人男性との会食の機会を得た。アラバマ州の有力大学を卒業し、地元設計会社、3M社、ボーイング社に勤務する米国の今後を担う若者達である。それぞれ、クリントン、トランプ、そしてグリーン・パーティという3者3様の支持態様であった。シアトルで遭遇した物乞いの若者を含め、米国の現状の縮図を感じた。

【報告 朴澤泰治 理事長・学事顧問】

運動栄養学科「給食運営実習Ⅰ」



運動栄養学科の授業として、栄養士免許取得のための必修科目「給食運営実習Ⅰ」(3年次開講)があり給食運営能力を修得することを目的に大量調理の実習を実施しています。実習では①栄養バランスや彩りを考えた献立づくりから②発注業務、③調理作業、④衛生管理まで一連の作業を学生が主体となり食事の提供を行っており、今年は11月4日～12月16日までの毎週木曜と金曜(全12回)に実施されています。

この実習では、出来上がった給食を調理した学生たち自らが検食するほか、食材相当額の食券8～15食を給食メニューとして希望する教職員へも販売し提供しています。味付けや盛り付け、接客態度など食後アンケートなどを実施し客観的評価なども得ながらより良い実習となるよう次のメニュー作りに生かしています。彩りを考えた力作

の美味しい給食メニュー(エネルギー量(kcal)の設定は20代男女の平均値)は、実習の回数を重ねる毎に腕を上げ、リピーターの教職員もいるほどです。

～運動栄養学科の学生の皆さん、来月も栄養たっぷりの給食を楽しみにしています！～



左から大久千里さん、堀内くるみさん、大友佳苗さん、吉住拓人さん
(※青い帽子着用)

「ほうれん草など冬の旬の野菜を取り入れ、パプリカなどで見た目もカラフルにし喫食者が見た目でもおいしく感じるようにと「和風」のレシピをみんなで作成しました。野菜も高騰するなか食材費を400円の中で材料と味付けを工夫し食べやすいメニューを心を込めて作成しました」と4人を代表し吉住拓人さんが話してくれました。

柴田町制施行60周年

「第1回柴田町フットパスウォーク」を開催



町内の由緒あるお寺なども散策

11月3日(祝・文化の日)、「柴田町制施行60周年 第1回柴田町フットパスウォーク」を柴田町と仙台大学が地方創生事業の一環として共催し実施しました。

「フットパス」はイギリス発祥で森林や田園地帯、古い街並みを歩き自然を楽しみながら地域の歴史や景観を楽しむものです。柴田町が提案する2つのコースに柴田町内外から83名の参加があり「船岡コース」4グループと「槻木コース」3グループの計7グループに分かれ、柴田町ガイドサポーターによる解説を聞きながら町内の史跡各所を約2時間かけて歩きました。グループそれぞれに本学学生ボランティアが帯同し、写真撮影をしたり交通整理をしたりと活躍し参加者の方々と共に柴田町の良いところを再発見していたようです。

フットパスコースを楽しんだ後には、仙台大学25記念館「なちゅら」において、柴田町の特産品を使用した昼食を堪能し、栄養バランスのとれたレシピを考案したスポーツ栄養士の岩田 純准教授の説明に熱心に耳を傾けました。学生達が道中で撮影した

各グループ毎の写真を溝上新助手がスクリーンに投影すると、会場からは歓声があがり当日のコースを再度確認しつつ楽しんでいる様子も伺えました。この他、参加者が気軽に立ち寄れるよう工夫を凝らした「健康カフェ」、「ノルディックウォーキング初心者体験コーナー」「体組成測定・骨密度測定コーナー」などのブースを設けイベントも開催しました。「仙台大学方式の座ってできる楽しい体操」では運動後の体ほぐしをしながら有意義な時間を過ごしていただきました。最後に、柴田町特産の新鮮野菜や新米、柴田町商工会の商品券など、参加者全員に商品が当たる大抽選会も開催し、最後まで秋の一日を満喫して無事すべてのプログラムが終了しました。閉会の挨拶で柴田町地方創生対策室の平間室長から、2年後に柴田町においてフットパスウォークイベントの全国大会が開催予定であることが紹介され、今度は全国からの来訪者をおもてなしする側としてまた参加して頂けたらありがたいと話され会が締めくくられました。



健康カフェやノルディックウォーク、抽選会なども行われました

2名の中学生が本学で職場体験

11月1日(火)～2日(水)の2日間、槻木中学校2年の大沼鉄平君と大久保裕真君の2名の生徒が本学で職場体験を行い、留学生寮である国際交流会館の清掃作業や図書館書架整理、広報室での新聞記事整理などを体験しました。2日間、本学での体験を通じて大沼君は「図書館での図書整理などは思ったより大変でした。」、大久保君は「国際交流会館内の清掃で、汚れがなかなか落ちなくて大変でした。」とそれぞれ感想を述べてくれました。

本学では毎年、町内の3つの中学校から職場体験を行う生徒を受け入れています。



新聞の記事を整理する大沼君(右)と大久保君

「子ども運動教育学科」学生募集 高校訪問記

「仙台大学に新しい学科が誕生するという話を進路指導部長から聞いておりました。」開口一番に伝えてくれたのは、11月18日（金）に学校訪問させていただいた秋田県内の高校の教頭先生でした。

平成29年4月に開設される「子ども運動教育学科」への学生募集活動として、9月、10月の文部科学省、厚生労働省関連の設置認可後、第1弾として10月に宮城県内、第2弾として11月に東北各県の高校へと訪問の輪を広げてきました。

訪問を実施するにあたり、新学科が設置されることの周知そして認知度を高めるために、全学の教職員の方々に高校の情報提供をお願いしました。その結果、短期間に旧知の方や先輩・後輩の先生、さらには部活動関係の知り合いの方々をたくさん紹介していただきました。全学の教職員から寄せられた情報は大変貴重で、実質的な募集活動開始の遅れを少しでも補う上において大きな力となりました。

訪問した高校関係者の方々からの声を集約させていただきますと、仙台大学としての知名度はこれまでの入学実績などから大変高いものがありますが、「子ども運動教育学科」となると冒頭に紹介した高校のように情報が共有されている学校はまだ少ないというのが実情ではあります。しかし、学校を訪問し話を聞いていただくことは、仙台大学体育学部としての伝統に立脚した幼年期の運動教育の基礎を学ぶ新学科設置の趣旨についての理解を深めていただけるよい機会となっております。

一人でも幼児期の運動に関心もち、幼稚園教諭や保育士として将来活躍したいと考えている受験生が本学科に入学を志願することを願い、これからも学校訪問、情報収集を続けていきます。

【子ども運動教育学科 学科長久能 和夫】



第38回みやぎ大菊花展柴田大会

「花のまち柴田」の秋の風物詩、第38回みやぎ大菊花展柴田大会が船岡城址公園を会場に絢爛豪華に開催されました。会場には6市3町の11団体の菊の愛好家たちが丹精を込めて作り上げた大菊3本仕立て、達磨作り、福助作り、小菊盆栽作、盛り菊あわせて計2,746鉢の力作ぞろいの菊が立ち並び、過去最高の6,920名の方々が来場しました。

また出展された菊のうち、審査対象菊となったのは558点で、全菊連山形支部2名の審査員による5時間に及ぶ審査が厳正に行われ5部門127点が選ばれました。

平成21年からは「仙台大学学長賞」も設けられており、今年の仙台大学学長賞は泉高森菊の会、村上あい子さんの「国華金山（こっかきんざん）大菊の部」が受賞され、会場では堂々と見事な大輪を咲かせていました。29日には柴田町役場で表彰式が行われ阿部学長から賞状と楯が手渡されました。



ご主人の村上健夫さんに代理授与

平成28年度 「仙台大学学長賞」 受賞

作品名「国華金山（大菊の部）」

村上あい子さん（泉高森菊の会）のコメント

「夫婦揃って菊を育てて約15年になります。今年は、大菊100鉢、達磨が30鉢、福助30鉢、小懸崖4つ、盛り菊20鉢を育てました。丹精込めて作った作品ですので、受賞はとても嬉しいです。」

ヨガ講習会を開催

最近、フィットネスクラブなどで、ヨガやホット・ヨガが大盛況です。またNHKでも、しばしば瞑想やマインドフルネス（瞑想から宗教性を排除）のストレス軽減、集中力アップ等の効果が取り上げられています（サイエンスZERO、ガッテン、NHKスペシャルなど）。そこで、卒業生のヨガインストラクター中村孝子氏（健康福祉学科4期生、インド中央政府公認ヨガインストラクター、健康運動実践指導者、仙台市体育館や青葉体育館でヨガ講師）に依頼し、11月17日（木）、第5体育館アリーナを会場にヨガを実際に体験するヨガ講習会を開催したところ、学生24名（男子14名、女子10名。ほぼ全学科より、大学院生2名も含む）と教職員6名の計30名が参加しました。学生の所属する部活動も剣道、柔道、空手、サッカー、野球、トレーナー、介護系等々多彩でした。

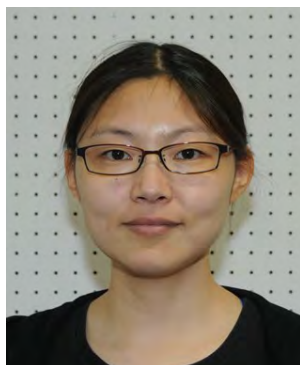


ヨガを体験する学生

また、同日の3時限目には健康福祉学科「健康支援・介護予防演習」の一環として、受講する学生を対象としたヨガ体験も行いました。

参加者からは「スッキリした」「よかったので、その後も自分で続けている」「是非大学のコースに取り入れてほしい。」などの感想が寄せられました。また、アンケートからは、受講学生のヨガへの関心の高さが見てとれ（特に、女子）、今後も、健康福祉・スポーツとヨガなどとの関連を考えていきたいと思いました。なお、当日の動画のDVDがありますので（講習会、演習とも）、ご覧になりたい方は小松正子までご連絡下さい。また、講習会開催にあたりご協力いただきましたたくさんの方々はこの場を借りて御礼申し上げます。

【報告 教授 小松正子】



講師の中村孝子さん
（健康福祉学科4期生）

【講師より】

11月17日（木）、ヨガをご体験いただきました。お昼休み、そして3コマとも参加者さんの多くが初めてという事でしたが「気持ちよかった」、「リラックスできた」などの感想をいただきました。

ヨガはスポーツと違い、外と競う事はありません。自分の内面へと意識を向けていき、ポーズと呼吸で心と体をほぐしていきます。ストレス社会の現代の中で、日常から離れ、自分へと集中する時間はとても大切です。

“今”という時間に集中して心と体をメンテナンスし、ニュートラルな状態へとリセットされることで次への活力にも繋がります。

また、体の状態（柔軟性や筋力など）は皆違います。それが個性であり、それにどれだけ沿ったポーズができるかというのが大事です。自分を知ることとはとても大切です。目に見えず、自分でコントロールするのが難しい心も、体や呼吸からのアプローチで良い状態へと導いていきます。集中力も増し、ストレス緩和、リフレッシュ、エネルギーが漲るなどの効果が期待できます。今回のヨガのご体験を機にもっと興味を持っていただけたら嬉しいです。

第9回青少年防災訓練ワークショップ円卓会議報告



東日本大震災の教訓からの学びについての発表する谷内遙君

今回の国際円卓会議は、生命倫理に関わる防災についてのテーマで発表され協議をした円卓会議でした。私は、アメリカ合衆国における緊急時における防災システムと指導マネージメントについて発表しました。学生の谷内遙（たにうち・はるか）君は、出身地気仙沼市で体験した津波災害の復興の体験をもとにボランティアのあり方について発表しました。参加国は、日本をはじめニュージーランド、インド、イラン、フィリピン、バングラディシュ、韓国、香港、ロシア、ネパールから集結し、またスカイプにてメキシコ、カナダに加えて仙台大学LC棟より3名の学生（國井海君、浅井美樹さん、小原迅登君）がスカイプにて発表と協議を行いました。実際には、JR利用者の他4名（栗山仁君、坂下聖也君、小野寺理奈さん、金千晶

さん）もこの日のために準備をしてきたが、地震の影響で不通となり参加が困難となってしまいました。谷内遙君が発表した日は、東北地方で早朝5:59に大地震（M7.3、震度5弱）が起きた11月22日で、主催者を始め参加者らが安否を心配して頂きながらの発表でした。遙君の発表を聴き参加者らは、自分自身が被害を受けても自らの力で家族と協力して自立していこうとする実体験に心を動かされ涙を流す参加者もいた。司会進行をされた熊本大学石原明子先生の遙君を始め仙台大学の学生達の発表と質疑応答について高い評価と感謝の気持ちをして下さった。遙君自身、今回自らの体験を英語で発表したことで、熊本大学大学院博士課程のネーサン・レイ・アリム（フィリピン留学生）氏や同大学で防災ボランティアに携わっている大学院修士課程1年生の片橋匠氏との交流も今後とも継続されるようでした。【報告 教授 高橋 亮】



仙台大学LC棟からもスカイプで会議に参加

谷内遙さんの発表内容（抜粋）

仙台大学 谷内遙

Sendai University Haruka Taniuchi

私は地震が起きたとき中学一年生でした。私はあの出来事を忘れることができません。

I was a seventh grader when the earthquake happened. That is an incident that cannot be forgotten.

私はあの時教室にいました。地震はとても強く、自らの意志では動くことができませんでした。またその瞬間は、何が起きたのか理解することができませんでした。蛍光灯は割れ落ち、クラスメイトは泣き悲鳴を上げ、壁はボロボロと崩れ落ちていました。それはフィクションのようにも感じられました。長い揺れが一度収まり、担任の先生と私たちは校庭に一時避難をしました。多くの生徒が泣いていたのを覚えています。私はすぐに祖母が迎えに来て高台にある叔父の家に弟と祖母と避難しました。そこで私は信じられない景色を目の当たりにしました。黒い濁流が私の家を破壊していました。何が起きているのかはつきりと理解していないのに涙が溢れてとまらなかったのを覚えています。

I was in the classroom at the time. The earthquake was so strong. I could not move and I didn't know what was happening. The classroom's fluorescent lamps fell and cracked, my classmates cried, and the walls were destroyed. It felt surreal. When the earthquake stopped, the students and teachers ran to the school ground. Many students were crying. Soon my grandmother came with my younger brother to pick me up and we went to my uncle's house, which is located on a hill. There I saw the house swallowed by the Tsunami wave. I couldn't believe my eyes. I was too shocked to cry.

それから数日間、親戚の家でライフラインがない状態で毎日生きる事だけを考え、過ごしました。町の惨状に私は幼いながらも怯えていました。一週間ほどたち、家の様子が気になっていた祖父と共に私はサイズの合わない長靴と作業着を着て家まで歩いて行きました。道路には家があり、魚、がれきが転がっていてヘドロでアスファルトが見えませんでした。そのため、流れてきた発泡スチロールで足場をつくりながら歩いたので普段、20分ほどで着く道のりに一時間以上かかったのを覚えています。やっとのことでたどり着いた家を見てそこでも私は涙がとまりませんでした。家は変り果て玄関には車が2台突っ込んでいました。2階を残して1階は家と呼べる状態にありませんでした。私は汚れた袖で涙を必死に拭きました。

Over the next several days, I lived in fear. I was very scared of our destroyed city. A week later, my grandfather and I walked to my house. I wore my uncle's rubber boots and working clothes, which were too big for me. Houses, fish and rubble were scattered on road. I couldn't even see road because debris covered the asphalt. It took a long time to make it to my house. Before the disaster, I could get to my house in 20 minutes, but it took us an hour. My tears didn't stop when I saw my house. My house was completely destroyed. There were two cars in the house entrance I wiped my eyes using my dirty arms.

翌日、祖父は一人で自宅を片付けるといふ始めました。しかし、家族全員がそれに反対しました。当時72歳の祖父があの家を一人で片付けられると家族は思わなかったからです。というのも私の家には父がおらず、男は祖父と私と小学3年の弟だけだったからです。私は今と違い身長が148cmしかなく、とてもではありませんが力仕事をごさせるように家族は感じなかったのだと思います。私も家族と同様に祖父一人であの状態をどうにかできるとは思いませんでした。私はなんとか家族の役に立ちたいと思いました。そこで私は反対を押し切り自宅に向かう祖父に、頼み込んで片付けに連れて行ってもらいました。しかし中学一年の私にとってその仕事は大いに危険で、大変でした。がれきは釘が飛び出し、ヘドロには油が混じり相当な重さでした。一日目で全身が悲鳴をあげていました。また、それが二週間ほど続きました。当然私にはとてもハードな仕事でしたが、弱音を吐かず仕事を続ける祖父を見て尊敬し、私も弱音を吐かず頑張らなければと感じ、やり抜くことができました。

The next day, my grandfather said he would clean the house by himself, but we did not think that was a good idea since he was 72 years old. My father had divorced from my mother when I was young, so the men in my family were my grandfather, my younger brother and myself. I was only 148 cm then, so my family thought I couldn't really help my grandfather. I thought so too, but I really wanted to help him. I asked him to take me along, and he agreed. However, this job was very dangerous and difficult for me. The debris was heavy, and it contained oil. We were exposed to nails and other dangerous sharp things. I was tired after one day's work, and we worked on this for 2 weeks. I was exhausted, but I did not want to stop because my grandfather never complained.

I lost many things, and I was emotionally and mentally damaged as a result of the disaster. However, the disaster also taught me many things. Before the disaster, I didn't really have connections with different types of people, but I learned some important lessons from this disaster.

When we cleaned my home, we couldn't deal with our refrigerator. We were embarrassed.

B・L・S部 宮嶋克幸選手がノースアメリカンカップで優勝

このほど、カナダのカルガリーとバンクーバーを会場に開催された「ノースアメリカンカップ」第3戦でB・L・S部の宮嶋克幸選手（体育学科3年-札幌丘珠高校出身）が見事優勝を果たしました。また、宮嶋選手は第1戦と2戦で6位、第4戦で2位に入りトータルポイントでも1位となりました。

宮嶋選手の他にも有明宏祐選手（運動栄養学科4年-仙台商業高校出身）と釣船さやか選手（体育学科2年-仙台商業高校出身）も出場し活躍しました。

11月29日（火）には大会に出場した3名と監督の鈴木省三教授とで阿部芳吉学長を訪れ、大会の結果を報告しました。宮嶋選手は「2年後の韓国・平昌オリンピック出場を目指し更に練習に励んでいきたい。」と今後の意気込みを語ってくれました。



宮嶋選手（左）、釣船選手（中央）、有明選手（右から2番目）

漕艇部 全日本選手権で優勝

11月10日（木）～13日（日）の4日間、埼玉県戸田ボートコースで開催された「第94回全日本選手権大会」において、男子舵手つきフォアで優勝しました。このほか、男子舵手なしフォア、男子舵手なしクォドルプルでもそれぞれ第3位に入賞するなど大健闘しました。

男子舵手なしフォアでの優勝は8年ぶり2度目の快挙で、主将の岡田遼大選手（体育学科3年-島根県江津工業高校出身）は、「1年間準備してきた成果を出し切ることができました。来年は創立50周年の節目の年でもあるので、目標を明確にして練習に取り組みたいです。」と話していました。

なお、11月21日（月）には、朴澤理事長・学事顧問、阿部学長に優勝と第3位入賞の報告を行いました。



理事長・学事顧問と学長に優勝と入賞を報告した漕艇部員

Monthly Report

Bリーグ 仙台89ERSと朴沢学園が オフィシャルアカデミックパートナーを締結



12月16日（木）、仙台市青葉区川平地区にある「明仙バスケットボール体育館」を会場に、Bリーグ1部の仙台89ERSと朴沢学園によるオフィシャルアカデミックパートナー締結記者会見が行われました。今回締結されたオフィシャルアカデミックパートナーの取り組みとして、スポーツコーチング、スポーツマネジメント、スポーツトレーナー、スポーツ栄養、スポーツ情報分析などの分野において、学生に対しプロの現場での実践的な学習や人材育成、チームや選手の補助の機会を提供していただくことなどが内容として盛り込まれています。

締結にあたり、仙台89ERSの中村彰久球団代表は「現場と選手との深いかかわりの中で研究や勉強ができる。将来的に、学生がプロの場で活躍できるようお手伝いしたい。」とあいさつ。

朴澤泰治理事長・学事顧問も「仙台大学や明成高校の建学の精神である『実学』『創意工夫』に合致した取り組みであり、大学が求められている『教育・研究・社会貢献』の3つが全て網羅された内容である。スポーツ科学には実践の場が非常に重要であり、そのような場を与えていただき大変ありがたい。」とあいさつしました。

また、会見に同席した本学出身の佐藤文哉選手も「スポーツ栄養についてのサポートは早速、練習や普段の生活に活かすことができている。今後もパフォーマンス向上に繋げていきたい。」とコメントしました。

今回締結した取り組みは全国でも非常に珍しく、既に11月から試験的な活動がスタートしています。来年度からはカリキュラムの一つとして本格的に実施されることになっています。

〈目 次〉

仙台89ERSとオフィシャルアカデミックパートナーを締結	1
松島町と連携協力に関する協定を締結	2
スポーツバイキングinあすと長町を開催	3
ベラルーシ、ウクライナを訪問して【報告】	4-5
平成28年度第3回就職ガイダンスを開催	6
「仙台大学第3回学術講演会」を開催	7
学生の活躍	8

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室
直通 0224 - 55 - 1802
Email kouhou@sendai-u.ac.jp

松島町と連携協力に関する協定書を締結



調印後に握手を交わす阿部学長（左）と桜井町長

12月5日（月）に松島町役場を会場に、「仙台大学と松島町の連携協力に関する協定書」の締結式が行われ、桜井公一松島町長や本学の阿部芳吉学長を始め、約10名が協定書の締結を見守りました。

今回締結した協定は、教育上、行政上の諸問題に的確に対応するため、相互に連携協力し、双方の福祉と教育の充実発展に資することを目的としており、高齢者や障害者等の健康づくりの講演・運動教室等の支援に関すること、児童・生徒及び高齢者等の健康増進を目的とした栄養指導等の支援に関すること、児童・生徒の学校におけるスポーツ支援に関することなどが盛り込まれています。

協定式で阿部学長は「本学は、これまでも震災の被災地復興支援に努めてきたところですが、この協定を機会に松島町とも連携を深めていきたい」と述べ、今後の連携協力推進に期待を寄せました。

『第2回還暦同期会』開催 ～38年ぶりの再会に感激！北海道から大阪まで49人が参会～

11月26日（土）に同期生40名に朴澤理事長・学事顧問、阿部学長はじめ来賓、恩師等9名の計49名の参加者で開催しました。

この会は、還暦という人生の節目を機に、卒業生が一同に会し、懐かしい友や恩師と再会し、お互いの近況を語り合い旧交を温める。ことなどを目的として昨年初めて開催され、今回で2回目の開催となりました。

当日は午後2時に懐かしき仙台大学に集合。総会（顔合せ）の後、素晴らしい施設設備を見学、午後4時から船岡駅前のホテルを会場に懇親会を行いました。久しぶりに再会する部活仲間や友人、恩師との話に盛り上がり、自己紹介で出る当時のエピソードに笑いが絶えず、時間たつぷりと旧交を温め合いました。最後に校歌を高らかに歌い、学長のエールで会を締めとお開きとなりました。

その後、近くの居酒屋へ総移動しての二次会も、苦楽を共にした仲間との語らいは尽きることがありませんでした。

来年は第10期同期生（昭和51年4月～昭和55年3月）です。多くの皆様の参加を期待しております。

【報告：仙台大学同窓会 事務局長 大河原則夫】



思い出話などで大いに盛り上がりました

英文文献検索講習会を開催

図書館企画運営委員会では、12月6日（火）に英文文献データベース（SPORTDiscus、MEDLINE）の検索方法について講習会を開催しました。講習は、データベース提供の（株）EBSCO様にご担当いただき、コンピューター実習室において2回（各1時間）実施しました。教員、大学院生約10名が参加し、当日実施したアンケートに、「大変、参考になった」「日常の検索にも有用なノウハウを聞いた」などの感想が寄せられました。また、リモートアクセスや今後の講習会開催へのご期待もあり、委員会でこれらを検討してまいります。新しい情報は、図書館ホームページ等でお知らせします。

【報告：教授・図書館長 小松正子】



仙台大学がスーパースポーツゼビオと連携 『スポーツバイキングinゼビオあすと長町』を開催



子どもたちにニュースポーツを指導する学生

12月3日（土）午前11時から17時までの約6時間にわたり、本学体育学科スポーツマネジメント・コースの学生23名が主体となって企画・運営したイベント『スポーツバイキング inゼビオあすと長町』が、今年3月スーパースポーツゼビオあすと長町店内に新設された多目的スポーツ体験スペース「ゼビオスポーツパーク」にて開催されました。

この催しは、宮城県が全国的に見て肥満傾向児が多く、また、地域スポーツも多くの課題を抱えているという深刻な状況を踏まえ、東北唯一の体育大学である本学とスーパースポーツゼビオあすと長町店がタイアップする事業の一環として実施されました。今回は「スポーツを通じた親子交流」をテーマとし、学生が考案した体験型のニュースポーツを主としたスポーツイベントとなりました。

イベントを開催するにあたり、「仙台大学の専門教養演習」を「スポーツマネジメント・コース所属」として履修する3・4年生の学生たちは、事前の現場視察や店舗スタッフに対するイベント企

画のプレゼンテーション、参加者募集のための広告作成やラジオ出演、太白区内の児童館を中心としたイベント宣伝といった活動に取り組みました。コースとしてもスーパースポーツゼビオあすと長町店としても共に初の試みとなる、「ゼロからの企画・運営」を経験しました。

当日は、A/B/C/Dと4つのグループに分かれてプログラムを実施しました。十分な告知ができたのか不安を抱えながら、客足もまばらな午前中からAグループの企画「フリスビー親子」にてイベントがスタートしました。イベント開始直後は、本当に参加してくれる親子はいるのか、果たして子どもたちの興味関心を引くことは出来るのか、学生たちは緊張の面持ちでした。しかし、次第に親子連れの参加が見られ、現場は思わず笑みのこぼれる雰囲気になりました。学生たちは店内で買い物中の親子連れに、スポーツパークに立ち寄ってもらうよう積極的に声をかけ、午前中と夕方は、一時的に客足が停滞することもありましたが、1日を通して多くの方に楽しんでいただくことができました。

どのグループのプログラムにおいても、申込みは不要で参加でき、主に小学生親子が対象とされていましたが、実際には中学生やご年配の方など、年齢を問わず多くの方がスポーツパークに立ち寄り、ゲームを楽しんでいる一幕もありました。学生たちも充実した表情で、それぞれのグループのプログラムを進行していく中で手ごたえを得た様子でした。このような機会をいただき、プレゼンテーション時や児童館への告知においてご指導いただいたスーパーゼビオあすと長町店のご担当者や関係者の方々に感謝いたします。

【報告：体育学科スポーツマネジメントコース4年 赤坂有紀】



店内にいるお客様にもイベントの周知



スポーツバイキングを実施した学生達

ベラルーシ、ウクライナを訪問して



プリピャチの過去と現在

私は11月20日から28日にかけて、埼玉大学、新潟県立大学、フェリス女子大学、首都大学東京の教員と4名の大学院生・学部生とともにベラルーシとウクライナ両国を訪問する機会を得ました。2016年はチェルノブイリ原発事故後30年にあたり、30年間の「復興」の取り組みに学校や文化施設が果たしてきた役割についての基礎的な調査を目的とした訪問でした。なお、今回の調査は学内の「研究計画に基づく研究費」の助成を受けています。

「濃密な1週間だった」というのが率直な感想です。7日間で2カ国・3都市をまわり、多くの施設を訪問し、多くの関係者からのヒアリングを「強行」したのだから、濃密とはいえ、それぞれの30年間の「戦い」のほんの一部に私たちは触れたに過ぎません。詰め込みすぎたせいか、予定通りに進まなかった部分もありました。

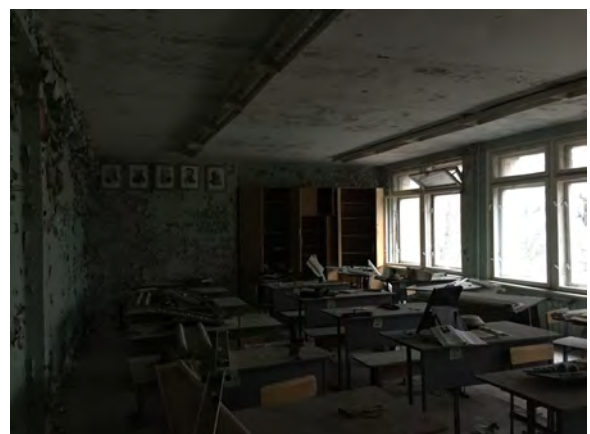
調査の詳細は別稿に譲るとして、ここでは私が感じたウクライナとベラルーシの違い、なかでもチェルノブイリ原発事故に対するポリシーの違いについて簡単に述べるに留めたいと思います。客観的でも分析的でもない、主観に基づく感想文としてご覧いただくと幸いです。

チェルノブイリ原発そのものは現在のウクライナに位置しています。そのウクライナはツーリズム——ダークツーリズムの道を追求しているように感じられました。もちろん誰でも自由に近づくわけではありませんが、チェルノブイリ原発10km圏内でも立ち入りに必要なのはパスポートとお金と事前申請です。現在も10km圏内では5,000人が働いており、30km圏内まで広げると12,000人が働いています。30km圏内には働く人向けの売店やカフェがあり、観光客も自由に利用することができます。さらにそこでは観光客向けにチェルノブイリグッズ（Tシャツ、ボールペン、マグカップなど）も販売しています。新たな「石棺」の移設作業のため、私たちは事故を起こした4号炉に近づく

ことはできませんでしたが、「ほんの数週間前までは誰でも100m程の距離まで近づくことができ、記念写真を取ることができた。」と私たちを案内してくれた若い、事故後産まれの25歳の女性で、5ヶ国語を操るself-employedのガイドさんは言っていました。

それでも私たちは、チェルノブイリ原発から3kmのところに位置するプリピャチの街を訪問することはできました。チェルノブイリ地区そのものは800年以上の歴史を持っていますが、プリピャチは1970年のチェルノブイリ原発建設と同時に建設され、主に原発作業員が暮らす新しい街として整備されました。多くの花が植えられ、マンションが立ち並び、旧ソ連圏内で最も物資が豊かで、離れた街からも人びとが買い物にくる「あこがれの街」であったようです。事故当時は49,500人が居住し、平均年齢は26歳とかなり若く、さらには出生率も極めて高く、毎年1,000人の子どもが生まれていたといえます。そのプリピャチの現状は「夢の跡」と表現するしかないものでした。ソ連で最初のスーパーマーケット、メーデーに合わせてオープン予定だった遊園地、飛び込み用プールも備えた複合体育施設、大きな映画館や劇場、多くの子どもたちが学んでいた学校、その全てが音もなく朽ち果てながら森と化していくただなかにあります。ウェブ上にもプリピャチの写真は数多く掲載されていますが、その場所に身を置くというのは、とても静かで、とても強烈な経験でした。

ウクライナでは良くも悪くもチェルノブイリ原発事故は〈市場化〉されているように感じました。多くの人の目に触れるようにすることは、お金を生み、記憶の風化もとどめるような効果もあるでしょう。しかし、その〈市場化〉はチェルノブイリ地区内に放射性廃棄物の最終処分場を建設する計画（<http://interfax.com.ua/news/economic/378330.html> [2016/12/27]）を推し進める原動力にもなっているのではないのでしょうか。（次ページに続く）



プリピャチ第3学校の教室（物理質）



ポレーシェ放射線生態保護区内に生息するヨーロッパバイソン

ひるがえってベラルーシはどうでしょう。先述したようにチェルノブイリ原発そのものはウクライナに位置していますが、事故で放出された放射性物質の多くはベラルーシに降り注いだとされています。ベラルーシ南部にあるポレーシェ放射線環境保護区（約2,160平方km）は現在でも厳しく立ち入りが制限されており、地区（市）や州だけでなく、非常事態省の許可がなければ立ち入ることはできません。私たちも直前、それこそ前日まで訪問できるかどうかかわからない状況でした。ベラルーシ国立大学の古澤晃先生、ホイニキ地区の副執行委員長（副市長）のジャーナ・チェルニャヴスカヤさんのご尽力がなければ、今回の訪問はかなわなかったでしょう。ポレーシェ放射線環境保護区にはプルトニウムも存在し、そこに一般の人が立ち入ることで、放射線の影響を受けてしまったり、人の移動により放射性物質が区外に運ばれたりすることを極力防ぐ、というのがベラルーシの基本的なポリシーのようでした。レポーシェ環境保護区内では人の立ち入りを制限することで、ヨーロッパバイソンなどの絶滅危惧種の繁殖、調査が可能になったり、生態系への放射線の影響調査といったさまざまな調査の継続的实施が可能になっていたりしています。

その一方でこのポリシーは、その意図があるかどうかはもちろんわかりませんが、ベラルーシの人びとから事故の悲惨さ、とりわけ目に見えるそれを遠ざけてしまっているようにも思えました。ポレーシェ環境保護区内には事故以前には92の居住区（市町村）がありましたが、当然ながら現在は誰も居住していません。1986年に11の居住区が「埋葬」処理されましたが、まだ保護区内には当時の建築物が残されています。私たちのベラ

ルーシ国内移動をずっと担当してくれたバスの運転手さんは、今回はじめて保護区内に立ち入ったのですが、感想を「酷い。保護区の中の状況について、多くの国民は知らないと思う」と語ってくれました。そんなベラルーシではありますが、大祖国戦争（第2次世界大戦）に関する戦跡は数多く残されており、こちらはダークツーリズムが根付いています。ベラルーシでは新婚旅行の一環として戦跡をまわる人も多いそうです。



ブリピャチの観覧車

ウクライナ、ベラルーシ両国はチェルノブイリ原発事故に対して、それぞれポリシーを持っています。両国の違いは博物館の運営、サマシオール（Самосёлы：「勝手に動き回る人」＝自主的に強制移住区域に戻って住み着いた人々を指す）、やリクビダートル（Ликвидатор：「清掃人」＝事故処理作業に従事した人を指す）の人びとに対する社会保障制度、政府や公的機関への批判的態度などさまざまな側面で見ることができます。そうした違いを踏まえつつ、私たちは両国の取り組みに学び、自国の「問題」と向き合っていかななくてはならないと考えます。

【報告：講師 三谷高史】

平成28年度第3回就職ガイダンスを開催



卒業生の体験談に耳を傾ける学生

12月20日（火）、本学を会場に全学科3年生を対象とした就職ガイダンスが開催され、約250名の学生が参加しました。

ガイダンスではまず、来春からの就職が内定している野地大樹さん（体育学科4年－福島成蹊高校卒）、升川礼衣奈さん（体育学科4年－山形西高校出身）、三宅怜さん（体育学科4年－黒沢尻工業高校出身）の3名が、それぞれ就職活動を通じて感じたことや体験談などを話しました。

また、毎年この時期に行っているガイダンスには、本学の卒業生もお招きしており、今年は、渡部知里さん（新澤酒造、2016年体育学科卒）、佐藤涼さん（ボディワークホールディング

ス、2014年体育学科卒）、山崎優さん（こども体育研究所、2006年体育学科卒）、佐々木康平さん（グラン・スポール、2009年体育学科卒）の4名の方々が後輩のために駆け付け、学生が企業選びを進める中で大変参考になるお話をしていただきました。

ガイダンスに参加した学生たちは、「自分で調べるだけでは限界があるので、先輩たちの話を聞いてよかった。」「先輩方から聞いた話のおかげで、就職の選びかたや優先すべきことが再確認できた。」「講話を聴いて就職に対する意欲が増した。」などと感想を述べていました。

本学では今後、首都圏就職1日弾丸ツアーや合同業界起業セミナーの開催などを企画しており、学生の就職活動に対しても積極的なサポートを行っています。

亡き友を偲び 追悼誌「誠愛」を発刊

今から32年前の1984年（昭和59年）、本学在学中に急性骨髄性白血病のために21歳の若さで亡くなった松影誠二さん（第16期生）の33回忌を偲んだ追悼集「誠愛」がこのほど発刊されました。

今回、追悼誌の発刊の発起人の一人である三村英人さん（第16期生）に当時のことや追悼集の作成に至った経緯などのお話を伺う機会がありました。

三村さんと松影さんは当時、当時の学籍番号が近かったことが縁で、松影さんの闘病中はもちろん、お亡くなりになってから33年が経った今もご両親らとの「お付き合い」が続いているのだそうです。

これまで、折を見て同級生などとともに、松影さんの出身地である愛媛県宇和島市を訪れてはお墓参りやご両親にお会いになるなどされてきたとのことですが、今回、33回忌の節目ということで追悼集の作成を決断。同級生らが賛同して作成がスタートしました。

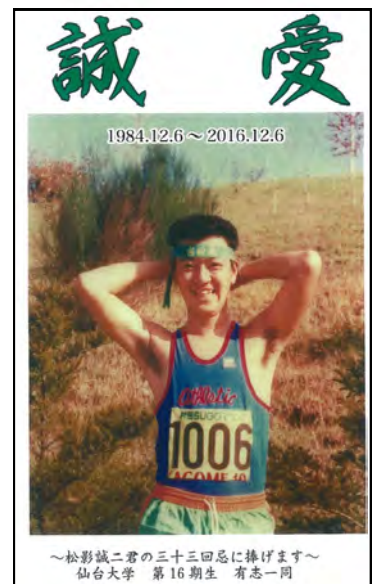
製作の途中には、「投げ出しそうなこともあった」という三村さんですが、何とか完成にこぎつけ、このほどの発刊に至りました。

発刊された追悼誌は12月2日の松影さんの33回忌のご法要に合せ、同級生など10名が宇和島に結集し、ご両親に手渡されました。宇和島にお住いの松影さんのご両親とは、今でも親子同然にお付き合いされているのだそうで、追悼誌を手にしたご両親は「こんなにも素晴らしい追悼集を作ってくれたのですね。」と一言だけ言うと目頭を熱くされ、大変お喜びになっていたそうです。

33回忌法要後にはご両親やご兄弟などと一緒に、時間を忘れて松影さんの尽きない思い出話をしながら亡き友を偲ばれたそうです。

三村さんは岩沼市出身で、仙台大学卒業後には会社経営に長く携わるも、東日本大震災を機に大崎市にあるNPO法人に勤務されています。慰霊碑の横にある記念樹「コウヤマキ」は松影さんのご家族からの寄贈によるもので、11月28日付の河北新報のほっとタイム「コウヤマキに集う 亡き友の志忘れない」で取り上げられました。

追悼誌は広報室にもございます。ご覧になりたい方は是非お声掛けください。



宇和島に結集した皆さん（右から3人目が三村さん）

「仙台大学第3回学術講演会」を開催



約160名の方々にお集まりいただきました

12月15日（木）仙台アエル21階会議室（TKPガーデンシティ仙台）において、「仙台大学第3回学術講演会」（主催：仙台大学、主管：仙台大学学術会運営委員会）が開催されました。「部活動を考える」を本講演会のテーマとし、「教育」の「負の側面」に対して警報を鳴らすと話題の教育社会学者・内田良先生（名古屋大学大学院准教授）を講師としてお招きしました。

前半は、講師の内田先生より「グレーゾーン『部活動』を見える化する～先生と子どもの安全・安心を求めて～」といったテーマで、約1時間ご講演をいただきました。内田先生

は、学校にひそむリスク（スポーツ事故、組体操事故、転落事故、「体罰」、自殺、2分の1成人式、教員の部活動負担など）の様々な事例やデータを収集・分析することで、隠れている実態を明らかにすることを研究テーマとされています。本講演会では特に「部活動」についてご講演いただきました。学校の「部活動」とはいわゆる「グレーゾーン」であり、法律の通用しない部分が多く見受けられるが、曖昧なグレーゾーンを明らかにする（＝「見える化」する）ことが重要であると述べられました。「部活動」は生徒の自主的、自発的な参加により行われる活動（教育課程外）であるにも関わらず、加入を義務付けている学校があることや顧問教員の負担が大きすぎる実態について、データに基づいたご説明がありました。また、十分なリスクマネジメントをしないまま引き起こされる事故の問題もあり、そうした部活動の現状を踏まえ、肥大化した部活動の縮小（＝「ゆとり部活動」）を提言されました。

後半には討論会として、本学の小濱明教授と宮西智久教授がコーディネーターを務め、フロアからの質問に対してそれぞれの立場から意見を述べ合い、議論を交わしました。

会場にいらっしゃった県内の中学校教員の方は、「現場に携わる者として、大変興味深いお話を聞くことができました。私も日々部活動に時間を費やしている教員の一人ですが、内田先生のおっしゃる通り、部活動は生徒の成長を1番リアルに感じ取ることができる瞬間です。私自身もやりがいを感じますし、中毒性があるという表現そのものだと思います。ですが、そうではない先生方もまわりには多数いらっしゃいますので、そうした現場の声に焦点を当てられた先生のお話に感動しました。」とおっしゃっていました。

参加者は、本学学生、教職員をはじめ、県内の教育関係者など約160名となり、大変充実した講演会となりました。

ご参加いただいた教職員の皆さま、誠にありがとうございました。

【報告：仙台大学学術会運営委員会】



講師の内田先生（中央）とともに

全日本スケルトン選手権でアベック優勝



小室希選手（左）と宮嶋選手

12月25日（日）に長野県長野市にあるボブスレー・リュージュパークで開催された「2016/2017全日本スケルトン選手権大会」で宮嶋克幸選手（体育学科3年 - 札幌丘珠高校出身）が初優勝、小室希選手（客員研究員 - 平成20年体育学科卒、平成22年度大学院修了）が8連覇9回目の優勝を果たしました。

宮嶋選手は「ソチオリンピックの代表選手に勝ち優勝できたことはうれしい。2018年の平昌五輪出場にもつながる1月からのワールドカップに恐れずチャレンジしたい。」とコメント。小室選手も「アキレス腱断裂という大きなアクシデントを乗り越えての優勝はうれしい。怪

我をしても自分を追い込む必要があることを実感した。ワールドカップでも実力をしっかり出した。」と話しました。

2人は1月からドイツなどヨーロッパ各地を転戦して行われるワールドカップへの参加が決まっており、平昌冬季五輪の出場も見据えながら、益々の活躍が期待されています。

女子サッカー部 須永愛海選手がINAC神戸レオネッサに加入内定

12月2日（日）に本学LC棟において、女子サッカー部所属の須永愛海（すなが・まなみー体育学科4年）がなでしこリーグ1部のINAC神戸レオネッサに加入が内定したことの記者会見が行われました。

須永愛海選手は会見で、「INAC神戸レオネッサという伝統ある強豪チームに入団することが決まり大変嬉しく、光栄に思っています。家族や監督、チームの仲間をはじめ、たくさんの方々に支えられて今日の日を迎えることができました。ありがたい思いを忘れず日々成長し、チームに貢献できる選手になりたいです。」と語りました。

また、仙台大学で学んだことについて須永選手は「JFAアカデミー福島を離れば練習時間が減り、選手としてはマイナスになるのではないかと」言う声もありましたが自分はサッカーを競技面だけではなく、学問的に学んでみたかったので仙台大学を選んだことは間違いではなかったと、今、心から感謝しています。JFAアカデミーにいた時は周囲の方がお膳立てをなさまざまなお世話をしてくれたのに対し、仙台大学ではそれらのサポートなしに1人で考え行動しなければならない環境になりました。結果的に自立心が芽生え、自分で考えプレイする選手になれたと思います。また、私は体育学科のトレーナーコースを選択したのですが良いコンディションの保ち方、怪我の予防、怪我をした時の正しい処置の仕方など、選手として自分の体をベストな状態に保つ知識を得られアスリートにとって大変重要な4年間でした」と述べました。

阿部芳吉学長は「女子サッカー部が創部され10年目にしてはじめての1部リーグ選手の誕生は大変うれしい。2020年の東京オリンピックの選手としても活躍してくれることを願う共に、ぜひ須永選手に続く選手を輩出したい。」と須永選手及び学生たちの今後の活躍に期待を寄せました。



INAC神戸レオネッサに加入が内定した須永選手（左から2人目）

Monthly Report

学校法人朴沢学園仙台大学Presents 仙台89ERSホームゲームを開催



試合終了後に仙台89ERSの選手と記念撮影

1月27日（金）にカメイアリーナ（仙台市体育館）を会場に、「学校法人朴沢学園仙台大学Presents 仙台89ERSホームゲーム」仙台89ERS vs 京都ハンナリーズの試合が開催されました。約1500名の観客とともに、本学の学生や国際交流提携校である韓国・龍仁大学からの留学生など関係者約60名も佐藤文哉選手（平成23年体育学科卒、明成高校 - 仙台大学）や石川海斗選手（明成高校0B）の応援タオルを掲げながら白熱した試合を観戦しました。

当日は本学の冠ゲームということもあり、ゲームは佐藤久夫教授によるTip Offセレモニーによってスタートしました。オフィシャルタイムアウトでは本学6番目の学科として来年度新たに開設される「子ども運動教育学科」を仙台89ERSチアの鈴木保之香さん（平成23年体育学科卒）と体育学科1年の羽川佳苗さんがPRしてくれました。また、ハーフタイムには体育学科スポーツマネジメントコースの学生が考案した「世代対抗シュートゲーム」を一般の方々に参加していただき行われました。さらに、会場内に設置された本学のブースでは、ピンポンバスケットが行われるなど来場した子供から大人まで世代を問わず多くの観客の皆さんが楽しんでいる様子でした。

試合の最後には龍仁大学のジョン ヨンスさん（メディアデザイン学科4年）とシン ジェウンさん（化学学科4年）により、MIP賞（Most Impressive Player）を受賞した仙台89ERSの片岡大晴選手へ本学からの記念品である「ライフレコーダー」の贈呈も行われました。

そのほか、会場ではスポーツマネジメントコースの学生が一般の観客の皆様方を対象としたアンケート調査も実施するなど、数多くの学生が様々な形でゲームに携わることができました。

今後も仙台89ERSとの連携をさらに深め、スポーツ栄養やスポーツ情報分析、スポーツコーチングなど多岐にわたる分野で、プロの現場での実践的な学習や人材育成、チームや選手の補助の機会を提供して参ります。

〈目 次〉

学校法人朴沢学園仙台大学 Presents 仙台89ERSホームゲームを開催	1
「2016オリンピックを学ぶ」集 中講義を開催	2
八木かなえ選手による ウェイトリフティング教室	3
子ども運動教育学科 今年4月にいよいよ誕生	4
INAC神戸に新加入の須永選手 ファン感謝祭に初参加	5
学生の活躍 ・女子バスケットボール部 ・硬式テニス部	6

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp



(左上から時計回りに) Tip offモニターでボールを手渡す佐藤久夫教授、新学科を紹介する89ERSチアの羽川さん(左)と鈴木さん、ハーフタイムイベントの説明をする鈴木さん(左)、試合を観戦する留学生、MIP賞を授与するジョンさん(中央)とシンさん、本学のブースでピンポンバスケットを体験する子どもたち

「2016オリンピックを学ぶ」集中講義を開催

「2016オリンピックを学ぶ」集中講義5回シリーズ(専門教養演習・公開授業)はJSCスポーツ事業開発部長・勝田隆氏の講義をもって最終回を迎えました。この回のテーマは「TOKYO2020以降を見通したスポーツの姿」リオオリンピック・パラリンピック総括とスポーツ庁の鈴木長官が28年10月に示した鈴木プラン〜2020以降を見通した強力で 持続可能な支援体制構築〜 を題材に講義とディスカッションが行われました。

当日はあいにく強風のため、東北本線が3時間以上にわたって運休となりましたが、参加した学生は熱心に質疑応答形式の講義を聴き、以降のディスカッションに臨みました。題材の一つ目は、リオオリンピックに際して各国が現地オリンピック村近くに設置した選手支援のための『ハイパフォーマンスセンター』でした。

近年のスポーツはフィジカルの優劣、個人の技術だけでメダルを獲得することは極めて難しく、国を挙げての支援力が不可欠となっています。このためリオ・オリンピックには先進各国が現地に 国の科学技術の粋を集めた「ハイパフォーマンスセンター」を設置して、医科学分野を初め、IT分野、工業技術分野、更には固有の文化まで動員し競技者への支援を行っていたことが報告されました。各国が設置する「ハイパフォーマンスセンター」の存在は、世界の大きな大会を重ねる毎に高度化され、メダル獲得への貢献が認められる一方「設置できる国・出来ない国」の格差を生むこととなっています。イコールコンディションでの競技実施が求められる中、どこまで競技直前までの介入が許されるかIOCも注目し始めていることが語られました。

二つ目はパラリンピック。パラリンピック競技は、障害を克服するために使用する用具の性能が成績に大きく影響します。用具開発に於ける科学技術の優劣がメダル獲得に影響する状況をどの様に考えるか。また競技への参加は障害の程度によってクラス分けされているのですが、どの様に公平に能力差の申し立てを見分け判定するか(虚偽もある)。障害を持つ人の能力を発見しトップ選手に育てるタレント発掘もパラリンピックの発展には重要との指摘がなされました。

スポーツ界はTOKYO2020を前に様々な問題に直面しています。国の持つ資金力、科学力の不公平、意図的な不正、賭博汚染などスポーツ界の状況にIOCバハ会長も危惧を表しています。

こうした中でオリパラ2020を迎えるからこそ、日本からスポーツにおける「真摯さ」「誠実さ」「公平さ」すなわちINTEGRITY・スポーツの価値を発信することが2020以降の日本のスポーツの姿を考える際には重要と語り掛け最終講義を終えました。TOKYO2020まで3年半、全学的なオリンピックへの理解、スポーツの価値の理解に期待したいと思います。

【報告：教授 山内 亨】



勝田隆氏による講義で最終回を迎えた

八木かなえ選手によるウェイトリフティング教室を開催



子どもたちにウェイトリフティングを指導する八木選手

1月28日（土）、本学第3体育館トレーニングセンターでウェイトリフティング教室が開催されました。当教室は柴田町まち・ひと・しごと創生総合戦略に基づく地方創生事業の一つで柴田町から本学が受託した「柴田町トップアスリート育成事業」の活動の一環であり、町内小中学生の体力向上や将来のトップアスリートの育成を目指すことを目的に、①総合型スポーツクラブの支援、②小中学生の体力測定と運動能力向上、③放課後の学習指導、④トップアスリートによる指導、⑤各種スポーツ教室の開催等を行っております。今回は④の「トップアスリートによる指導」のテーマとして、リオデジャネイロオリンピック ウェイトリフティング競技女子53kg級6位の八木かなえさんを講師に迎え、ウェイトリフティング教室を行いました。午前中は小学生を対象に、午後は中高生を対象に教室を開催、合わせて90人の子ども達が

参加し、熱心に八木かなえさんの指導に耳を傾けていました。オープニングでは柴田町長の滝口様、同教育長の船迫様からご挨拶を頂き、体育大学があり、スポーツ振興に力を入れている町でもあることから、是非このようなスポーツ教室に参加し将来トップアスリートを目指してもらいたいと激励がありました。午前の小学生の部では、殆どの子ども達がウェイトリフティングは初めての体験でしたが、やってみると「持ち上げられた時がすごく達成感があって楽しい！！」との声がたくさん聞かれました。午後の部はほぼ全員が経験者で、八木さんの指導もより専門的な内容となり、参加者は世界レベルの選手の指導に真剣に聞き入っていました。最後は阿部学長からの激励の挨拶に続き、八木かなえさんのサイン会、質疑応答コーナー、子ども達への激励の言葉も頂き、子ども達は元気と勇気と夢をもらって帰宅の途に着きました。

【報告：スポーツ健康科学研究実践機構 近江康宏】



第13回DAN DAN DANCE & SPORTSを開催

1月28日（土）に大河原町にある仙南芸術文化センター（えずこホール）を会場に、第13回DAN DAN DANCE & SPORTSが開催されました。

当日は本学の学生のみならず、宮城県や福島県内の高校などから23の団体が出場し、台湾の台東からも「950 Homies」の3名がゲストとして出演し会場を盛り上げました。

昨年度よりこのイベントでは特定のテーマに沿って発表していただくことになっており、今年のテーマは「色」でした。参加者はそれぞれの「色」をそれぞれの発表の中でステージいっぱいに表現していました。

なお、このイベントは舞台を裏で支えるスタッフも本学の学生が担っており、文字通り「手作り」のイベントとして地域に定着しています。



子ども運動教育学科 今年4月にいよいよ誕生

仙台大学が創立50周年を迎える節目の年、新学科「子ども運動教育学科」が誕生します。いよいよ、その産声を聞くときが近づいてきました。4月を目の前にして、全学の教職員が一丸となって、広報活動や学生募集活動、学修環境の最終調整といった準備に力を注いでいるところです。

東北には数多の保育者養成校が存在します。「その中に今、あえて養成校を設置する必要性はどこにあるのか？」高校訪問時に、多くの進路担当の先生方からいただく質問です。このような問いへの返答として、私たちは次のような新学科のミッションをお伝えしています。「子ども運動教育学科では、今までの保育者養成校にはない、全く新しい視点で保育者を養成していきます。運動遊びを柱として、子どもたちの発育発達の流れを担える人材を育成します。これこそが、今、社会から求められている保育者であり、こんなユニークな視点で保育者を養成する学科は他には見られません。」高校の先生方は、深い理解を示し、生徒の皆さんへの周知を約束してくださいます。この情報が高校生の元へ届くには時間を要するかもしれませんが、必ず受け取ってもらえると信じています。今後も引き続き、“スポーツが好き！子どもが大好き！！”という高校生が一人でも多く入学を志願することを願い、学生募集活動に励みます。

地域や社会、保育現場から、誕生を祝福される学科になることを、心から願います。

【子ども運動教育学科 柴田千賀子】



インフルエンザ警報発令中

1月22日までの1週間で、インフルエンザの患者数は全国で推計161万人と急増しています。仙台大学でもここに来て罹患学生数が急増し、期末試験を休む学生も増加しています。インフルエンザ感染の予防のために健康管理センターでは、インフルエンザ感染予防として下記の内容を実施しています。

- ①各棟入り口に手指消毒薬の設置
- ②感染予防(手洗い、うがい、マスク、人混みを避ける)のポスター掲示
- ③インフルエンザ症状についてのポスター掲示
- ④教職員に対して、研究室のこまめな換気や体調不良学生へ病院受診を勧める等の依頼
- ⑤部活動やクラスで流行している場合は、監督や学科主任、担任への情報提供

また、感染拡大を防ぐために診断日から5日間かつ解熱後2日間を出席停止とし、登校後に診断書を発行して試験や補講などを受けられるように対応しています。

【報告：健康管理センター長 橋本実】



大学院後期入学試験 願書受付中

1月23日（月）より、大学院後期入学試験の願書受付を開始しています。大学院活性化の為に、学部から多数の入学を期待していますので、各研究室や部活動において、学部学生に周知していただきたいと思います。

今年度最後の入試である後期試験の願書受付は2月3日（金）までとなっています。

ご質問等がありましたら、大学院事務室（0224-55-5706）までご連絡下さい。



INAC神戸に新加入の須永愛海選手 ファン感謝祭に初参加

1月29日（日）、神戸レディースフットボールセンター（兵庫県神戸市）で「INAC神戸レオネッサ ファン感謝祭2017」が開催され、本学から初めてなでしこ1部チームに加入した須永愛海選手（体育学科4年）が参加しました。この日のファン感謝祭には、阿部芳吉学長も出席し、須永選手を激励していました。

ファン感謝祭は大きく4つのプログラムに分かれており、ミニゲーム・サイン会・チェキ撮影会・グッズ&フードコートの各イベントで選手とファンが交流しました。

須永選手はミニゲームに出場して子どもたちとともにプレーし、自身のパスからゴールを決めた男の子とハイタッチをするなど、終始笑顔でファンと触れ合っていました。会場内の必勝祈願神社には、選手やスタッフ、ファンが2017シーズンの目標を記した絵馬が奉納されており、須永選手は「リーグ優勝」「笑顔溢れる楽しい1年になりますように！」と、INAC神戸の一員として2つの目標を掲げていました。また、サイン会では、子どもから大人まで多くのファンと言葉を交わしながら色紙やポスターカレンダーにサインし、写真撮影にも応じていました。

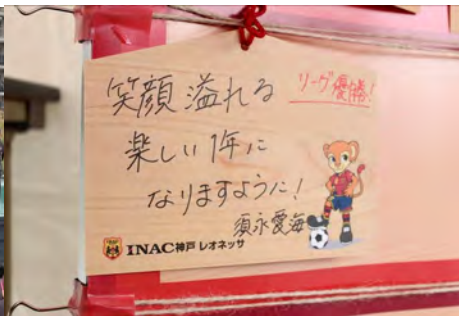
イベントの間には須永選手に話を聞くことができ、「チームに早く慣れて、1試合でも多く試合に出場できるようにしたい」と力強く語ってくれました。また、「仙台大学の4年間を通して多くのことを学び、それが今に活かしている」と、仙台大学の教職員および学生に対する感謝の気持ちも語ってくれました。

須永選手が背番号「19」のユニフォームを着て、公式戦でプレーし活躍する日を楽しみにしています。ファン感謝祭の様子は、第3体育館東側の大型スクリーンで放映しておりますのでご覧ください。

【報告：新助手 溝上拓志】



オープニングセレモニー



須永選手の今年の目標



ミニゲームで子供たちと楽しむ須永選手（8）

柴田町社会福祉協議会より表彰されました

平成29年1月31日、槻木生涯学習センターで開催された「第15回社会福祉推進大会」で本学が表彰を受けました。

社会福祉事業のために多額の金品を寄付したという事で吉田龍哉事務局長が代表して感謝状を受領してまいりました。

仙台大学では学内に設置してある自動販売機から売上の一部を柴田町社会福祉協議会に寄付しております。1本売上げる度に1円を寄付しており、塵も積もれば山となる、多額の寄付となったようです。

【報告：営繕管理室 遠藤近志】



女子バスケットボール部 東北大学バスケ新人大会 8年ぶり7回目の優勝

平成28年12月4日と17日、18日に『第40回東北大学バスケットボール新人大会』が開催され、女子バスケットボール部が8年ぶり7回目の優勝を果たしました。この大会は、東北大学バスケットボール連盟に加盟している大学の1・2年生のみが出場できる大会です。そのため、選手構成も普段とは少し違い未知数なところもありましたが、一人ひとりが勝負どころで頑張ってくれ、更に上級生の応援もあり、チーム一丸で勝ち取った勝利と言えます。

個人賞として、最優秀選手に2年の工藤千穂、優秀選手に同じく2年の佐藤楓と金成明日香、新人王に1年の柴田紅葉が選ばれ、嬉しそうにメダルをもらっていました。工藤は、『みんなの支えがあってもらえた賞なので、感謝しています。これからも、これを糧に更にな強くなりたいです。』とコメントしています。

個人賞に選ばれた選手だけではなく、チーム全体の自信になったと思います。しかし、あくまでも新人戦であり、本番はこれからです。今回の力を継続的に発揮できるように頑張りたいと思いますので、今後も応援よろしくお願いいたします。

【報告：女子バスケットボール部 コーチ 菅野恵子】



8年ぶりの優勝を喜ぶ部員たち

硬式テニス部 東北選抜学生テニス選手権 男子ダブルス準優勝



男子ダブルスで準優勝した竹内健人選手

12月17日（土）～12月19日（月）の3日間、シェルコム仙台で開催された「第46回東北学生選抜室内テニス選手権」において男子ダブルス準優勝（3年竹内健人）、3位（4年高村直人・3年照井悠斗）となりました。女子ダブルスにおいても3位（2年齋藤里菜・1年福士真由）など健闘しました。

東北学生選抜室内テニス選手権は東北学生テニスランキングにおいて上位数名による出場枠の限られた大会で、今回、男子ダブルス準優勝した竹内健人主将（運動栄養学科3年一青森西高）は、「自己最高の結果を出すことができました。これからもチームの主将として、ベストを尽くしたい。目標とする東北大会優勝、インカレ出場の実現を目指して、練習に取り組んでいきます」と話していました。

【報告：硬式テニス部 副部長 佐藤周平】

活躍する学生のポストカードが完成

このたび、新しい「仙台大学オリジナルポストカード」が完成しました。部活動で活躍する学生たちを全国へPRすることを目的に、阿部学長が提案してくださり作成しているもので、今回はウェイトリフティング部の渡部詩乃さん(体育学科2年)、漕艇部、女子サッカー部の須永愛海さん(体育学科4年)、B・L・S (ボブスレー・リュージュ・スケルトン)部の宮嶋克幸さん(体育学科3年)の4種を作成しました。

ポストカードは前回に引き続き柴田町内の郵便局内にある仙台大学PRコーナー等にも配置し活用していただきます。

教職員の皆様も御礼状や挨拶状に是非ご利用ください。



Monthly Report

2020東京オリンピック大会事前合宿決定 誘致活動の成果が結実



ベラルーシからのベラルーシ共和国体操協会からの親書を手にする山田白石市長（左から2人目）と滝口柴田町長（右）

2020年東京オリンピックに向けたベラルーシ共和国新体操ナショナルチーム事前合宿誘致に関する記者会見が2月2日（木）、仙台大学LC棟を会場に開催されました。

会見では「白石市・柴田町・仙台大学 東京オリ・パラ事前合宿招致推進協議会」の会長である朴澤泰治理事長・学事顧問から、協議会の打診に対するベラルーシ共和国新体操ナショナルチームからの回答書に基づき、事前強化合宿を白石市「ホワイトキューブ」をメインとして、また、本学のスポーツ科学諸施設をサブとして行われることが決定したと報告されました。

今回の決定は平成28年3月に協議会が発足して以降、新体操をはじめとするオリンピック・パラリンピックの数種目の事前合宿誘致の企画を白石市および柴田町とともに積極的に展開してきたなかでの初めての決定となります。

会見で朴澤泰治理事長・学事顧問は「ベラルーシ共和国の新体操チームが事前合宿地としてこの地を選んでくれた。素晴らしい成績につながるよう協力していきたい。」と話しました。

2020東京オリンピック大会・パラリンピック大会の事前合宿誘致は地方創生という国家事業のなかでも中核を担うものであり、今後、国からのホストタウン認定を経て、白石市および柴田町が展開する各種の地方振興施策に、仙台大学は社会貢献の一環として加担するとともに、世界のトップアスリートと接する場面を通じた専攻領域のスポーツ科学を実践するという本学の学生にとって絶好の機会を得たことになります。

〈目 次〉

2020東京オリンピック大会 ベラルーシ共和国新体操チーム の事前合宿が決定	1
学都仙台コンソーシアム 10周年記念式典	2
第12回仙台大学 健康福祉研究会開催	3
阿部学長らが 横浜DeNA熊原投手を激励	4
子ども運動教育学科 ～スポーツが好き・子どもが好き～	5
国際交流報告 ハワイ大学ATビギナー研修	6
「中高大連携会議」を開催	7

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp

「学都仙台コンソーシアム」設立10周年記念式典が開催

～学都仙台コンソーシアムの今日までそして明日から～

2月24日（金）仙台国際ホテルにおいて「学都仙台コンソーシアム」設立10周年記念式典が開催され、「大学コンソーシアム石川」の会長による基調講演や、本学の阿部芳吉学長を含むパネリスト5名のディスカッションなど、これまでの活動を振り返るとともに 今後の学都仙台コンソーシアムの展望について、会場に集まった約120名の関係者により熱心な意見交換がなされました。

学都仙台コンソーシアムは、仙台学長会議を母体として2006年9月に設立され、大学等の高等教育機関と市民・企業・行政が互恵的な関係を結び、ともに高め合い、総合に発展の機会を創造していく「知が連携する学都仙台」をめざすこと及び、同高等教育機関の知的資源が生かされる都市の個性を内外にアピールし、学都の持続的発展を可能とするさらなる集積を呼ぶ「知の創造都市仙台」をめざすことを理念としています。

現在、宮城県内にある大学や専門学校21校、仙台観光国際協会、仙台商工会議所、東北多文化アカデミー、みやぎ工業会、理化学研究所、宮城県、仙台市といった公的機関など7団体を合わせると全部で28もの団体が加盟しています。主な活動としては、大学間における単位互換の推進、サテライトキャンパスの運営に関する「戦略的大学連携支援事業」、地域の復興に貢献できる人材育成の養成機関としての復興大学を開設する「復興大学学事業実施」など多岐にわたり、人材育成・開かれた高等教育に努めて参りました。

最初に文部科学省高等教育局大学振興課長である角田喜彦氏より「このたびは学都仙台コンソーシアム10周年記念、誠におめでとうございます。仙台市出身の自分が、東日本大震災で大変な被害を受けた故郷を目のあたりにした時は、胸をえぐられるような気持ちでした。しかしながら苦難の中、宮城県の大学・教育機関が連携・集結し立派に復興をとげていることを大変心強く感じています。地方創生が叫ばれる中で、行政も人材育

成・高等教育のさらなる充実に力を尽くして参ります」と挨拶がありました。

金沢大学学長で「大学コンソーシアム石川」の会長でもある山崎光悦氏による石川県におけるコンソーシアムの事例紹介がなされた後、仙台大学・阿部芳吉学長、石巻専修大学・坂田隆教授、みやぎ工業会・八島和彦理事、仙台市文化観光局理事・白川由利枝氏、東京学芸大学大学院生・及川いずみ氏の5名が参加して「学都仙台コンソーシアムの今日までそして明日から」をテーマにパネルディスカッションへと移りました。

阿部芳吉学長は、これからの展望として簡潔に4つの事柄を述べました。

- ①東日本大震災から6年がたった今、震災後はどうのような人材が必要とされ育成しようとしているのか？ 学都仙台コンソーシアムで確認し、対応していくこと。
- ②宮城県が支援してくれる3000万円はありがたい。市民の税金として大切にに使わせていただくこと。
- ③企業にもバックアップしていただくのであれば、何をしていきたいのか？明確なプランを構築すること。
- ④マスコミ関係者に学都仙台コンソーシアムの活動を理解し、世間一般に広めていただくために、もっとPRが必要であること。

また阿部学長は具体的な取り組みとして、仙台大学が実施している地域貢献の実例を紹介されました。「柴田町には小学校・中学校が9校あり、仙台大学の学生達を全ての学校にボランティア要員として派遣しています。

例えば柴田町のみならず広範囲に本学の学生をおくり、2020東京オリンピック・パラリンピックを目指す子ども達の育成をサポートするなど、各大学の特性を活かしアイデアを持ち寄ってそれぞれの地域へ貢献できるよう、学都仙台コンソーシアムの11年目に向けて、これまでの資料の分析を行うとともに対策を練ることが大切です」と話されました。

これからも国公立大学・私学団体や文部科学省などが協力し合い、開かれた情報公開を推進しながら、学都仙台コンソーシアムを軸になお一層、大学間の連携強化をはかることを確認しあう場となりました。



パネルディスカッションの様子

第12回仙台大学健康福祉研究会開催

2月26日（日）13時～15時30分、第12回仙台大学・健康福祉研究会が仙台ガーデンパレスで開催されました。健康福祉研究会は健康・福祉に関連した話題や取り組みを紹介し、在校生や卒業生、教員や教育研究者、福祉領域の職員と交流を深める会として第12回を迎え、今回は「介護福祉教育と福祉レクリエーション」というテーマで催し、明成高校、介護施設職員、卒業生、在学生など約250名が参加しました。

特別講演ではマーレー寛子氏（滋賀県 社会福祉法人小羊会 高齢者部門統括施設長：公益財団法人日本レクリエーション協会理事）より、「介護福祉におけるレクリエーションの位置づけ」と題して、海外での活動を含めたこれまでの取り組みや、高齢者福祉の中でのレクリエーションの活動について、動画を交え、『レクリエーションが福祉を救う』『楽しむことが心の健康につながる』と力強いご講演を頂きました。本学からは大山さく子健康福祉学科長、後藤満枝准教授が介護福祉養成の現状と取り組み、さらに志願者確保に向けた広報活動を紹介し、介護の魅力づくりや仙台大学から発信する『介護福祉士の新しいカタチ』を提案しました。最後に、小山亮二氏（公益財団法人日本レクリエーション協会 プロデューサー、H12年健康福祉学科卒）より実技セミナー「レクリエーションでコミュニケーション力アップ」と題し、様々な対人関係スキルや認知症予防に有効なレクリエーションについて実技を交えて紹介があり、参加者も笑いの中、楽しく過ごし会場も和やかな雰囲気でした。

その後、同会場で懇親会が催され、阿部芳吉学長からの挨拶、1年生からダンスの披露、健康福祉学科 第1期生～18期生の卒業生から挨拶・近況報告を含め、参加者が楽しく懇談し、交流を深めました。

【報告：健康福祉学科 助教 福田 伸雄】



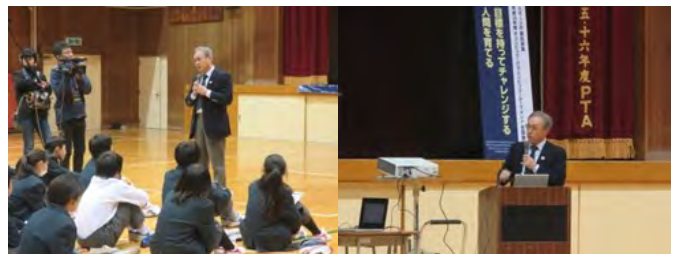
マーレー寛子氏による特別講演



懇親会終了後の記念写真

仲野副学長が大阪の中学生に「オリンピック・パラリンピック教室」

2020東京オリンピック・パラリンピック開催に向け、スポーツ庁のオリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業が全国各地で展開されています。その1つに「オリンピック・パラリンピック教育」があります。これは、次世代の若者を対象に、オリ・パラそのものや共生社会などへの正しい理解を促進しようとする試みです。



中学生に向けて講演する仲野副学長

事業展開を請け負う1つに㈱ジュピターテレコム

(J:COM)、そこからの依頼を受け、昨年12月と今年の1月の二度にわたり、大阪の中学生（1年生対象）に対しオリパラ教育特別講義「オリンピック・パラリンピックに続くスペシャルオリンピックスを学ぼう！」というテーマでお話をさせていただきました。その場面は、写真の通り撮影が入り、どちらも地元のケーブルテレビで紹介されました。

1回目は八尾市の中学校で138名に、2回目は高槻市の中学校で197名にスポーツの価値や効果の再認識を通じ、国際的な視野を持って世界の平和に向けて貢献できる人材育成のきっかけを与えると共に、オリパラへの興味関心の醸成をねらいとしてお話をさせていただきました。1つの授業として実施されたので、時間は50分間でした。大阪の中学生の話に対する食いつきの強さと目の輝きに改めて感動しながら、与えられた時間を最大限使って熱く話をしました。後半は中学生たちに、「特に印象に残ったこと・大事だと思ったこと」、さらに「なぜ印象に残った理由・大事だと思った理由」について男女1名を指名して感想を含めて全員の前で発表してもらいましたが、素晴らしい発表をしてくれました。特に2回目の中学校は体育・スポーツに力を入れているモデル校だそうで、先生方も実に熱心に受講されました。女性の校長先生と終了後お話をさせていただいたところ、何と私が卒業した大学の1つ年上の先輩だったことという不思議な縁もありました。

私が生まれた大阪での特別講義は新鮮で学ぶべきことも多々あり、貴重な機会を与えていただいたことに感謝しています。

【報告：副学長・体育学科長 教授 仲野隆士】

今季交流戦で地元ファンに勇姿を!! ～沖縄訪問の阿部学長 熊原投手を激励～

阿部芳吉学長は2月15日～17日、沖縄県宜野湾市と広島県呉市を訪問し、それぞれ春季キャンプ中のプロ野球横浜DeNA・熊原健人投手（平成27年度卒）と、本学硬式野球部員を激励しました。

阿部学長の両キャンプ地訪問は熊原投手が本学から初めてプロ野球界入りした昨年に続き2度目。今回も八巻芳信硬式野球部OB会長と高橋義夫硬式野球部長が同行しました。一行が最初の訪問地・沖縄に入ったのは午後3時過ぎのため、宜野湾市でキャンプ中の熊原投手は既にその日の練習を終えており、再会は同投手が宿泊するホテルで実現しました。

熊原投手は面談の中で、阿部学長の激励訪問に謝意を表した後、①昨年11～12月に台湾で開かれた「2016アジアウインターベースボール（AWB）」にNPB（日本野球機構）イースタン選抜の一員として参加したものの、現地で肺炎のため3日間入院し、約10日間の滞在で帰国せざるを得なくなった②入院治療で体重が7kg減ってしまった一などのアクシデントに見舞われたことを披露。「今は体重も5kgほど回復し、最も動きやすくなっています」「投球フォームを一部改良した結果、計測数値には表れないものの、球速アップを実感しています」と話し、キャンプ初参加の昨年とは違って「練習メニューや内容をよく理解して取り組んでいます」と余裕のある表情を見せていました。

これに対して阿部学長らは「今季は1勝でも多く1軍で実績を残し、6月に仙台で行われるセ・パ交流戦の対東北楽天との試合で勇姿を披露してほしい」「プロを目指す後輩たちの勇気づけとなる活躍を」などと熊原投手の奮闘を促しました。また、プロ2年目の熊原投手について阿部学長は「ひと回り遅くなった」評価しました。

【報告：硬式野球部 部長 教授 高橋義夫】



熊原健人投手を激励する阿部芳吉学長（沖縄県宜野湾市内のホテル）

秋・春連覇で大学創立50周年を飾ろう

沖縄に続く訪問キャンプ地の広島県呉市には2月16日夜に入りました。同市二河球場では本学硬式野球部が同13日から2週間の日程で春季キャンプを行っており、森本吉謙監督と坪井俊樹、田上紳二郎両コーチのほか、入学予定の新人10人を含む約50人が参加して、4月上旬に開幕する仙台六大学野球春季リーグでの優勝目指して調整に励んでいます。

阿部学長は16日夜、東京から激励に駆け付けた硬式野球部OBで(株)こども体育研究所の遠藤活美社長らとともに、森本監督、坪井、田上両コーチの労をねぎらい、翌17日には降雨のため変更した屋内練習場を訪れて全部員を励ました後、ブルペンにも足を運んで投手陣の一球一球に熱い視線を向けました。

部員への激励の中で阿部学長は、沖縄で熊原投手から聞いたWBC（ワールド・ベースボール・クラシック）日本代表の主砲・筒香嘉智外野手（横浜DeNA）の「礼儀正しく、偉ぶらず、努力を惜しまない」姿を紹介。野球界のスタープレイヤーを手本に腕を磨き、昨年秋に続いて今春季リーグを制覇し、2年ぶりの全本選手権出場を果たして本学創立50周年を飾ってほしいとエールを送りました。



屋内練習場のブルペンで投球練習を熱心に見る阿部学長（広島県呉市内）

【報告：硬式野球部 部長 教授 高橋義夫】

「子ども運動教育学科」～スポーツが好き・子どもが大好き～

ふきのとうも顔を出し始め、春の足音が少しずつ大きく聞こえるようになりました。新学科「子ども運動教育学科」の誕生まであとわずか。新入生を迎える準備も着実に進んでいます。新学科の4年間の流れを大きく捉えると、1年次は「子ども運動教育の基礎を修得すること」2年次は「専門教育を学び深めること」3年次は「実習を通して実践力を養うこと」4年次は「4年間の学びの集大成をすること」となります。スポーツが好き・子どもが大好きな学生が、目を輝かせながらキャンパスで学習している姿が目に見えます。

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の「教育及び保育の基本」や「幼稚園教育要領」の「幼稚園教育の基本」では、「・・・自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として・・・」と遊びの重要性が指摘され、同様に「保育所保育指針」の「第2章 子どもの発達」でも、「・・・子どもと生活や遊びを共にする中で、一人一人の子どもの心身の状態を把握しながら、その発達の援助を行うことが必要である。」と述べられています。

12月中旬の肌寒い日、授業の一環として男女10名ほどの学生と共に町内の小学校の学習参観を実施しました。業間休みになると多くの子ども達が昇降口から外に飛び出して行きました。ふと校庭に目をやると、スーツ姿の学生が、子ども達とサッカーや野球、ドッジボール、鬼ごっこなどをしていて、あちらこちらから歓声が聞こえてきます。参観後の学生の振り返りレポートには「休み時間自分も一緒になって遊びました。子ども達は元気が良くついていくのがやっとでした。」「子ども達は授業も遊びも何をするのも全力です。」と遊びを通して見つけた発見を書いていました。自発的に子ども達と触れあう仙台大生の姿に、新学科の学生がオーバーラップした1日でした。

プレイルームで遊ぶ子ども達

【子ども運動教育学科 針生 弘】

新学科入試で同窓会沖縄支部に協力要請



仙台大学同窓会沖縄支部の会員と記念撮影する阿部学長ら（宜野湾市内）

沖縄訪問した阿部学長は2月15日、熊原投手を激励した後、宜野湾市内で本学同窓会沖縄支部の有志との懇親会に臨み、今年4月に6番目の学科として開設される「子ども運動教育学科」の学生募集について協力を求めました。

懇親会には、真玉橋克彦・同窓会沖縄支部長をはじめ、硬式野球部を中心としたOBが出席。阿部学長が持参した紹介資料を基に同学科の入試応募状況などを説明し、「一人でも多くの新入生確保にぜひご協力を」と要請したのに対し、支部側からは教職関係に就くOBを中心に掘り起こしたいとの回答をいただきました。

懇親会はこの後、泡盛を飲みながら、50周年を迎えた本学の歴史やそれぞれの在学時のエピソード、さらに今季の熊原投手に期待する話などで大いに盛り上がりしました。

【報告：教授 高橋義夫】

ハワイ大学ATビギナー研修（通算24回目）に10名の学生が参加

2月12日から20日にかけてハワイ大学アスレティックトレーニング研修ビギナーコースが実施されました。今回の研修にはアスレティックトレーナー部に所属する学生を中心にNATA-ATCの資格取得に興味のある計10名及び針生弘教授（引率責任者）、山口貴久准教授らの教職員が参加しました。

研修では、ハワイ大学のアスレティックトレーニング関連の授業に参加し、ビーチバレーやバスケットボールチームでのアスレティックトレーナーの仕事を見学させていただきました。学生は英語出て進められる授業の内容をなかなか理解できずもどかしい様子でしたが、マッサージの実技などで現地の学生と一緒に体を動かしながら学ぶ機会を得られました。ハワイ大学のクリニカルコーディネーターをされている大庭有希也氏からは”Athletic Trainer in USA”と題した講義で、ご自身のメジャーリーグやマイナーリーグの野球チームでのアスレティックトレーナーとして働いた経験をお話いただきました。また、大学以外でも、本研修のコーディネーターをされている金岡友樹氏が務めるマッキンリー高校でアスレティックトレーナールームや新しくできた陸上競技場の見学、スパインボードの使い方を学ぶワークショップも行われました。それぞれの場所でアスレティックトレーナーのリアルな姿を目の当たりにし学生にとって大きな刺激となりました。

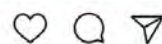
参加した学生は海外の経験が少なく、英語を実際に使うことも大きな学びとなりました。出国前は英語でコミュニケーションをとれるか不安な様子でしたが、研修プログラムの一環で行われる英会話の授業や、ハワイ大学の学生との交流に加え、自由時間を使って街に出て買い物をする、道を尋ねるなどの日常の会話も積極的にこなし、日を追うごとに自信をつけているようでした。研修の最後には学生一人一人が英語でスピーチをする機会があり、その中で会場の笑いを誘うなど積極的に英語を使う姿が見られた。大学でアスレティックトレーニングを学ぶためにより高度な英語力の必要性を実感すると同時に、現在持っている英語力でコミュニケーションをとることができた経験の両方を今後の活動につなげていてもらいたいと思います。

本学とハワイ大学はアスレティックトレーニングの研修を通じた交流を14年間続けてきており、アドバンスコースと併せて今回が24回の開催でした。バスケットボールの試合を観戦した際には地元テレビ局によってSNSやテレビ中継で仙台大学の学生が紹介されるなど温かく迎えていただきました。昨年は初めてハワイ大学の学生を仙台大学に招くなど年々新たな試みがなされています。仙台大学とハワイ大学の関係を今後もさらに発展させていきたいと考えています。

【報告：新助手 小野 雅洋】



ハワイ大学の学生と一緒にマッサージの方法を学ぶ学生



45 likes

ocsportstv [?] [?] [?] [?] to Sendai University who hung out with the Corner Crew - join Scott, Nani, and Coach now as they preview tonight's Wahine matchup against UC Davis #GameOn

地元テレビ局のSNSで仙台大学が紹介されました

卒業式が3月18日に挙行されます

平成28年度仙台大学卒業式が3月18日（土）10：00から、本学第五体育館を会場に挙行されます。本日現在で学部学生476名、大学院生14名がそれぞれの課程を修め、社会人として巣立つこととなります。また、卒業式後には学生表彰式も行われる予定になっており、理事長特別賞として女子サッカー部の須永愛海選手が表彰されるほか、学長賞、スポーツ功労賞などの表彰が行われます。

なお、卒業式のご案内はホームページにも掲載しています。

「中高大連携会議」を開催

2月25日(土)、ホテル白萩にて、中学校関係者26名(仙台大学出身者20名、仙台大学出身中学校校長3名など)、佐々木稲生校長をはじめとする明成高校教職員24名(うち仙台大学出身10名)、阿部芳吉学長をはじめとする仙台大学教職員12名の出席で、「中高大連携会議」が盛大に行われました。

最初に、阿部芳吉学長の挨拶、続いて明成高校佐々木稲生校長の挨拶で会議が始まりました。第一部は17時から19時まで行われました。前半の全体会では、久能和夫学科長が「子ども運動教育学科について」の説明を行いました。その後、明成高校の山内学科長から「アクティブラーニングの視点を生かした学習・指導について」、伊藤進路指導部長から「キャリア教育の観点からの高大連携の取組みについて」、大石募集業務部長と和山教務部長から「平成29年度入試の状況について」の話題提供がありました。その後、各分科会で、中学校校長先生を進行役として、「中高大連携」のあり方について意見交換が熱心に行われました。

第二部は19時から20時30分まで懇談会が行われました。仙台大学出身の先生方と大学の先生方の懇談が随所に見られました。

中高大連携については、今後も互いの情報交換をしながら、協力をしていくという方向になりました。

【報告：明成高校 教頭 海和 由美子】



阿部学長の挨拶



第一分科会の様子

「平成29年度陸上競技部入部予定者研修会」を開催

2月18日(土)に学内において「平成29年度陸上競技部入部予定者研修会」が行われ、男女約40名が参加しました。入部予定者は、9時に集合してコーチや主将からの挨拶を聞いた後に、陸上競技部員全員と一緒に集合し、その後各ブロックの練習に参加しました。最初は遠慮する様子が見られましたが、徐々に打ち解け、昼食時には新入生同士や在学生ともコミュニケーションが取れていたようでした。

午後は陸上競技部の活動についての講義を実施しました。中身としては、平成28年度の成績や競技会の日程、地域貢献について、陸上競技部の組織について、部活動にかかる費用の説明などです。講義の後には入部後の試合で着用するユニフォームやジャージの採寸を行いました。参加者は、自分が入部する部活動についての情報を聞くとともに、着用することになるウェアを見てモチベーションを高めていたようでした。

これらの研修会が、新しい環境に適応するための一助となれば幸いです。

【報告：陸上競技部 コーチ 助教 柴山 一仁】



憧れの仙台大陸上トラックで説明を聞く入部予定の皆さん

Monthly Report

550名の卒業生・修了生が巣立つ ～卒業証書 学位記授与式を挙行～



阿部学長から卒業証書を受け取る体育学科総代の金須遼貴さん（右）

3月18日（土）、本学第五体育館を会場に「第47回体育学部卒業証書学位記授与式並びに第18回大学院学位記授与式」が挙行されました。

今年度は体育学部535名、国際交流締結大学である台東大学（台湾）とのダブルディグリー制1名の卒業生と、大学院14名の修了生、計550名が社会に巣立ちました。

阿部芳吉学長は学長告辞で「昨年開催されたリオデジャネイロオリンピックでは、本学の南條充寿教授や卒業生が活躍した。卒業生の皆さんには4年間で学んだことを3年後の東京オリンピックやその他社会の中で十分に活かしてほしい。」と卒業生にはなむけの言葉を送りました。

卒業生を代表して体育学科の佐々木優衣さんは「仙台大学では様々なことを学び、充実感で満ち溢れていました。卒業生を代表し、私たちを支えてくれたすべての方々に心より御礼申し上げます。」と答辞を述べました。

式内では学生表彰式も行われ、第28回ユニバーシアード競技大会女子サッカーで第3位に入賞したINAC神戸レオネッサへの加入が決定している須永愛海選手（体育学科—福島・富岡高校出身）が理事長特別賞を受賞した他、12名の卒業生に学長賞やスポーツ功労賞、文化功労賞、同窓会賞が授与されました。

卒業生の皆さんには4年間仙台大学で学んだことを社会の中で還元し、仙台大学の名声を世界に向けて発信してほしいと願っています。

＜目 次＞

550名の卒業生・修了生が巣立つ ～卒業証書 学位授与式を挙行～ ・2名の学生が成績優秀者として表彰 ・卒業生ピックアップ	1-4
2016年度 青海省国際科技合作賞を受賞	5
首都圏就職一日弾丸ツアーを開催	6
ベラルーシ共和国を訪問 ～東京五輪新体操合宿～	7
「子ども運動教育学科」 ～遊びが大好き、運動上手～	8
健康づくり運動サポーター事業 大学・地域評価会を開催	9
平成28年度学生表彰式を開催	10
ハワイ大学マノア校教育学部のHP で本学が紹介されました	11
ハワイ大学での献体解剖実習に参加	12
平成28年度キューブ新体操教室発表会	13
平成28年度陸上競技部春季強化合宿 台湾台東大学附属高校で実施	14

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室
直通 0224 - 55 - 1802
Email kouhou@sendai-u.ac.jp



2名の学生が成績優秀者として表彰

3月18日（土）に举行された卒業式終了後、学長室において「日本介護福祉士養成施設協会会長賞」（介護協会会長賞）と「全国栄養士養成施設協会会長賞」（栄養協会会長賞）の授与式が行われ、阿部芳吉学長から表彰状が授与されました。

介護協会会長賞は本学健康福祉学科介護福祉士養成課程において、学業成績、人物ともに他の模範となるべき学

生に贈られる賞で、今年度は笠原茉友子さん（柴田高校出身）が受賞しました。笠原さんは「まさか私が受賞できるとは思っていなかったのうれしいです。4年間学んだことを就職先である青梅慶友病院で活かしていきたいと思います。」と決意を新たにしていました。

また、栄養協会会長賞は本学運動栄養学科栄養士養成課程を優秀な成績で卒業する学生に贈られる賞で、今年度は青柳樹李亜さん（宮城・仙台高校出身）が受賞しました。青柳さんは「あっという間の4年間でしたが、勉強してきた成果が認められてうれしいです。」と受賞の感想を述べました。

感激を胸に、社会人としてなお一層羽ばたくことでしょう。



阿部学長から手渡された表彰状を手にする笠原さん（右から2人目）、青柳さん（右から3人目）と大山健康福祉学科長（右）

卒業生ピックアップ

この度めでたくご卒業された卒業生の中から、今後の活躍が特に期待される卒業生をピックアップし紹介します。今年度は、体育学科を卒業し、なでしこリーグの強豪チームであるINAC神戸レオネッサでプレーすることが決定している須永愛海さん。健康福祉学科を卒業し岩手県内の特別支援学校に現役合格した飯田和也さん、運動栄養学科を卒業し、米国のアスレティックトレーナー資格取得をめざしてハワイ大学マノア校に留学する村上泰司さんの3名です。

「INAC神戸レオネッサ」で活躍～東京オリンピックをめざして～ ー須永 愛海さん（体育学科卒業）ー

12月に行われた「INAC神戸レオネッサ」への加入内定記者会見から3か月。卒業式では既にチーム合宿に参加するなどプロ選手としての活動をスタートさせ、真っ黒に日焼けしている須永愛海選手の姿がありました。

卒業式を迎えた感想を尋ねると「やっと卒業できるという思いと、友達などと離れることとなり寂しいという思いが交錯しています。」と率直に感想を話してくれました。この4年間の一番の思い出については「皇后杯で1勝できたこと。」だそうで後輩たちには「プロ選手として活躍できる選手がでるよう頑張ってもらいたい。インカレや皇后杯で1つでも多くの勝ち星を挙げてほしいと思います。」とエールを送りました。

1ヶ月ほどチームの合宿に参加していた須永選手はプロとのレベルの違いを痛感したようで、「大学のレベルとは全く違う。今は必死に食らいついている状況ですが、技術力の向上だけでなく精神的にも強くなっていきたいと思っています。」と抱負を述べました。



理事長特別賞を手にする須永選手

岩手県内の特別支援学校教諭に現役合格

―飯田 和也さん（健康福祉学科卒業）―

現役合格を果たし4月から、岩手県内の特別支援学校に採用が決まった飯田和也さん。高校時代の恩師が特別支援学校に転任したことをきっかけに特別支援学校教員という仕事の魅力を知り、特別支援学校の教諭になるために本学の健康福祉学科に入学しました。もともと体育が得意だった飯田さんは高校時代から続けていたハンドボール部に2年生まで所属。その後は、障害者競技スポーツ部ユニティで車いすハンドボールに挑戦したり、スラックライン同好会に所属するなど複数の競技に挑戦。クラブを掛け持ちし学生生活を送ってきました。様々な分野で活躍する仲間たちと出逢い共に過ごすことができた充実した4年間だったと飯田さんは言います。



飯田和也さん

仙台大学に入学してよかったと思うことの一つに、実技科目を「パワー全開」で受けることが出来たと話します。高校まで体育の授業はどちらかというと遠慮しながら実技をしていたので、大学の授業で伸び伸びと運動を楽しめる環境に素直に喜びを感じたそうです。

また、全国から集まるトップアスリートの同級生たちの能力の高さに感銘を受けたことをはじめ、自分をよく理解し言葉をかけて下さった先生との出会いにも感謝しています。と話してくれました。

大学生活において、教職を目指すために大切にしてきたのは、「自分の言葉で語れる経験値」を高めること。より多く子どもたちとの関わりの中で学びを得るため、柴田町立槻木小学校において「放課後先生」の学習支援や、仙台市内にある自閉症児のサポート施設でアルバイトしたり、教員の資質を磨くため試行錯誤しながら子どもたちとの関わりひとつひとつを大切にしてきたそうです。

教員のスタートラインに立つ飯田さんに、現在の率直な気持ちを聞くと「不安と焦りが一番大きい」と痛感しながらも、「早く子どもたちの顔が見たい。はじめは完璧でなくても、最善をつくす元気な先生を目指したい。そして子どもたちから親近感を寄せてもらえる先生になりたい。」と話して抱負を述べました。

飯田さんが晴れて教壇に立つ日も間もなくです。

米国アスレティックトレーナーを目指して渡米

―村上 泰司さん（運動栄養学科卒業）―

仙台大学は米国ハワイ州オアフ島にあるハワイ大学マノア校において、平成15年12月に「第1回アスレティックトレーニング（AT）研修」を実施後、翌、平成16年4月には同大学から無料のインターネットによるAT分野の「遠隔授業」を行うなど、さまざまな学術的交流を積み重ねた結果、平成26年9月3日（日本時間の9月4日）に教育学部キネシオロジー・アンド・リハビリテーション科学学科（KRS）と国際学術交流に関する基本合意書を締結し、今日にいたるまで連携を深めています。

このたび、3月に本学を卒業した村上泰司君が、ATC取得を目指しハワイ大学院へ進学するため渡米することとなりました。



村上泰司さん

ATC (Athletic Trainer Certified) とは、NATA (National Athletic Trainers' Association) ・全米アスレティック トレーナー協会が公認するアスレティックトレーナーのことで、1991年にアメリカ医学会より準医療従事資格として認定され、現在は全米に300を超える養成校が存在し、40000人超のATCが活躍しています。NATA・ATCの主な役割は

1. 障害・怪我の予防と健康の保持
 2. 臨床評価
 3. 応急措置と緊急処置
 4. リハビリテーション
 5. 組織的・職業的な健康と福利
- ～ の5つです。

（次頁に続く）

8月の渡米を前に村上泰司君へ、ATCを目指すきっかけ・展望について語っていただきました。

①北海道から仙台大学へ入学を決めた理由

旭川南高校時代、サッカー部でディフェンスをつとめていた村上君は、将来的にスポーツに関わる職業につきたくて、サッカー部の顧問の先生に相談したところ、東北・北海道唯一の体育大学である仙台大学ならば広い視野で運動に関し学ぶことができるチャンスが豊富にあると勧められ、進学を決意したそうです。

②大学での生活・ATルームでの思い出

1年生から2年生の途中まで運動栄養サポート研究会に所属し、スポーツ栄養について学んでいました。その後、AT部に入り2年生からはラグビー部の見学実習、3年生からサッカー部の帯同、4年生はブースにおける活動をメインに行い、陸上競技会・明成高校のクローバーキャンプなど、さまざまなサポートを体験することができました。

③ATCになろうと思ったきっかけ

ATCである白幡先生や鈴木のぞみ新助手から、ATCを取得することで働く場所の選択肢が増え、自分になりたいと思う「研究職」に就く可能性も広まるとアドバイスいただいたことが、ATCを目指すきっかけとなりました。

アメリカはATがとても発展していることに加え、日本に比べて社会的な地位も確立されています。そのような環境で働けることは自分にとって素晴らしい経験になるのではと考えました。

④遠隔授業やUHにおけるAT研修の意味

遠隔授業は2年生で「NATAアスレティックトレーナーの実際Ⅰ」を、3年生で「NATAアスレティックトレーナーの実際Ⅱ」を取得しました。

普通の授業では学ぶことができないような緊急時対応計画の作り方などを学習する貴重な時間でしたし、プレゼンテーションの機会が多かったため、人前で自分の考えを伝えるスキルも得られたことが大きな収穫です。

UHにおけるAT研修には、1年生で「ビギナーコース」に、3年生で「アドバンスコース」に参加し、現地のアメリカ人・日本人ATCの方々の活動を自分の目で見ることができ、何よりの刺激と学習意欲につながりました。

⑤UH大学院を選んだ理由

UHでのAT研修を通し、UHの施設の素晴らしさを知り、お世話になった先生方がたくさんいらっしゃる事が決め手になりました。また、ハワイは日本人のATCが多々活躍しており、ATC分野においてもアメリカ50州の中で最も進んだ州の1つです。そこからスタートするのが、将

来アメリカで働きたい自分にとってベストであると考えました。

⑥今後の予定

今年の8月にハワイ州オアフ島へ渡米、ホームステイで英語に慣れながら、KRSに入学するための「大学院準備プログラム」で英語及び必要な授業を受ける予定です。UHの大学院入学にはTOEFLで79点が必要ですが、自分は77点なのであと一歩努力して、1年後には是非UH大学院入学を果たしたいと思います。

⑦ATC取得後の目標・豊富など

UHの大学院（マスターコース）で学び、無事にATCを取得することができたらまずATCとしてアメリカで現場経験を積みたいです。その後、働きながらドクターコースで学び、PhD.を取得後、大学の研究職としてアメリカで働き続けたいと考えています。

⑧仙台大学で学んだ意味

仙台大学に入学しなければ、ATCという職業があることもどのように自分がその資格を取得できるかも全く知らず、今頃は違う道を歩いていた。

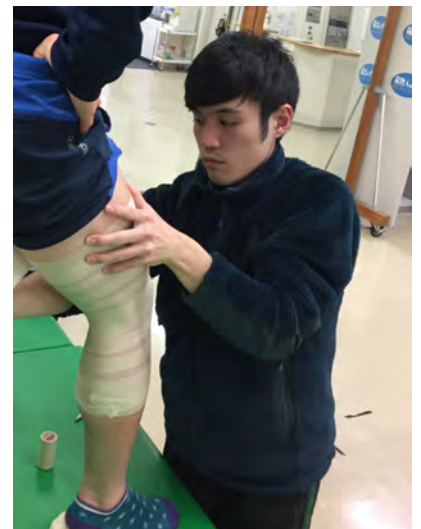
これだけたくさんのATC取得者がいる大学は日本にないと思いますし、ハワイ大学との提携で、常に海外に開かれた可能性を学生に示してくれるので 仙台大学で学んだ4年間は何よりも大切な人生の礎になりました。お世話になった先生方みなさんに感謝しています。そのためにも精一杯努力してATCを目指します。

本学のATC取得者の1人でATルームに勤務する鈴木 のぞみ新助手（明成高校卒業—仙台大学卒業—ハワイ大学院マスターコースにて修学—AT資格取得）は村上君に対し

「多くの人と出会い、コミュニケーションをとりながら、自分の個性を伸ばしていってほしいです」と語っています。

2020東京オリンピック・パラリンピックに向けて、スポーツや健康分野に興味・関心が高まる

中、ATCの存在は世界的規模で徐々に高まっていくのではないのでしょうか。仙台大学出身の新たなATC誕生をあたたく見守っていききたいものです。



選手にテーピングを施す村上さん

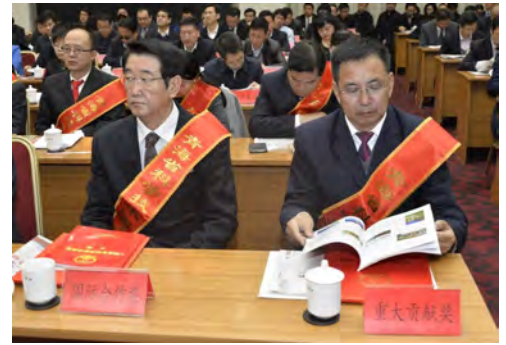
「2016年度青海省国際科技合作賞」を受賞

2月27日青海省政府は勝利賓館で「2016年度青海省科技奨励大会」を行い、仙台大学は「青海省国際科技合作賞」を受賞しました。

仙台大学は青海省体育科学研究所の友好機関として、2008年から同省とのスポーツ科学交流が始まり、2011年に青海省体育科学研究所と「国際交流および友好機関」の協定を結びました。協定締結以降の仙台大学からの各種協力は科学研究及び人材育成にと多岐にわたり、青海省体育界に今までにない大きな貢献をさせていって来ました。具体的には高地トレーニング、高地と健康増進などの領域において、計5つの国家及び青海省国際科技合作研究プロジェクトを展開し、そのうち「日・中高地および平地居住の選手の体力および血液成分に関する比較研究」、「日・中の高地及び平地居住の高齢者における運動能力および脂質代謝に関する研究」においては、青海省科学技術進歩の三等賞の成果を収めました。人材育成においては、青海省体育界の高度人材育成のために入学試験免除、学費軽減などの多方面の支援を行い、これまで、仙台大学大学院の修士課程に6名が留学し、うち4名が既に修了して現在体育科学研究界で活躍しています。また、2名がスポーツ教育及び運動訓練を専攻し、現在大学院2年生として研究しています。その他の国際交流としては、青海省政府体育代表团及び科学技術代表团は日本訪問の際に仙台大学からの積極的な協力を得た上で、日本の国立科学スポーツ研究センター、早稲田大学及び筑波大学を訪問し、良好な交流関係を作り上げてきました。

さらに、スポーツ施設の視察、スポーツ大会の運営及びスポーツくじ・競輪などのスポーツ産業発展の状況を把握でき、青海省の国際ロードレース大会の運営及び青海省スポーツ産業発展の良い参考例となりました。これらは、仙台大学との提携があって初めて多方面のスポーツ交流ルートを開発することができたと言っても過言ではありません。

【報告：大学院事務室 馬 冬梅】



授賞式に出席した桜井理事（左）



青海省の省長とも接見しました

トヨタ自動車 豊田章男社長が仙台大学を2度目の訪問 —経団連オリンピック・パラリンピック等推進委員会—

3月3日（金）に日本経済団体連合会のオリンピック・パラリンピック等推進委員会委員長である豊田章男トヨタ自動車社長が仙台大学を訪れ、SMB C日興証券でアスリートとして活躍する加藤由希子選手（平成28年卒業）や本学の陸上部選手と交流しました。

豊田社長が本学を訪問するのは昨年の4月に引き続き2回目で、残念ながらリオデジャネイロ・パラリンピック大会に出場できなかったものの、2020年の東京パラリンピック大会出場に向けて前向きにチャレンジを続けている加藤選手を激励されていました。陸上競技場で行われた加藤選手のトレーニング視察の際には、加藤選手のトレーニングの様子に興味深くご覧になっていたのはもちろん、砲丸投げややり投げの競技特性などについて熱心に質問されていました。また、豊田社長自らが「砲丸」や「やり」を投げるなどの場面もあり、大変和やかな雰囲気でした。

トレーニング視察の後にはLC棟に場所を移し、豊田社長や加藤選手、本学の陸上競技部の選手などが懇談を行いました。懇談では、競技に打ち込むことの意義や今後の目標などについてそれぞれの意見を出しながら選手たちは今後の活躍を誓っていました。



加藤由希子選手と豊田章男社長

首都圏就職一日弾丸ツアーを開催

平成29年3月5日（日）に首都圏就職一日弾丸ツアーを開催しました。

保護者会より援助を受け、本学学生への就職支援の一環として、首都圏で開催される就職イベントに参加するという企画です。事前に2日間にわたる事前指導を受けることを条件とし、募集したところ体育学科3名、健康福祉学科4名、運動栄養学科6名、スポーツ情報マスメディア学科4名、現代武道学科3名、計20名の申込みがありました。

これまでは早朝5時に出発をし、夜中の2時に帰ってくるという行程で運営しておりましたが、昨今のニュースで度重なる長距離バスの事故の心配があることに加え、大学に戻ってからの交通手段が無いなどの理由から、昨年度より新幹線での移動に変更することとしています。

当日は仙台駅に8時30分に集合し、団体乗車券を使い、東京・お茶の水経由で水道橋駅まで移動し東京ドームプリズムホールへ向かいました。合同企業説明会は12時から18時までの6時間でしたが、最高で8社のブースを訪問した強者もありました。合同企業説明会終了後には、文化放送キャリアパートナーズの岡田氏より、今日の経験を今後どのように活かしていくかについて講義が行われ、学生たちは疲れも見せず真剣に耳を傾けていました。引き続き、講義終了後に首都圏学生との交流会を実施しました。来て頂いた学生は、明治大学1名、立教大学2名、日本女子体育大学4名の学生でした。双方とも就職に意識の高い学生たちでしたので、お互いに初対面とは思えないくらい溶け込んでいました。

学生たちは連絡先を交換し合うなど終始和やかな雰囲気でした。帰りの新幹線では、早速一緒に撮った画像が送られて来る等、更に交流を深めているようでした。今回のツアーの参加者は、首都圏の学生にかなり刺激を受けた様子で、今後も学生たちが希望する職種へ就くことができるよう支援して参ります。

【報告：入試創職室 中鉢 芳尚】



各企業のブースで説明を聞く参加者

平成28年度 仙台大学合同業界研究セミナーを開催

3月15日（水）に柴田町内にある「ホテル原田inさくら」を会場に平成28年度仙台大学合同業界研究セミナーが開催されました。説明会には45社にご協力いただき、学生は過去最高となる258人が参加し、会場は終始、自分の興味がある企業や業種の情報を集めようとする学生で熱気があふれていました。

セミナーでブースを出展していただいた企業の中には本学の卒業生の姿も多く、先輩が後輩に会社の説明を行う姿もあちらこちらで見受けられました。

セミナーに参加した運動栄養学科4年の小島萌里さん（青森・八戸北高校出身）は「入学当時からスポーツに関心を持ち、特にスポーツ栄養に関する勉強をしてきました。今回のセミナーに参加して各企業の方々の話を伺い、やはり自分がやりたいことはスポーツなんだということを再確認できました。また、他で開催される企業説明会よりもアットホームな雰囲気だったので緊張せずに話を聞くことができました。自分の目標を達成するために今後も積極的に就職活動が続けていきたいと思っています。」と説明会に参加した感想を話し、これからの就職活動に向けて決意を新たにしていました。

本学では毎年、合同業界研究セミナーを大学生の就職活動がスタートするこの時期に開催しています。



本学の卒業生（左）からの会社説明を熱心に聴く学生

ベラルーシ共和国訪問報告 ー2020年東京五輪・パラリンピック 新体操チーム合宿ー

2月21日（火）～25日（土）に日程で、朴澤泰治理事長・学事顧問、山梨雅枝講師、河野未来助教、橘谷田孝治白石市企画情報課長4名がベラルーシ共和国を訪問しました。今回の渡航では、大学との協定継続手続き及び2020年東京五輪・パラリンピックの事前合宿の誘致活動に関する新体操関係者との打ち合わせなどが行われました。

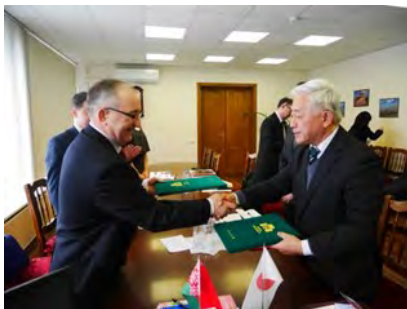
22日は、オリンピックアカデミーを訪問し、イリーナ会長より幼児期から実施されているオリンピック教育システムについてレクチャーを受け、ベラルーシでのオリンピックに対する意識の高さを感じることができました。

23日のディナモ訪問では、ヘッドコーチであるレパルスカ氏とお会いしました。その後、ナショナルチームの練習環境を確認し、誘致に際して大学での準備物などを確認。また、ナショナルチームの演技を披露していただき、充実した時間を過ごしました。その後、体操協会に移動し、誘致に関する具体的な話し合いを通し、2017年中の訪問日程や宿泊方法など、具体的な内容を確認しました。

これから、新体操を通じてベラルーシと本学との交流がますます盛んになり、学生にとってもよい刺激になるのではないかと考えております。

仙台大学と柴田町、白石市でつくる事前合宿誘致推進協議会は、平成29年2月2日の記者会見でベラルーシ新体操ナショナルチーム事前合宿の招致が決定したことを発表しています。

【報告：講師 山梨雅枝】



ベラルーシ国立体育・スポーツ学院にて



在ベラルーシ日本大使館にて徳永博基大使と



ベラルーシ体操協会にてレパルスカヤヘッドコーチ（右3番目）と体操協会副会長（右2番目）

あの日から6年・・・ ー東日本大震災追悼式ー

未曾有の大震災から6年・・・

校舎を見守る形で建立された慰霊碑の前で今年も追悼式が行われ、学生や教職員約120名が参加しました。

東日本大震災では本学の学生3名が津波被害に遭い、尊い「いのち」が犠牲となりました。3月11日現在、東日本大震災による全国での死者15,893名、行方不明者2,553名という甚大な被害を残し、今なお行方不明者の捜索活動は各地で行われています。

追悼式の冒頭、朴澤泰治理事長・学事顧問から「犠牲となった3名の学生はもちろん、数多くの尊い命に対し深く追悼の意を表すと共に、6年経った今年はお遺族にとっては7回忌という年になり、今後もあの忌わしい出来事を忘れることなく、そこから得た教訓を生かしていくことが大切です。」と挨拶され、柴田町内や船岡駐屯地から流れてくるサイレンや鐘の音に合わせ、参列者全員で黙とうを捧げ、犠牲者のご冥福と、被災地の日も早い復興を祈りました。

その後ひとり一人慰霊碑の前に用意された3名の遺影にむかい手を合わせ、それぞれの思いと共に追悼の意を表していました。



慰霊碑に選考を手向ける参列者

【報告：教育企画室 室長 川村昭宏】

「子ども運動教育学科」～遊びが大好き、運動上手～

入学や入園の季節を迎えましたが、特にこの時期「遊んでばかりいないで勉強しなさい。」

読者の皆さんは、親からこの言葉を言われたことがありますか。逆にご自分のお子さんに対して言ったことはありませんか。いずれか、あるいは両方、誰しも1回は経験があるのではないかと思います。

けれども、1歳になる自分の孫を見ておりますと、這う、つかまって立つ、伝い歩きをする、あるいは音楽に合わせて体を動かす、等々全ての新しい動きの獲得は興味関心から始まっているような気がしてなりません。言わずもがなですが「遊んでばかり」です。危ない物を取り上げようとすると大きな声で泣き抵抗します。どれもが遊びたいという気持ちから始まっているように思えます。

そこで思い出したのが「遊戯は文化よりも古い。人を夢中にさせる力の中にこそ遊戯の本質がある」という文です。これはヨハン・ホイジンガ氏が彼の著書ホモ・ルーデンスの中で語った言葉ですが、孫の様子を見ているとホイジンガの叙述には、なるほどと納得してしまいます。遊びは無限ともいえる多様な価値を持っています。積極性、努力、心身の健康、情操、言語、思考、体力など実現してくれるものは遊びです。そしてその幼児の遊びの大部分は体を動かすことです。

スポーツ科学研究で著名な杉原隆氏は、走る、運ぶ、登る、降りる、跳ぶ、押す、転がる、転がすなどの多くの運動パターンを日常頻繁に経験している幼児ほど運動能力が高いという研究結果を発表しています。

仙台大学子ども運動教育学科では、平成24年に文部科学省が策定した「幼児期運動指針」との整合性を図りながら、幼児にどんな運動遊びをさせたら、

- ・意欲的で
- ・スポーツが好きで
- ・運動能力の高い
- ・人（子どもから大人まで）

を育成していけるのか学生の皆さんと一緒に考えていきます。運動遊びの支援助長を軸にして心身の発育・発達を促す研究を進めてまいります。

子どもの保育と教育の在り方についてじっくりと理解を深めてまいりましょう。

【子ども運動教育学科 教授 郡山孝幸】



プレイルームに通う子どもたちと
朴澤理事長・学事顧問をはじめとする教職員

「柴田健康スイミングクラブ」からご寄付をいただきました

3月2日、「柴田健康スイミングクラブ」の会長小室悟氏、副会長南まさこ氏、元会長白鳥峻氏の3名の方々が仙台大学に対し、これまでのお礼と今後の活動に役立ててほしいと表敬訪問があり、寄付金を頂戴しました。

「柴田健康スイミングクラブ」は、仙台大学が地域住民の方々に「仙台大学中高年水泳教室」として呼びかけ、平成15年5月からはじめた地域貢献事業の一つです。

平成22年4月から現在の名称に変更し、週2回、年間80日活動しており、メンバーは現在85名、平均年齢は70.5歳、健康志向が高く、コミュニケーションを大切に楽しく若々しく活動しています。

東日本震災後、本学のプールは使用できなくなりましたが、「私達高齢者にとって、大学の先生の水泳指導は素晴らしい喜びであった」、「水中の有酸素運動は健康増進に大変効果が現れた」と継続して活動に参加できたことのお礼を学長に伝えていました。メンバーの中には16年間という長い期間、参加されている方もおいでになり、仙台大学の事業が地域住民の健康支援となっていることが伺えました。



阿部学長に寄附金を贈呈する南まさこ副会長

【報告：健康福祉学科長 教授 大山さく子】

健康づくり運動サポーター事業 大学・地域評価会を開催

3月6日（月）に柴田町、亘理町の行政担当者や参加者の代表者をお招きして、大学・地域評価会を開催しました。この評価会は、柴田町やその他近隣市町村の健康づくりに関する連携事業について、1年間の事業の実施状況や内容、派遣している健康づくり運動サポーター※（以下、健サポ）の地域での活動を振り返ることを目的として、毎年実施しています。

今回は橋本副学長を議長とし、小池教授から平成28年度の事業報告及び健サポの資格認定状況に関して報告しました。行政の担当者の皆さんからは「住民から運動教室や健康イベントの話を聞く機会が多い。それだけ皆さん楽しみにしていられるということ。これからも是非継続して活躍してほしい」等の声をいただきました。また、参加者の代表から「学生の対応が非常に良く、身体を動かすことはもちろん、人との交流も健康づくりにはとても良い。今後も学生と住民の交流を増やしていきたい。」という意見を頂戴しました。

参加した健サポ上級の資格を取得している宍戸香菜子さん（健康福祉学科4年一宮城・仙台東高校出身）は「上級の実習では、健康イベントの企画を通して、リーダーとしてスタッフを動かす難しさ、スムーズな進行の進め方等、様々な課題があった。実習を通して得た経験をこれからの活かしていきたい。」と感想を述べました。

学生たちの実学の間として、本事業は非常に価値の高いものだと感じています。今後も多くの健サポを養成し、授業では身に付けることのできない実践力のある学生を輩出していきたいです。

【報告：新助手 齋藤 まり】



評価会であいさつする橋本実副学長

健康づくり運動サポーター 認定証書及び感謝状授与式を開催

3月17日（火）に健康づくり運動サポーター（以下、健サポ）の認定証書授与式及び、災害ボランティア感謝状授与式を開催しました。今回は平成28年度後期の資格認定評価会で認定された初級12名、中級8名、上級1名の計21名に対して認定証書が授与されました。今回の認定者を含め、延べ501名が本資格を取得してきました。

今回、上級を取得した浅井美樹さん（健康福祉学科3年）は「私が目指している社会福祉士は、社会福祉に関わることで全てが仕事の範囲です。様々なジャンルがある中で共通するのは、地域を知り、対象者に合わせて計画するという事です。そういった力を実習で身につけられると思い、上級実習に臨みました。実践の中で学び得たことを、資格取得に活かしていきたいです。」とコメントしました。

また、認定証書授与式に続けて、災害ボランティア感謝状の授与式も行いました。今年度、女川町や亘理町で実施した被災地支援活動にボランティアとして参加した13名に一人一人、橋本副学長から授与されました。積極的にボランティア活動に参加した木村金次郎さん（健康福祉学科4年）は「被災を受けた故郷・女川町のために何かしたいと思い、この活動に参加しました。今後は女川町で就職します。大袈裟ですが、僕の力で女川町を元気にしていきたいです。」と力強く話してくれました。

学生たちは地域の方々に見守られながら、育てていただいています。今後も学生たちが実学の中で学びを深めていけるよう、多くの学生たちにこの活動を広めていきたいと考えています。

【報告：新助手 齋藤 まり】



橋本実副学長から上級の認定証を受け取る浅井さん



資格が認定された学生の益々の活躍が期待されます

平成28年度学生表彰式を開催

3月24日（金）にKMCH（クラブハウス棟）大会議室を会場に「平成28年度学生表彰式」が行われ、今年度は全国大会などで優勝や入賞を果たし本学の名声を高めた1団体、個人12名が表彰されました。

表彰式の冒頭で志賀野博学生部長より、学生表彰の趣旨などの説明があり、引き続き表彰状の授与が行われました。表彰状授与後に阿部芳吉学長は「日頃からの練習の成果だと思います。2020年には東京オリンピックがあります。メダルを獲得できるような中心的な選手として活躍できるよう頑張ってください。」と挨拶しました。

表彰状を代表で受け取った漕艇部の村上善章さん（健康福祉学科3年一宮城・塩釜高校出身）は「自分の努力が実ったことは大変うれしいです。今年は昨年以上に活躍できるように練習をしていきます。」と受賞の感想を話しました。



今後益々の活躍が期待される受賞者

亘理町で「健康づくり茶話会」を実施しました — 亘理町サポートセンター解散に伴い最後の活動 —

3月24日（金）、亘理町下茨田南集会所において今年度最後となる災害ボランティア「健康づくり茶話会+楽しい運動」を実施しました。この日は、橋本実副学長と大山さく子健康福祉学科長、健康づくり運動サポーター上級の宍戸香菜子さん（健康福祉学科4年一宮城・仙台東高校出身）が参加しました。

災害ボランティアは、震災直後から体育館などの避難所での健康支援活動を実施し、その後も仮設住宅や災害公営住宅で住民の健康づくりやコミュニティ再構築を目的とし活動を継続しています。

この日は、40代から80代後半と年齢層も幅広く、笑顔の素敵な23名の方々が足を運んでくださいました。1時間程度の運動では、まず頭の体操で緊張をほぐし、次に上肢・下肢の筋力トレーニング運動等身体機能の維持や向上、脳の活性化を図りながら介護状態を予防するために、「1・2」の掛け声や歌などを交えながら行いました。参加者の皆さんは、お互いに顔を合わせ、学生やスタッフ達とのふれあいから笑い声が絶えず、運動を通し、交流を楽しむ様子が伺えました。

運動後の茶話会では、机を囲み参加者全員でお茶を飲みながら会話がはずみました。参加者の方からは、「体を動かしてスッキリした」「毎月この会を楽しみにしている」「また来月も来てね」と声をかけていただきました。

この活動では「亘理町サポートセンター」の看護師の方々にもスタッフとして協力をいただいてきましたが、当センターは今年度3月で解散となります。今回が最後の活動となることから、これまで一緒に活動し、協力を頂いたスタッフの方々に対し、仙台大学から感謝の意を表しました。また、卒業式を終えて今回最後の参加となった宍戸さんを含め、スタッフとの別れを惜しんでいました。

春は別れと出会いの季節ですが、また気持ちを新たに4月から亘理町との連携事業として活動を継続していきます。東北・宮城の復興、健康づくりに貢献できるよう、これからも学生たちと共に積極的に頑張りたいと思います。



運動後の茶話会の様子



参加者の皆さんと最後の記念撮影

【報告：健康福祉学科長 教授 大山 さく子 ・ 新助手 松浦 里紗】

ハワイ大学マノア校教育学部のHPで本学が紹介されました

News

Unique access to 1-2 week-long athletic training experiences continues to attract international visiting students to KRS

Posted on March 17, 2017

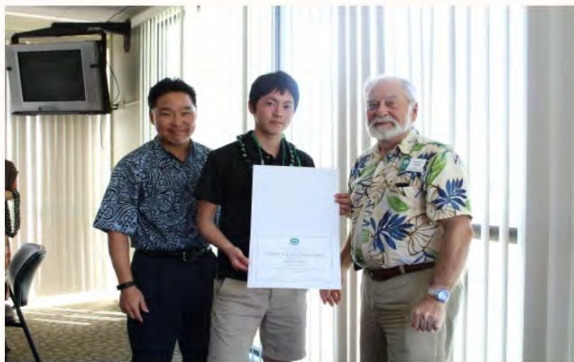
Ten students and four faculty members from Sendai University visited KRS from February 13 to 16 for the 24th Sendai University Athletic Training Study Tour, followed by KRS' fourth installment of the Hawaii International Athletic Training Education Clinic (HI-A TEC) from March 7 to 14. Both were led by KRS faculty Dr. Kaori Tamura and Dr. Yukiya Oba.

As in previous tours, Sendai University students began their athletic training tour with two English conversation sessions by English language instructor Don Pomes focusing on medical/healthcare-related conversation and terminology.



During the athletic training seminar "graduation ceremony," Sendai students are required to share their thoughts on their experience in English to a room full of people

Another unique aspect of the study tour are the opportunity to observe university level courses such as Olympic Lifting by Tommy Heffernan, Upper Extremity Assessment by Dr. Yukiya Oba, and Therapeutic Exercise by Dr. Bret Freeman. Dr. Oba also delivered a special seminar session specifically for Sendai University students on what it takes and what the key steps are to becoming an international student and pursue healthcare profession training at KRS.



Sendai student with KRS chair Dr. Nathan Murata and COE's Dean Young at the graduation ceremony

Thanks to KRS' relationship with McKinley High School, the students were also given access to observe how McKinley High School athletic trainers (Tomoki Kanaoka and Leanna Goeckeritz) work and function as healthcare professionals within the school and HIOE system. The students also went on an Athletics Department tour and Women's basketball and Baseball game observation, followed by participation in NCAA Division I athletics events (a new addition to the athletic training study tour offering). In addition to structured experiences, the program participants also engaged in less formal contexts, such as the get-together lunch with KRS Athletic Training students where they had a chance to practice their English.



HI-A TEC participants take a break from cadaver dissection

KRS recently also created another similar program, with the difference being that participants do not necessarily need to only be from one university - the Hawaii International Athletic Training Education Clinic or HI-A TEC program, run once per semester. For the Spring 2017 HI-A TEC, athletic training students from Ritsumeikan University and Sendai University participated in a 6-day Gross Anatomy course hosted by KRS, in collaboration with the John A. Burns School of Medicine (JABSOM) which included access to cadaver dissection which is hard to come by in Japan.

KRS will continue hosting these unique international athletic training seminars and clinics, and specifically hopes to also increase participation in the newly developed HI-A TEC program.

<概説>

①アスレティックトレーニング研修 (AT) ビギナーコース (通算24回目)

KRS (キネシオロジー&リハビリテーション・サイエンス) が実施するユニークなアスレティックトレーニングを経験するプログラムに、海外からの学生達が継続的にKRSを訪問しています。

2月13日～16日、教育学部KRSが学術提携している「仙台大学」の、今回で24回目となるアスレティックトレーナー研修が行われ、学生10名と引率者4名がKRSを訪れました。また、ハワイ国際アスレティックトレーニング教育クリニックが3月7日～14日にかけて実施した検体解剖実習にも、同大学より学生2名と新助手1名が参加しました。どちらもKRSのドクターである田村薫里氏と大庭有希也氏が担当しています。

アスレティックトレーニング研修では、ドン・ポメス氏による2度の英会話の授業、大学レベルのオリンピックリフティングを経験するトミー・ヘフマン氏によるトレーニング実習、大庭氏には仙台大学の学生達がどのようなステップを通して国際感覚を身に着けることが出来るか?について指導いただくなど、個性あふれる講義が用意されました。

修了式にはヤング学部長、ムラタ学科長をはじめ、関係者全員の前で学生一人一人が英語でスピーチをし、緊張感のなかで英語を話す貴重な学びになったようです。

マッキンリー高校における現場でのATCの働きぶりを見学した後は、UHの女子バスケット試合・野球試合の観戦・UHの学生との交流会が行われ、実践的な英語学習の場ともなりました。

②検体解剖実習

KRSは昨今、AT関連で、単体ではなくとも希望する大学があれば、合同で実施するという別のプログラムを作り、今回実施しました。それはUHの医学部の協力による、日本では行うのが難しい「検体解剖実習」です。立命館大学の学生及び、仙台大学の学生2名と新助手1名(前田美優:運動栄養学科2年・太田遥:健康福祉学科2年・鈴木のぞみ新助手)が参加し、検体解剖に特化した内容について深く学ぶことができました。

KRSはこれからも医学部の協力を得ながら、ATおよび医学的なセミナーを企画・実施していきますので、海外の学生達のますますの参加を願っています。

【HP URL】

<https://coe.hawaii.edu/about/news/2017/03/unique-access-to-1-2-week-long-athletic-training-experiences-continues-to-attract-international>

ハワイ大学での献体解剖実習に参加

ハワイ大学におけるAT研修の中に、今回新しく献体解剖実習が加わりました。アメリカでは生前の遺体提供意思表示により、事故や病気で亡くなられた方のご遺体が大学の医学部に寄付されることがあります。献体解剖とは、学生がそのご遺体を解剖させていただくことで、人体についてより深く、より詳細な知識を学ぶことのできる授業です。日本においては医学部で学ぶ医学生のみ献体解剖を受講できますが、アメリカではアスレティックトレーナーも医療従事者の一員として考えられており、アスレティックトレーナーを目指す学生も献体解剖を受講可能です。

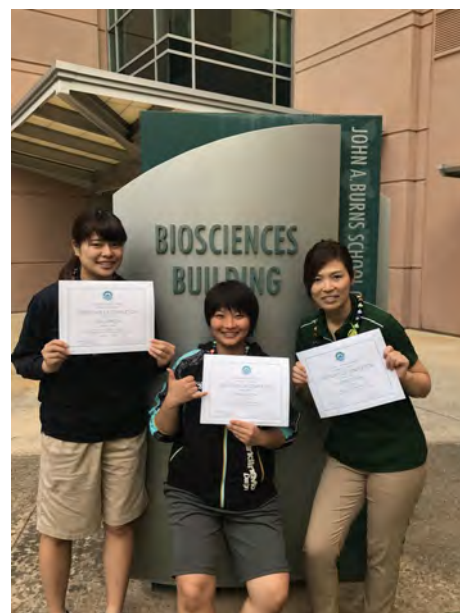
本研修はHawaii International Athletic Training Education Clinic(HI-ATEC)という、ハワイ大学キネシオロジー学部が提供している研修プログラムの一つです。短期献体解剖実習は今回が2回目の実施で、講師兼コーディネーターはハワイ大学医学部特任教授・同大学キネシオロジー学部教員の田村薫里先生と大庭有希也先生でした。HI-ATEC研修のねらいの一つには様々な大学からの参加者との交流があり、今回は仙台大学の学生以外にも、立命館大学の学生や治療家の方など、合わせて7名が受講していました。ハワイ大学の大学院生や本学の白幡恭子助教にもお手伝いいただき、学びだけでなく交流も深める事ができました。

詳しい研修内容として、日程は全6日間で全身の解剖を行ないました。午前は実技を交えた講義を通して、体の構造のポイントを理解しそのイメージを膨らませます。午後は夕方まで医学部の献体解剖ラボにて、自分自身で体にメスを入れていき、イメージとリアルな身体の組織の違いを丁寧に確認していきましました。講義内容は全て英語ですが、内容の理解がより優先されるということで、時には日本語も交えて講義や解剖の指導が進められました。学生たちは、夜には寮の勉強スペースにて予習・復習に励み、少しでも多くの事を吸収できるよう努めていました。



熱心に勉強する学生

参加学生は健康福祉学科3年太田遥と運動栄養学科3年前田美優で、2人は今回の研修について以下のように述べています。「今回のハワイ研修では、日本で経験することが難しい献体解剖に参加させていただきました。実際に解剖し、自分自身の目で人の身体の骨・筋肉・神経・内臓等の構造を見ることができ、衝撃や感動を受けると共にとても勉強になりました。今回の研修から得た知識を、AT部の活動の一環である、スポーツ選手の怪我の予防やアスレティックリハビリテーションをより質の高いものにするために活かしていきたいです。」(前田)「今回のハワイ研修では献体解剖の実習を行い、日本ではできない貴重な経験をすることができました。今まで教科書などで学んでいた骨や筋肉、関節を実際目で見て肌で感じ、やる前は不安がありましたが、感動と提供してくれた人への感謝を感じ、多くのことを学ぶことができました。今回のハワイで学んだものを今後の活動に活かし、それを応用するためにもまだまだ学ぶべきことがあると思い、これからも色々な活動に参加していきたいです。」(太田)



その他、私たち、ハワイで行われたアスレティックトレーナーの普及啓発イベントにも参加しました。主催者はハワイ研修で毎回お世話になっているマッキンリー高校ATの金岡友樹氏で、全米アスレティックトレーニング協会(National Athletic Trainer's Association : NATA)生誕67周年を記念し、カピオラニ公園を6.7時間リレーマラソンを走るなど、現地アスレティックトレーナーの方々と交流を深めるととても良い機会でした。

本プログラムは来年度も継続される見通しで、今後も多くの学生にこのような素晴らしい経験を通して、英語力や自己の成長に繋げていってもらいたいと考えています。ハワイAT研修の各種プログラムを活用することで世界で通じる人材育成を目指し、今後は研修事前指導の充実などを視野に入れ取り組んでいきます。

【報告：新助手 鈴木 のぞみ】

平成28年度キューブ新体操教室発表会 ー招待選手として新体操競技部が参加ー

3月25日、白石市ホワイトキューブにて「平成28年度キューブ新体操教室発表会」が開催され、招待選手として新体操競技部8名と新入生2名が参加させて頂きました。今年2月に白石市・柴田町・仙台大学の3者協定で、事前合宿誘致決定を発表してから初めての発表会ということで、たくさんのご来賓の方々、保護者、観客の皆さまにご来場頂きました。

私たち新体操競技部は、シーズンインに向けて3月22日（水）から24日（金）までホワイトキューブにて合宿をし、その成果を発表会で演技させて頂きました。まだまだ課題の残る演技ではありましたが、大変素晴らしい環境の中で、集中して練習を行い、清々しい気持ちで4日間を終えることができました。

今回の発表会エンディングでは、映画「座頭市」の音楽に合わせて、男女68名の選手たちが「和」をテーマに色とりどりのゴースを使い、力強く演技を行いました。白石市体操協会会長の日下イサヲ先生からは「多くの方の支えがあり、長年に渡って新体操が愛される環境が創られてきた。今回のベラルーシナショナルチームのキャンプで、さらに新体操の魅力を感じてもらい、世界に目を向けた選手育成を行っていききたい。」とお話を頂き、発表会の締めくくりとなりました。

【報告：新体操競技部 監督 助教 河野未来】



参加者全員での記念写真



本学新体操競技部の選手

今年度も「教採塾」を開講 ーできるだけ多くの「桜咲く」を目指してー

春休み中、3月中旬ごろのB棟二階講義室で黙々と勉強している学生が一つの目標に向かって努力している姿があります。

今年の宮城県・仙台市教員採用試験出題が大幅に変更され、新たな教員採用試験に対応しなければなりません。

大きく変更になった点は、宮城県、仙台市が個別に試験を実施すること、また、中・高保健体育で一次体育実技がありましたが、次年度から実技試験が二次に、その代わりに一般教養全般が組み込まれたことによって全般的な知識教養を身に付けなければなりません。

これまで中・高校で国語、数学、理科、社会、英語等を学習しているところを思い起こしながら「確かな学力」として勉強しているところです。

今後、7月下旬の教員採用に向けて「教採塾」を開講してできるだけ多くの受験生が「桜咲く」を目指して頑張っているところです。



夢の実現を目指して勉強に取り組む学生

【教職支援センター長 教授 青沼 一民】

平成28年度陸上競技部（投てきブロック）春季強化合宿 初めて台湾台東大学附属高校で実施

3月22日（水）から27日（木）の6日間の日程で、陸上競技部（投てきブロック）春季強化合宿を台湾台東大学附属高校で初めて実施しました。

強化合宿を計画するにあたり、私たち投てきブロックには高いハードルがありました。それは投てきのトレーニングは投てき物が落下した際に芝生を傷めることや危険性が高いという理由から、たとえ陸上競技場であってもトレーニングを断られることが多いということです。「温暖な地で思い切り投てきのトレーニングが可能な場所はないか？」と思い巡らせているところに、交流大学の台東大学で実施できるかもしれないという話がありました。現地の事前調査には朴澤理事長・学事顧問にも足を運んでいただき、また、台東大学の梁先生にも全面的に協力をいただき、今回の強化合宿の開催となりました。

移動の都合から、6日間の渡航期間のうち実際にトレーニングを行ったのは4日間となりましたが、その施設は最高でした。自由に投げることができる陸上競技場、その中にはウェイトトレーニング場も併設、アイシング用の氷も競技場内にありました。また、トレーニングが終了すれば、徒歩3分で食堂へ。バイキング形式のおいしい食事を1日3食提供していただきました。宿も徒歩5分の距離にあり、シーズンインを控えた学生たちにとっては最高の環境下でのトレーニングとなりました。合宿中に実施した模擬試合（トライアル）では自己新記録を超えた学生も多数で、とても良い成果となりました。

また、附属高校にも陸上競技部があり、そちらの高校生たちと一緒にトレーニングをする機会を持つことができました。最初は遠慮がちでしたが、同じ陸上競技に取り組むアスリート同士なので、すぐに打ち解けることができました。「英語がお互いにできたらなあ」という言葉も聞こえ、語学力の大切さも身を持って体感していたようです。

台東最終日には、台東大学の見学も行いました。世界有数の図書館では、その洗練されたデザインや機能、真剣に学ぶ学生たちに本学学生も刺激を受けていたようです。

今回の合宿では、素晴らしい合宿の場を提供していただいたことへの感謝、台東大学や附属高校陸上部の更なる強化、また、今後益々お互いの交流が盛んになることを願い、投擲種目で使われる円盤ややりなどの投擲器具を台東大学に寄贈させていただきました。

今回、たくさんの方々のご協力をいただき、合宿は大成功に終わることができました。普段とは異なる環境下での強化合宿は学生たちにとって多くの発見や学びがあったと思います。これらの経験を活かし、2017シーズンでは良い結果が残せるように日々取り組んでいきたいと思っています。

【報告：陸上競技部コーチ 講師 宮崎 利勝】



名取部長（前列左）から台東大学へ投擲器具が寄贈されました



台東大学附属高校陸上部の皆さんとの記念写真

今年度で退職される方々の送別の会が行われました

今年度を持って退職される方々の送別の会が3月31日に行われました。会には退職される駒板公一さん、雁平栄さん、小室良太郎さん、小池壽雄さん、山本幹男さん、古山彰さんの6名が出席され、吉田龍哉事務局長が「これまでの間、本当にお疲れ様でした。今後の人生も楽しんでください。」と挨拶されたあと、6名の方々からもそれぞれご挨拶をいただきました。

本日の送別の会にご出席された皆様をはじめ、退職された皆様方には健康にご留意され、益々お元氣でご活躍されることをお祈りいたします。



ご退職された6名の方々